921.4-Su96ウ
1200500759573
14
96

92.14
Su96

42882

文學博士鈴木虎雄著

白樂天詩解

新樂府 坿 秦中吟

弘文堂刊行

昭和二年

531-96

例言

一本書は今年八月京都帝國大學夏期講演會に於て講義せる白樂天の「新樂府」（當時時間の都合により講義未了の篇あり）全部五十篇、及び同作者の「秦中吟」十首の講義を收む。

一本書詩篇の正文は清の康熙年間汪立名の編せる「白香山詩集」を用ゐたり。

一余は本詩を講せんが爲め別に「注」及び「考異」を作る。その必要なる部分は講義に於て引用せり。文字は文義の通ずる所はなるべくそのまゝ汪本に從ひ、その不通の所に至て異本を取れり、而して必しも書名を記せざるは、簡便に從ふなり。「秦中吟」の考異を附載せるは其の量多からざるを以てなり。「新樂府」の考異は他日機會あらば亦附載せんと欲するも今は之を省略せり。

一本書の前編として白居易年譜略　白居易略傳　白樂天の詩說　白樂天の詩

等を錄せり。此等は余が初學者をして白氏の事歷と製作との大要を知らしめんがため嘗て記し置けるものにして特に本書の爲めにせるものに非れども、白氏の全製作と新樂府・秦中吟・との關係を知るに便なるべしと思考せるを以て之を收錄せり。「白樂天の詩」の章中の「詩風一般」、「五言古詩」、「七言古詩」等の項は「新樂府を講ずるにあたりて」と相俟ちて余の意見の存する所を補足するに足れり。

一隨筆、詩話、選本類の中に散見する外古來白詩には注釋なし。余の淺陋を以て敢て講解の任に當る、誤謬の尠からざらんことを恐る。博雅の士幸に遐棄せずして是正の鴻惠を垂れられんことを望む。

大正十五年八月

著者誌

例言
目次

前編

白居易年譜略……一
白居易略傳……六
白樂天の詩說……一三
白樂天の詩……一六
一、詩風一般……一六
二、樂天の五言古詩……一八
三、樂天の七言古詩……二一
四、樂天の近體詩……二六
(一)五言律詩……二六
(二)七言律詩……二七
(三)五七言絕句……二八

五、樂天と國文學……二九

本編

新樂府講義……三三
新樂府を講ずるにあたりて……三三
新樂府上……三八
新樂府序……三八
第一　七德舞……四一
第二　法曲……四八
第三　二王後……五三
第四　海漫漫……五六
第五　立部伎……六一
第六　華原磬……六五
第七　上陽人……七〇
第八　胡旋女……七七
第九　折臂翁……八二
第十　太行路……九〇
第十一　司天臺……九六
第十二　捕蝗……九九
第十三　昆明春……一〇三
第十四　城鹽州……一〇九
第十五　道州民……一一六
第十六　馴犀……一二〇
第十七　五絃彈……一二六
第十八　甞子朝……一三三
第十九　驃國樂……一四〇
第二十　縛戎人……一四七
新樂府下……一五六
第二十一　驪宮高……一五六
第二十二　百鍊鏡……一六〇
第二十三　青石……一六四
第二十四　兩朱閣……一六八
第二十五　西涼伎……一七二
第二十六　八駿圖……一七九
第二十七　澗底松……一八四

第二十八、牡丹芳……一八七
第二十九　紅線毯……一九五
第三十　杜陵叟……一九九
第三十一　綾……二〇二
第三十二、賣炭翁……二〇六
第三十三　母別子……二一〇
第三十四　陰山道……二一四
第三十五　時世妝……二一九
第三十六、李夫人……二二三
第三十七　陵園妾……二二八
第三十八　驪商婦……二三四
第三十九　杏爲梁……二三八
第四十　井底引銀瓶……二四二
第四十一　官牛……二四九
第四十二　紫毫筆……二五一
第四十三　隋堤柳……二五四
第四十四　草茫茫……二六〇
第四十五、古冢狐……二六四

第四十六　黑潭龍……二六七
第四十七　天可度……二七〇
第四十八、秦吉了……二七二
第四十九　鴉九劍……二七五
第五十　采詩官……二七八

附錄

秦中吟講義

序……二八五
第一　議婚……二八五
第二　重賦……二九六
第三　傷宅……二九〇
第四　傷友……三〇一
第五　不致仕……三〇五
第六　立碑……三〇九
第七　輕肥……三一三
第八　五絃……三一六
第九　歌舞……三一九

白樂天詩解〔前編〕

目次畢

第十一買　花……三二
秦中吟考異……三六

白居易年譜略

日本年代	支那年代	西洋紀元	年齢	紀事
光仁天皇寶龜三年	代宗太曆七年壬子	七七二	一歲	鄭州新鄭縣ニ生ル 父季庚開元十七年生、貞元十年卒、年六十六、 母顔川ノ陳氏、天寶十四載生、太曆四年季庚ニ嫁ス、 元和六年卒、年五十七、 白居易生ルヽトキ季庚四十四歲、陳氏十八歲、
寶龜七年	太曆十一年丙辰	七七六	五歲	詩ヲ爲クルコトヲ學ブ、
寶龜十一年	德宗建中元年庚申	七八〇	九歲	父季庚徐州彭城ノ令トナル、
桓武天皇延曆二年	建中四年癸亥	七八三	十二歲	朱泚亂ヲ作ス、帝奉天ニ如ク、
延曆三年	興元元年甲子	七八四	十三歲	
延曆四年	貞元元年乙丑	七八五	十四歲	
五年	二年丙寅	七八六	十五歲	淮西ノ將陣仙奇、李希烈ヲ殺シテ降ル、以テ節度使トナス、七月、吳少誠仙奇ヲ殺ス、少誠ヲ以テ留後トナス、 居易年十四五、難ヲ避ケテ蘇杭ノ間ニ旅ス、
六年	三年丁卯	七八七	十六歲	初メテ長安ニ至リ、顧況ニ見ユ、
十三年	十年甲戌	七九四	廿三歲	父季庚襄陽ノ官舍ニ卒ス、

十七年		十四年戊寅	七九八	廿七歲
十九年		十六年庚辰		廿九歲
二十年		十七年辛巳		三十歲
廿一年		十八年壬午	八〇二	卅一歲
廿二年		十九年癸未	八〇三	卅二歲
廿三年	順宗貞元二十一年、八月改元、	二十年甲申	八〇四	卅三歲
廿四年	永貞元年乙酉		八〇五	卅四歲
平城天皇大同元年	憲宗元和元年丙戌		八〇六	卅五歲
二年		二年丁亥	八〇七	卅六歲
三年		三年戊子	八〇八	卅七歲
四年		四年己丑	八〇九	卅八歲

兄幼文浮梁ノ主簿トナル、隨テ行ク、宣州ノ試ニ中ル、
二日、蘇郡ガ下ニテ及第ス、第四人ナリ、
秘珣珊選部ヲ領ス、居易試判拔萃科ニ及第シ、校書郎ヲ授ケラル、
母安常樂里ノ故ノ關相國ノ東亭ニ居ル、
校書郎タリ、家ヲ秦中ニ移シ渭上ニト居ス、
正月憲宗崩シ、順宗位ニ即ク、風痺ノ故ヲ以テ韋執誼王叔文等事ヲ用ウ、八月、順宗位ヲ太子ニ傳ヘ、憲宗位ニ即ク、
正月甲申、順宗崩ズ、
居易、才識兼茂明於體用科ニ應ジ、策四等ニ入ル、盩厔ノ尉ニ除セラル、
盩厔ノ尉ヨリ集賢校理ニ移ル、十一月翰林學士ヲ授ケラル、
四月、左拾遺ニ除セラル、上疏シテ王鍔ガ賂モテ宰相ヲ謀ルヲ禽ズ、妻杜氏ヲ娶ルハ此歲若クハ前歲ニアリ、楊氏ハ杜新士ガ從父妹ナリ、
久シク旱ス、智雨詩、論讀魏徵傳第狀、新樂府五十篇、等アリ、但シ新樂府ハ必シモ此歲一時ノ作ニアラズ、金鑒子生ル、

嵯峨天皇弘仁元年		五年庚寅	八一〇	卅九歲
二年		六年辛卯	八一一	四十歲
五年		九年甲子	八一二	四十三歲
六年		十年乙未	八一五	四十四歲
七年		十一年丙申	八一六	四十五歲
八年		十二年丁酉	八一七	四十六歲
九年		十三年戊戌	八一八	四十七歲
十年		十四年己亥	八一九	四十八歲
十一年		十五年庚子	八二〇	四十九歲
十二年	穆宗長慶元年辛丑、正月改元、		八二一	五十歲
十三年		二年壬寅	八二二	五十一歲

上疏シテ元稹ヲ救ハントス、五月京兆戸曹參軍ニ除セラル、
秦中吟アリ、秦中吟モ亦タ必シモ一時ノ作ニアラズ、
四月母ノ憂ニ丁リ、退テ渭上ニ居ル、
冬入朝、太子左贊善大夫ニ拜セラル、
秋、悟眞寺ニ遊ブ、詩アリ、
正月吳元濟反ス、
上疏シテ、武元衡ヲ刺セル賊ヲ捕ヘント請フ、
秋末冬初、江州司馬ニ遷サル、
江州ニ在リ、琵琶行アリ、
廬山ノ草堂ヲ築ク、
李愬、吳元濟ヲ擒ニス、
十二月、忠州刺史ニ除セラル、
二月、忠州ニ到ル、
正月憲宗暴カニ崩ズ、閏月穆宗位ニ即ク、冬、居易忠州ヨリ召還、尙書司門員外郎ニ拜セラレ、主客司郎中知制誥ニ轉ズ、
朝散大夫ヲ加ヘラレ始テ緋ヲ著ス、上柱國ニ轉ズ、中書舍人知制誥ニ除セラル、
李宗閔、李程裕ノ黨爭起ル、
元稹同平章事トナル、

十四年	三年癸卯	八二三	五十二歳	居易外任ヲ求メ、七月杭州刺史ニ除セラル、
淳和天皇天長元年	四年甲辰	八二四	五十三歳	冬、元稹越州刺史ニ移ル、
				五月、杭州ヲ去ル、左庶子ニ除セラレ、
				東都ニ分司ス、洛陽ノ履[illegible]里ニ於テ裴馮ノ宅ヲ得テ之ニ居ル、冬、白氏長慶集成ル、
二年	敬宗寶曆元年乙巳 正月改元、	八二五	五十四歳	三月、蘇州刺史ニ除セラル、五月任ニ到ル、
三年	二年丙午	八二六	五十五歳	病ヲ以テ官ヲ免ス、
四年	文宗太和元年丁未 正月改元、	八二七	五十六歳	三月、徵サレテ秘書監ニ拜セラル、
五年	二年戊申	八二八	五十七歳	刑部侍郎ヲ授ケラル、
六年	三年己酉	八二九	五十八歳	二李ノ黨爭起ル、東ニ歸ル、太子賓客ヲ以テ東都ニ分司ス、此ヨリ復タ出デズ、
八年	五年辛亥	八三一	六十歳	河南尹ニ除セラル、
十年	七年癸丑	八三三	六十二歳	四月、河南尹ヲ免ゼラル、再ビ賓客ヲ授ケラレ分司ス、
仁明天皇承和二年	九年乙卯	八三五	六十四歳	
三年	開成元年丙辰 正月改元、	八三六	六十五歳	同州刺史ノ命ヲ受ク、拜セズ、太子少傅ニ改メラル、分司ス、馮翊縣侯ニ進ム、
六年	四年己未	八三九	六十八歳	十月風痺ヲ得、妓ヲ放ツ、
七年	五年庚申	八四〇	六十九歳	正月帝崩ズ、

八年	武宗會昌元年辛酉 正月改元、	八四一	七十歳	太子少傅ヲ懇メ、刑部尚書ヲ以テ致仕ス、
九年	二年壬戌	八四二	七十一歳	三月、七老會ヲナシ、九老圖ヲ爲クル、夏、白氏文集七十五卷成ル、
十二年	五年乙丑	八四五	七十四歳	
十三年	六年丙寅	八四六	七十五歳	三月帝崩ジ、宣宗位ニ卽ク、八月、居易卒ス、尚書右僕射ヲ贈ラル、十一月、龍門ニ葬ル、

白居易略傳

唐代宗太曆七年 皇朝光仁天皇寶龜三年、西洋紀元七七二、 生、

武宗會昌六年 皇朝仁明天皇承和十三年、西洋紀元八四六、 卒、

白居易字は樂天、香山居士・醉吟先生・等の稱あり。白氏の祖先は羋（史記楚世家索隱、羋音彌是反、羋羊角也、）姓にして春秋時代の楚の公族たり、白公勝といふもの是なり。其の子孫は更に秦に入り名將を出だす、白起は其の一人なり。白起死を賜ふ。始皇其の功を思ひ起が子仲を太原に封ず、因て太原（今の山西省太原府）の人となる。白仲の後ち二十六代にして白建あり、北齊の五兵尚書たり。實に居易が七世の祖にあたる。建は田を韓城（今の陝西省同州府韓城縣）に賜ひ、子孫籍を同州に移す。建より順次に志通 志喜を經て温（唐關內道華州下邽縣、今陝西省西安府渭南縣東北九十餘里）に至り下邦（居易自撰墓誌に見ゆ）に徙り、下邦の人となる。温の第六子を鍠（字確鍾）といふ。鞏縣の令となる。善く文を屬り、五言詩に工に、集十卷ありしといふ（故鞏縣令白府君墓狀に見ゆ）鍠は居易の祖父にあたる。鍠の長子を季庚といふ。季庚は玄宗の天寶の末に明經より出身し、後ち官は襄州別駕に至れり。季庚（開元十七年生、貞元十年卒、年六十六、七二九至七九四、）は居易の父なり。居易の母は潁川の陳氏（天寶十四載生、元和六年卒、年五十七、七五五至八一一、）なり、太曆四年（七六九）年十五歲にして季庚に嫁す。居易は唐の代宗太曆七年（七七二）即ち杜甫の死後二年、韓愈の生後四年、我朝の光仁天皇の寶龜三年、正月二十日を以て河南の鄭州新鄭縣東郭の宅に生る、（居易自撰墓誌に見ゆ）父季庚四十四歲、母陳氏十八歲なり。

居易生れて六七月にして「之無」の字を默識す、（興元九書にみゆ）五六歲にして詩を爲くることを學ぶ、同上、九歲にして略ぼ聲韻を識る（同上。）十一歲の頃滎陽に在り。十四五歲の頃蘇州杭州等に往來す。十五六歲の頃始て長安に至り文を袖にして顧況に謁す、況、其の「賦得古原草送別」の詩の野火燒不盡 春風吹又生 の句を見て大に歎賞す。詩に曰く

離離原上草　一歲一枯榮　野火燒不盡　春風吹又生
遠芳侵古道　晴翠接荒城　又送王孫去　萋萋滿別情

と。十七歲の時「王昭君」の詩を賦す、詩に曰く

漢使卻回憑寄語　黃金何日贖蛾眉
君王若問妾顏色　莫道不如宮裡時

と。優游不迫 忠厚の情を見る。未だ弱冠ならずして居易の詩才は既に發揚せり。德宗の貞元十年（七九四）居易二十三歲にして其父を喪ふ。實に我が桓武天皇平安奠都の年に當る（延曆十三年、）當時

襄州に在りしならん。貞元十六年（八〇〇）高郢が下にて進士の試驗に及第す。十八年（八〇二）秘書省校書郎を授けられ、翌年長安の常樂里、故關相國の東亭に居る。翌年家を秦中に移し、渭水の上りに居を卜す。（居易の未仕以前に家族は多く徐州に在りしといふ）憲宗元和元年（八〇六、居易年三十五歲）才識兼茂・明於體用科に應じ、策、四等に入り、十二月盩厔（チウチウ）縣の尉となる。「長恨歌」は此時に成る、（陳鴻の長恨歌傳の終りにみゆ）明年集賢校理となり、翰林學士となる。三年左拾遺となり、屢〻直諫をなす。四年「新樂府」五十篇、「賀雨」の詩、等を作る、（製作の年時に關する說は別に見ゆ）明年友人元稹が監察御史より江陵府士曹掾に謫せらるゝを救はんとして納れられず、是年五月京兆府戶曹參軍に改めらる。是の時「秦中吟」十首（製作年時の說は別に見ゆ）及び元稹との和答の詩作あり。翌六年四月母陳氏を喪ひ、退きて下邽に居る、（卽ち渭上なり。題川縣君事狀に云ふ、陳氏は長安宣平里の第に沒すと、）八年、「效陶潛體」十六首あり。九年秋、「遊悟眞寺」百三十韻あり。冬、入朝して太子左贊善大夫となる。十年七月、刺客あり宰相武元衡を殺す、居易急に賊を捕へ國恥を雪ぐべきことを上疏す。時の宰相、居易が東宮の官にして諫官に先ちて事を論せるを惡む、又或は言ふ、居易の母は花を看るに因て井に墮ちて死せるに、居易、賞花、及び新井の詩を作る、甚だ名敎を傷る、と。是に由て貶せられて江表の刺史とせられんとす。中書舍人王涯更に居易の郡を治めしむべからざるを論ずるあり、ために居易に更に降されて江州司馬とせらる。此年より四年間江州（今の江西省九江府）に

在り。「琵琶行」は十一年の秋に成れり。十二年廬山の香爐峰下に草堂を築く。記文及び諸詩あり。十三年の暮、忠州刺史に任せられ翌春舟に乘じて江を溯り、三月夷陵（今湖北、荊州府夷陵州、）に至る、會ま元稹（通州より虢州長史に轉ず）の來り過ぐるにあひ弟行簡と三人共に黃牛峽口の石洞に遊ぶ、「三遊洞記」あり。忠州の任にありて「東坡種花」の詩あり。十五年忠州より召還せられ尙書司門員外郎となり、主客司郎中・知制誥に轉ず。翌年穆宗の長慶元年（八二一）朝散大夫を加へられ緋衣を著す、又た上柱國に轉じ、中書舍人・知制誥に除せらる。時に中書舍人李宗閔、試驗官錢徽に託し己の親戚某を及第せしむ。李德裕は宗閔が嘗て其父李吉甫を彈劾せしことを怨みしがこの時李德裕　李紳　元稹は翰林にありて帝に寵あり、之を帝に訴ふ。帝乃ち白居易　王起　に命じて再試驗を行はしむ。是卽ち宗閔・德裕・二李の爭ひの始なり。惹きて牛僧孺、宗閔と結托して德裕に對し、牛李の爭ひとなり、朝臣各〻その一方に結び朋黨の禍絕えざること四十餘年。翌年居易は時弊を論じて用ゐられず、外任を求めて十月杭州刺史となる。是歲初、元稹は同平章事たりしが之を罷む。翌年牛僧孺同平章事となり稹は出されて浙東觀察・越州刺史（越州は今の浙江省紹興府）とせらる。元白二人は互に境を接せしかば詩筒相往來して旬日を隔てざるの有樣なりし。白の治績としては錢塘湖に堤防を築き其水を溢れしめず、兼て灌漑に便ならしめ、又李泌の鑿ちし六井を浚渫せし等是なり。四年に任期滿

ち居易は太子左庶子に除せられ東都に分司す。洛陽の履道里に於て故の散騎常侍楊馮が宅を得て居る。「履道新居」二十韻の詩あり。翌年病を以て免す。文宗の太和元年（八二七）三月、召されて祕書監に拜せらる。十月皇帝の誕辰にあたり麟德殿に於て安國寺の沙門義休、太清宮の道士楊弘元と儒道佛三教に關する問答をなす、（白氏長慶集卷六十八に三教論衡あり、「舊唐書」には僧惟澄、道士趙常盈とす。）二年、刑部侍郎となる。三年、二李の黨事起る。居易太子賓客を以て東都に分司し出でず。六年、河南尹に除せらる、年六十なり。此年元稹武昌に卒す。七年、居易河南尹を罷め太子賓客を授けられ分司す。九年には政治上「甘露の變」と稱する李訓　鄭注の二人が宦官を誅せんとして失敗せし事件あり。王涯等の貴臣害に遇ふ。居易は恰も其の日香山寺に遊ぶ、事に感じて作れる詩あり、「當君白首同歸日　是我青山獨往時、及び麒麟作脯龍爲醢　何似泥中曳尾龜」の句あり、政變に遠かりて身の全きを喜ぶなり。開成元年（八三六）同州刺史に拜せられしも拜せず、太子少傅に改められ（居易を白傅といふは之に由る）分司し、馮翊縣侯に進む。四年、年六十八、風疾を得、乃ち家に畜ふる所の諸の妓女を放ち自ら豫め墓誌を作る、（舊唐書本傳に由る。即ち今集中にみゆる醉吟先生墓誌銘ならん、誌中の「會昌六年春秋七十有五」等の文字は後に增補せしものなるべし、）武宗の會昌二年、（八四二）太子少傅を罷め刑部尚書を以て致仕し、香山の僧如滿と香火の社を結び、白衣鳩杖、肩輿によりて往來す。自ら香山居士と稱す。是年秋友人劉禹錫（夢得）卒せり。五年三月、履道の宅に於て七老會を成す。胡果八十九歲、吉皎（新唐書皎を旼に作る）八十六、鄭據八十四、劉眞八十二、盧眞七十二、張渾七十四、白居易七十四、（居易の詩に七人五百七十歲といへり、以上の年數を合するに五百六十一歲なり、）狄兼謨　盧貞　は會に與りしも年七十に及ばざりしを以て詩に列せず。其夏更に洛中遺老李元爽百三十六、歸洛僧如滿九十五、を加へ、前の七老と共に其の形貌を寫して九老圖となせり、（參看白香山詩集補遺下、）翌會昌六年（皇朝仁明天皇承和十三年、八四六、）八月居易病みて卒す。年七十五、尚書右僕射を贈らる。（卒年月は李商隱撰する所の白公墓碑銘の序に見ゆ、舊唐書本傳に大中元年卒、時年七十六、とあるは誤る、）十一月、龍門に葬る、（舊唐書にいふ香山如滿師塔側に葬ると。龍門に葬ること李商隱所撰の墓碑銘による、又太平寰宇記に白居易の影堂は洛陽縣南二十里に在ることを記せり。洛に葬りしといふを事實とす。居易自撰の墓誌には華州下邽縣臨津里の北原に葬り先塋に祔すとあれども、是は生前自記の文なれば據りがたし、）

居易の妻は楊氏、楊穎士の從父妹（いとこ）なり。元和二年（居易三十六歲の時）には既に居易に嫁せしに似たり。（長慶集卷四十祭楊夫人文に依る、楊夫人は居易の夫人に非ず、）元和四年には金鑾なる女子を擧ぐ。金鑾は六年に三歲にて死せり、（白香山詩集卷九金鑾子晬日詩、卷十念金鑾子二首、卷十四病中哭金鑾子詩、等によりて推す、）其の後ち五十八歲（太和三年）に及び崔兒なる一男子を得しが三歲にして死せり。遂に子なし。楊氏との交情和諧なりしが如し。姪孫（姪の子をいふ）阿新を養ふ。李商隱所撰の墓誌に子景受とあるものは阿新なるか。居易自撰墓誌に　味道　景回　晦之　の三姪を記せり。阿新は其中の一人の子ならんか。

居易の弟行簡は主客郎中に至り、從弟敏中は太傅に至る。

白樂天の詩說

樂天の詩に對する持論は其の與元九書（舊唐書本傳、長慶集卷四十五、）に見ゆ。其の要旨を按ずるに、先づ六經に詩を首とするは聖人の天下を和平ならしむるは人心を感ぜしむるに在るを以てなりといひ、次に人心を感ぜしむるは言と聲によりて情を感ぜしむるによる、言は六義（風、雅、頌、比、賦、興）により、聲は五音によりて之を經緯す、是によりて能く人心を感ぜしめ和平を致すとなせり。是に於て詩は聖人が治世に必要なる具たり、六義の中特に風するの意義は最も肝要なる條件となる。樂天は此の思想を根柢として之を歷代に推論していふ、古代に於ては詩歌を聞きて上たるもの己の戒となせしが周衰へ秦興りては採詩の官も廢せられ、上たるもの詩を以て時政を補察せず、下たるもの歌を以て人情を洩導せず、此時より六義始て刓（カ）られたり、楚の騷・漢の五言に至りて離別を興するには雙鳧一雁を引きて喩となし、君子小人を諷するには香草惡鳥を引て比となす、古の風人の什が二三を得たり、此時よりして六義始て缺けたり。晉宋に至りて謝靈運は山水に溺れ陶淵明（ホウイマ、）は田園に放にし江淹鮑照の徒は更に此よりも狹く六義寖く微なり。下て梁陳にいたりては風雪を嘲り花草を弄するに過ぎず、詩句麗は則ち麗なりとも諷する所なし、六義盡く去れり。唐に

至り陳子昂に感遇詩二十首あり、鮑防に感興詩十五首あり、又李白杜甫の如き奇才あるも其の風雅比興を索むるときは十に一もなし。杜甫は傳ふべきもの千餘篇なるも新安吏　石壕吏　潼關吏　塞蘆子　留花門　及び朱門酒肉臭・路有凍死骨・の句等を撮すれば三四十首に過ぎず、杜甫すら此の如し況や杜に逮ばざるものをやと。是に於て樂天は其の詩道を以て任ずることを說き又己の重しとする所と世人の見る所と一致せざるを述べ、又其の詩篇約八百首を（一）諷諭詩、（二）閒適詩、（三）感傷詩、（四）雜律詩、等に分ちたることを說き、其の意を記して曰く

故僕志在兼濟　行在獨善　奉而始終之則爲道　言而發明之則爲詩　謂之諷諭詩　兼濟之志也　謂之閒適詩　獨善之義也　故覽僕詩　知僕之道焉　其餘雜律詩　或誘於一時一物　發於一笑一吟　率然成章　非平生所尙者　但以親朋合散之際　取其釋恨佐歡　今詮次之間　未能刪去　他時有爲我編集斯文者　略之可也

と。乃ち樂天に在りては詩は其の謂はゆる道を托するものなり、諷諭詩はその最も重んずる所にして之に次ぐものは閒適詩・感傷詩なり、彼の雜律詩の如きは之を刪るも可なりとせるなり。

樂天の持論なるものは此の如し。かゝる論旨は樂天のみならず支那の殆ど總ての詩人が之を信じ且唱ふる所のものなり。但だその實行する所の常にその論旨以外に逸出するを免れざるのみ。

樂天にしてその論旨を厲行せばその諷諭詩以外の詩は彼に取りて輕重をなすに足らざるものなり。隨て長根歌・琵琶行・の類は言ふを待たず其他の雜律詩皆之を删りて可なり此等を以て彼の詩を論ずることは彼にとりて累を增すものなり。此の意は樂天自身も嘗て已に之を言へり。曰く

今僕之詩　人所愛者　悉不過雜律詩與長根歌已下耳　時之所重　僕之所輕

と。長根歌已下とは頗る自ら之を賤むものに似たり、又彼は長根歌若くは秦中吟が歌妓によりて傳唱せられしことを記し、又或は長安より江西に至る三四千里の間、鄉校、佛寺、逆旅、行舟、の中に其の詩を題するものあり、士庶僧徒　孺婦處女の口にも其詩を詠ずるものあるをのべ

此誠雕蟲之戲　不足爲多　然今時俗所重　正在此耳

といひ、其の雕蟲の技の世俗に喝采せらるゝを以て迷惑とし、其の重しとする所の賞揚せられざるを遺憾とする狀あり。然れども長根歌・秦中吟は彼之に對して一篇長根有風情、十首秦吟近正聲、の語あり、寧ろその得意なるべき作にして其の世俗に賞せらるゝを慨すべき性質のものに非ず。又風雪を嘲り花草を弄ぶの詞は、彼之を作らざりしか、然らず、彼の「詩に淫せる」醉吟先生傳中の語、無妨悅性情　詩解中の句　といへる、彼の詩決して諷諭に止まれるに非ず。蓋し詩は人情自然の聲なり、是を以て諷諭の一體に限らんとするは能ふべからざることにして樂天自らも之を守る能はざる所なり。樂天の論は要するに自己の體面を修飾せんと務めたるものといふべく、彼の有する眞相と相距ること遠し。樂天を論ずるものは彼の口にせる所と爲せる所とを區別するを要す。

白樂天の詩

一、詩風一般

中唐に於て詩を言ふものは必ず韓愈孟郊元稹白居易を擧ぐ。而して韓孟の險艱と元白の和平とは其の詩風全く異れり。清の趙翼之を辨じて曰く、

韓孟ハ奇警ヲ尚ビ務メテ人ノ敢テ言ハザル所ヲ言フ、元白ハ坦易ヲ尚ビ務メテ人ノ共ニ言ハント欲スル所ヲ言フ、試ニ平心ニシテ之ヲ論ゼンニ、詩ハ性情ニ本ク、當ニ性情ヲ以テ主トナスベシ、奇警ナル者ハ猶第詞句ノ間ニ在テ難ヲ爭ヒ險ヲ鬪ハシ人ヲシテ心ヲ蕩カシ目ヲ駭カシ敢テ逼リ視ザラ使ム、而カモ意味ハ或ハ少シ焉、坦易ナル者ハ多ク景ニ觸レテ情ヲ生ジ、事ニ因テ意ヲ起シ、眼前ノ景、口頭ノ語、自ラ能ク人ノ心脾ニ沁シ人ノ咀嚼ニ耐ヘタリ、此レ元白較韓孟ヨリモ勝レリ、世徒ニ輕俗ヲ以テ之ヲ訾ルハ此レ詩ヲ知ラザル者ナリ、

甌北詩話卷四

と。韓孟の果して元白より劣れるや否やは別の問題なるも、性情を主とし、口頭の語を以て景事

を敍するは確に元白、特に白氏の長ずる所なり。

「唐宋詩醇」に白詩を評して

蓋シ六義ノ旨ニ根柢シテ温厚和平ノ意ヲ失ハズ、杜市ノ雄渾蒼勁ヲ變ジテ流麗安詳ト爲シ、其ノ面貌ヲ襲ハズシテ其ノ神味ヲ得ル者ナリ、詩醇卷十九、白居易詩序論、（案ずるに此の評は沈德潛の樂天、忠レ君愛レ國、遇レ事迸レ諷、與二少陵一相同、特以二平易一近レ人、變二少陵之沈雄渾厚一、不レ襲二其貌一、而得二其神一也、の語に本く、）

といへるも能く其の長所を指摘せるものといふべし。

樂天の「和答詩」の序は元和五六年の交の作なり、其中に左の言あり、曰く

頃者、在二科試間一、常與二足下一同筆硯一、每下筆時、輒相顧語、患二其意太切而理太周一、故理太周則辭繁、意太切則言激、然與二足下一爲文、所長在二於此一、所病亦在二於此一、足下來序果有二詞犯文繁之說一、今僕所和者、猶前病也、待與二足下一相見日、各引所作、稍删其煩、而晦其義焉

と。此文は元和五年元稹が江陵に貶せられて後作れる詩を寄せたるに對し、樂天其詩に和し或は答へて、その總序として書きたるものなり、當日の製作について論ずと雖も更に溯て受驗當時の

往昔に及べり。而して其の言ふ所は　意切　理周　辭繁　言激　若くは詞犯文繁にして、他日相會するの日　刪煩　晦義　といひ、所長此に在ると共に所病も亦此に在りといふ。實に自ら知るものといふべし。卽ち彼等は如何に多くの言辭を費すとも意の切にして理の周ならんことを求めたるものにして、其の平易なる作は皦然たる自覺を以て意識的に爲されたるものなることを知るべし。蓋し樂天は若し之をして險艱の辭を爲さしむれば爲し能はざるものに非ず、然れども寧ろ求めて和平に近きしなり。又その口頭の語なるものも卒然として賦せるに非ずして舊句時時改詩解中句　の工夫より出でたるものなり。

二、樂天の五言古詩

樂天の五古中、其の自ら矜る所のものは諷諭に屬する「秦中吟」十首なり、此の詩樂天の自序には貞元元和の際に作るとし、汪立名は之を元和五年に係けたり、蓋し一時の作に非ず。十首は　議婚　重賦　傷宅　傷友　不致仕　立碑　輕肥　五絃　歌舞　買花　にして略〻其の題によりて其の意を察すべし。例へば「議婚」に於ては貧富孰の家より婦を娶るべきかを論じ、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晚孝於姑、といひ、「重賦」に於ては暴吏の誅求を論じ、貧民に同情して奪我身上暖、買爾眼前恩、といひ、其の他「立碑」に於ては平凡無德の輩が太公　仲尼の如く勳功を記されたる碑を立てられ、醇良の官吏が之に反して一片の碑碣だも無きことを憐み、輕肥　歌舞　買花　に於ては富貴權豪の奢侈を諷する等、其の言を淺くし其の意を深くし、言ふ者罪なく聞く者以て戒むるに足ることを主とせり。

同じく諷諭に屬して忠愛の意ありと評せらるゝものは「賀雨」の詩なり。元和四年閏三月久しく旱せしを以て憲宗德音を降さんとせしとき、樂天建言して江淮の賦を免じ、多く宮女を放還せんことを請ふ。憲宗之に從ふ。詔下りて雨ふる。詩は之を賀せるなり。情意剴切、詞氣典重、樂天にも亦此種の詩あるかを思はしむ。

閒適の詩に於ては、效陶潛體十六首あり。元和八年、渭上閒居の時に成る。樂天は恬淡閒適の趣は之を其の老佛の敎を奉じ知足安分を旨とせるより得たる所なるも、之を托する所の詩風は陶淵明及び韋應物より得たるが如し。彼嘗ていふ、時時自吟咏、吟罷有所思、蘇州韋のこと及彭澤陶のこと與我不同時、自吟拙什　又いふ、常愛陶彭澤　文思何高玄　又怪韋蘇州　詩情亦淸閒　穎濟陽樓　と。以て陶韋の二人に深く私淑せるを知る。彼は未だ韋の如く幽玄なる能はずと雖も陶の眞率なる所は頗る之を得たり。唐に於ては杜甫を除けば樂天は最も淵明に近き者の一人なり。「秋

遊原上」亦甚だ陶杜に近し。

樂天の敍情詩に「續古詩」十首あり。蓋し古詩十九首を學ぶ。或は男女間の憂思の情を敍し、或は男女に托して君臣の際を述ぶ。又、送別・行旅・遊子・忠臣の情を述ぶるもあり。孰も高古哀婉、彼の陳子昂　李白　の「古風」と雖も過ぐること能はず。此等の作に對しては決して白俗の評を下すことを得ず。

「和答詩」十首は元稹の詩に和し或は答ふるものなるが、實に堂々たる大作にして、頗る筆路圓熟の妙を見る。

敍景敍事の詩としては「遊悟眞寺詩」一百三十韻あり。杜甫の「北征」、韓愈の「南山」と共に唐代五古の三大篇を爲す。「北征」は敍情中に景事を點綴せるものなり。「南山」と此篇とは專ら敍景を主とす。「南山」の刻畫險奇と此詩の清秀工整とは一對の佳觀を爲す。此の篇凡そ五日間の遊を記して此の如く步驟井然、一絲紊れざらしむるは非凡の手腕に待たざる能はず、「詩醇」に千巖競秀萬壑爭流といひ、謝靈運遊山詩　柳宗元山水記　素稱奇構　以彼方此　不無廣狹之別矣といへる必しも溢美の言と爲さず。特に趙翼が「北征・南山・ハ皆仄韻ヲ用キシガ故ニ氣力健舉ス、此ハ但ダ平韻ヲ用キテ逐層鋪敍シ沛然餘リアリ一語ノ冗弱ナキハ更ニ難キヲ覺ユ」といへるもの、詩の技術に於て深解ある言なりといふべし。

三、樂天の七言古詩

樂天の七古、亦其の自ら矜る所のものは諷諭中の「新樂府」五十篇なり。「新樂府」の作は題下の注、「樂府詩集」の宋の郭茂倩の記する所、汪立名の年譜、みな元和四年に在りとせらる。然れども蓋し一時の作に非ず、（說は新樂府講義の各篇の條を見て知るべし）樂天の自序に、凡そ千二百五十二言、斷じて五十篇となすといへり。又其の作詩の目的を說きて曰く、「爲君　爲臣　爲民　爲物　爲事而作　不爲文而作也」と。樂天其の「策林」第六十九に於て、「採詩以補察時政」を論じ、古來王者は詩を採ることによりて民情に通じ、其の政を善くせることを論せり。此の「新樂府」の最後の篇「採詩官」に於ても亦同じ意を述べ、「君兮君兮願聽此　欲開壅蔽達人情　先向歌詩求諷刺」といへり。是卽ち作詩の本意なり。この本意や彼の「秦中吟」に於けると同じ。今余輩の此等の詩を賞するは彼の本意の此の如くなるが故のみには非ず。其の詩の能く人情を穿ち景物を敍し詩としての技巧亦至れるを以てなり。余は諸作中に於ては特に其の敍事詩として長ずるものあるを感ず。此點に於ては獨り其の諷諭に屬するを以て之を取るに非ず、彼の長恨歌　琵琶行　を取ると同じ

主義に於て之を取るものなり。樂天は「採詩官」に於て、秦より隋に至る間に郊廟歌　樂府　あるも見るに足らざることを述べ、郊廟登歌讃君美　樂府豔詞悅君意　若求諷諭規刺言　萬句千章無一字　と嘗れり。然れども試みに諷諭規刺の言なりとも詩的價値なからしめば何の取るべき所かあらん。余輩は寧ろ樂府の豔詞も取るべきは取るものなり。今、樂天が「文の爲めにして作らざりしもの」を文の爲めにして取らんと欲するはいたく作者の口に唱ふる所に戻れるものなることを知る。

樂天の技量の卓越せる、五十篇の多きも殆ど篇々皆興味あり。されど敍事詩として特に勝れるものは　上陽人　折臂翁　縛戎人　賣炭翁　なり。男女の間人情の反覆を述べて訓戒とせるは太行路　母別子　井底引銀瓶　なり、太行路　井底引銀瓶　の二詩は寧ろ敎訓的に傾く、文學的價値は母別子に若かず。諷刺の面白きは　黑潭龍　なり。文辭の見るべきは　驪宮高　隋堤柳　草茫茫　なり。此等の作は諷刺訓戒の言を添へたるあり、添へずして敍事中自ら其意を寓せるあり。敍事中自ら情を帶ぶるものに至りて最も人を感せしむ。

元稹も亦樂天の「新樂府」中の十三篇と同題なるものを賦せり。元稹の作目は　上陽白髮人　華原磬　五絃彈　西涼伎　法曲　馴犀　立部伎　驃國樂　胡旋女　蠻子朝　縛戎人　陰山道　八駿圖なり。樂天の作の第七　第六　第十七　第廿五　第二　第十六　第五　第十九　第八　第十八　第二十　第三十四　第二十六　に相當せり。（郭氏「樂府詩集」によれば元稹の作は十五首ありしが失はれて十二首となり、郭氏別に「八駿圖」を收めて十三首とせしなり）元稹の「和李校書新題樂府十二首」（上陽白髮人より陰山道に至る十二首なり、元氏長慶集卷二十四、）の序に依るときは、新題樂府なるものを作り始めしものは元白の親友なる李紳（字は公垂）なり。紳の詩は二十首あり、元稹其の十五首に和し二篇逸す。李紳の此作は今一首も存せず、惜むべし。されども紳が七古「悲善才」一篇を見ればその詩品元白と伯仲せり。蓋し李紳先づ唱へて元白之に和し、白は更に其數を增して五十篇となせるものに似たり。

支那の敍事詩は漢に盛に晉梁に數篇を見る。唐に至り玄宗時代に崔顥（顥に江畔老人怨、邯鄲宮人怨、の七古あり、中唐敍事詩の先驅をなす、）杜甫ありて再び之を見る。而して元白の徒に至り最も流行す。其の原因は「傳奇」の流行と相待つものゝ如し。唐代の傳奇卽ち小說は武后時代より既に行はるゝも中唐以後最も盛なり、元稹は現に「會眞記」の作者として知られ、李紳は之に繫くるに崔鶯鶯歌を以てせり。樂天は先づ「長恨歌」を作りて陳鴻は之に「長恨歌傳」を繫けたり。是傳奇が單獨にも行はれしと共に、或は傳奇的事實を取りて之を詩にも作りし證なり。「新樂府」は敍事詩なる形式を用ゐて偶〻之を諷諭勸戒

といへる道德上の目的に之を向けたるなり。諷諭と否とに關せず傳奇的事實を歌ふことは最も中唐人の嗜好に合せるものなり。元白の敍事詩は恰も此の嗜好に投せるものなり、特に彼等の取れる形式は唐代の詩の特色といふべき七言歌行の體にして又其の筆致の和平流麗なるに於ては、其の一世の稱讃を荷ひしこと怪むに足らず。

「新樂府」以外に於ける樂天の七古雄篇は言ふまでもなく「長恨歌」・「琵琶行」なり。

「長恨歌」は唐の玄宗と楊貴妃との情事を敍す。長恨歌の價値は樂天の自ら言へる「有風情」の三字盡し之を盡くせり。同時の陳鴻之に傳し樂天の作意を推し、意者（フニ）不但感其ノ事（シタルノミナラズ）亦欲懲（スルヲ）尤物（ノ）窒亂階（ノ）垂于將來（ニ）也　と言へるも是例の常套語にして論ずるに足らず。反對に却て此を以て誨淫（ルノ）の詩となすものあり、樂天自身も之を以て世に賞せらるゝを恥ぢしといふを以てもかゝる作意の有無は疑ふべく、有りしとするも失敗せしものなり。此の作に取る所は楊貴妃の入內・侍宴より終りの方士訪問まで可なりに長く變化せる事實を苦もなく而白く敍し去りたるに存す。其の生彩ある處を言はゞ、玄宗蜀より長安に歸り來り西宮・南苑に居り、春秋の景物に對して貴妃を思ふ處、仙山に於て方士の訪問に對して貴妃の寢室よりあらはるゝ處、最後の貴妃口中より綿々の情を述ぶる處、等是なり。是皆具體的の描寫を試み最も樂天の所長を發揮せり。玄宗貴妃二人の情緒を寫すは則ち題目「長恨」を稱する所、作詩の主眼たらずんばあらず。之を寫すに成功せるは則ち本詩の生命ある所以なるべし。其の短所を言はゞ上記以外の處に於て多く事件の徑路（筋書き）のみを平平に敍し去り描寫の具體的ならざるに在り。其の弊や冗漫　平板、敍事詩に於て通例陷り易き弊竇に陷れり。

「琵琶行」は元和十一年の秋、樂天江州司馬たりしとき作る。秋夜月明に乘じ客を送りて江頭に至る。忽ち舟中琵琶を彈ずるものあるを聞く。近て之を問へば固と京城の女にして玄宗敎坊中の一人なりと。樂天語を聞き往時を懷ひ、樂聲をきゝ今日零落の感に堪へず、因て其の顚末と感ずる所を敍す。蓋し其の事や已に詩的なり、多感なる樂天にして此境に遇ふ、發して詩とならざるを得ず。此詩は商婦と會談の狀を述べ、琵琶の音聲を形容する等敍事的なりと雖も商婦と我との飄零の感を敍することを主とし、之を讀む者は自ら彼の嘈嘈たる絃聲のために我が自己幽愁の情を攪亂せらるゝ思あり、是卽ち敍事の態度を取りつゝ敍情に成功せるものにして、長恨歌をよみて他人の身況をきくの感あるとは大に同じからず。

樂天は聲律歌舞を解す。故に之に關して屢〻佳篇あり。琵琶行と類せるものには「江南遇天寶樂叟」あり。此作は樂叟をして天寶の盛時と今日の荒凉たる驪山の狀とを物語らしむ、宛も元稹

の「連昌宮詞」と相似たり。敍事の曲折「琵琶行」の如くならず、修辭の妙亦「連昌宮」に及ばずと雖も哀婉凄麗の致を極む。舞を寫せる者には「霓裳羽衣歌」あり、元稹の作に和せるものなり、初に憲宗に侍して此舞を見しときの節奏形容を敍し、次に朝廷を去り自ら妓を選び之に此舞を敎ふることを敍し、次に微之が此舞の譜を寄せしことを述べ、遂に其の和詩の意と此舞の人間に傳へざる可らざることゝをのべて結末とせり。（拙著「支那文學研究」一九三頁參照）此詩は敍事若くは議論を以て貫くが故に人をして感歎咨嗟せしむることなきも、前段舞態の形容を寫すの妙に至ては樂天獨得と言ふも可なり。樂を聞くものには「小童薛陽陶吹」「栗歌」あり。音聲を巧に形容せり。後代明の高啓（青邱、清の吳偉業（梅村）の徒、歌舞を寫すに妙と稱せらるゝも、其の粉本は皆樂天の此種の作に在り。

四、樂天の近體詩

(一) 五言律詩

律詩に於て樂天は五言律より七言律に於て長せるが如し。但し五言の長律、「代書一百韻寄微之」・「渭村退居詩一百韻」・「東南行一百韻」・其他數十韻の大作に至りては固より他に比すべきもの少し。五言律は和平にして意の欲する所に隨ふも高雅の致に乏し。

五言律に於て每首同句を用ゐたる連作多し。例へば何處春深好の句を用ゐて和春深二十首あり。又た何處難忘酒七首、不如來飲酒七首、等あり。一格といふべし。

「夜送孟司功」一首は樂天の五言律中最も格調に於て勝れるものなるべし、但彼の詩に於ては變調なり。

(二) 七言律詩

樂天の七言律は閒淡　蕭洒　柔婉　清麗　を以て勝る。其の筆致の自在なるは行雲流水の如く、風神綽約たるは楊柳の春風に舞ふが如し。時として安分知足の語あり、時として身世感愴の語あり、時として風景に流連する語あり、皆其の筆を著くる平平淡淡、宛も無人の境を行くが如し。其の詩境としては殆ど常人の日常經驗する所のものを取りて容易に之を出だし、花鳥風月を點綴するに於ても、意は經營の餘に成りしならんも語は毫も刻劃の痕なし。句法亦意匠に從て變化し、種々の形式を用ゐ殆ど聲律のために縛せられざるに似たり。

七言律は江州以後佳篇多く杭州時代は特に多きに似たり。今樂天一流の特色を見るべきもの數篇を示さば、「香爐峰下卜居」の中なる「五架三間」・「日高睡足」の二首、「南湖早春」・「錢塘湖春行」・「西湖晚歸」・等其の一斑を窺ふべく、更に「餘杭形勝」・「江樓夕望」・「江樓晚望」・「春題湖上」　等幾

多の妙作あり。

樂天の七言律は杜甫の如く格律森嚴なるを以て自ら居らず、然れども自ら森嚴なるものなきに非ず、行次夏口先寄李大夫　題岳陽樓　は格調を以て勝るものなり。

格調をも保持し、風神を失はず、樂天の所長を顯はせるものは、敍情に於て「對月憶元九」、敍景に於て「杭州春望」なるべし。余は此の二首を樂天の七律の壓卷なりとなす。

樂天に七言六句の律詩あり。他集には多く見ざる所なり。「縣西郊秋寄贈馬造」は其の佳なるものなり。

(三)　五七言絶句

絶句に於ても樂天は五言よりは七言に長せり。七絶に於て余が最も優れりと信ずるものは「王昭君」漢使卻回・「長洲苑」・「梨園弟子」・にして中晩唐詩の妙處を代表すと信ず。

之に次では敍情に於て「燕子樓」滿窓明月・「同李十一醉憶元九」、敍景に於ては「楊柳枝詞」の依依嫋嫋・紅版江橋・一樹春風・等。景情相帶ぶるものには「望江州」・「建昌江」、更に下りて謂はゆる樂天流の敍景詩に於ては「舊房」・「村夜」・「暮江吟」・「府西池」・「贈江客」・「浦中夜泊」・等。專ら敍景ならざるあれども自然及び人心の幾微に觸るゝあるに於ては一なり。五言絶に於ては「閨怨詞」

珠箔籠寒月を推すべし。

五、樂天と國文學

樂天の詩は平易にして流暢なり、此、其の傳播を廣くしたる所以にして當時一部の「長慶集」は支那本土は固より遠く高麗及び我國に傳來し、平安朝の文學に大なる影響を與へたり。我國當時の學者は五經三史の外に集選を讀み、選といへば「文選」を指し、文集若くは單に集といへるは「白氏文集」を意味したるは以て如何に其の行はれたりしかを察すべし。是につき諸種の逸事も傳へられたり。彼の清少納言が簾を撥げ、菅公が鐘を聽き、嵯峨帝が往來の船を詠じたまひ、高倉帝が「燒紅葉」を誦して仕丁の罪を許したまひ、又た定家が歌を作らんとするとき整座して樂天の蘭省・廬山の一聯を誦せしといふが如き、史傳に嘖嘖として稱せらるゝ所なり。「和漢朗詠集」一書十卷中に白氏の詩句を引くこと凡一百三十八條の多きに達し、其の他當時の文學に直接引用せられたる詩句は甚だ多く、其の詩意並に詩藻が間接に我國歌人の詩想に與へし賜の大なることは測る可らざるものあり。

例、愚案するに定家卿の

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮　新古今、秋上、

の上下句は恐くは白詩の

蘭省花時錦帳下　廬山夜雨草庵中

より想を得たるものならん。たゞ詩と歌と相異れる點は、詩の前句が錦帳の榮時を敍し居るに、歌の上句は「なかりけり」といひてこゝにも下句と同じく現在の衰況を敍し居ること是なり。然れども花の宴、紅葉の宴既に昔日盛時の物なるときは「なかりけり」といふとも已に想を盛時に馳せ居るものにして詩と歌と表面の敍述は異なるも同一胸臆の感を寫すものに外ならず。

又定家卿の自讃歌なる

駒とめて袖うちはらふかげもなしさの丶渡の雪の夕くれ　新古今、冬、

と白詩の

江迴望見雙華表　知是潯陽西郭門　猶去孤舟三四里　水煙沙雨欲黃昏

とを對比するに、詩に雪なく歌には之あるも、その旅況の寂寥たる亦豈に兩者心中相契る無しとせんや。

國文學に於ける詩意の直譯、詩藻の摸擬、等の表面的なるは固よりのこと、更に進みて國文學がその深き根柢に於て受けたる支那文學の影響如何を究明するは極めて重要なることゝいふべし。

本編　新樂府講義

新樂府を講ずるにあたりて

新樂府といふは新しい樂府といふことである。樂府といふは音樂を掌る官府の義である。支那に於て音樂を掌る官府は少くも殷の時代からその名が見え周秦以後もつゞいて存在した。漢になつて武帝が西域等外國の音樂を取りいれて樂府の大改革をなした。その時から樂府ではそこで音樂に合はせてうたふ歌詩を特別に作製した。この歌詩は叙事的のものが多い。卽ち歌詩の內容は或る物語り、社會上の出來事等をも含んだものである。また音樂にあはせてうたふのであつて耳で聽いたゞけで意味がわかる樣につくられた。此の如き歌詩は始は官府の方で作らせたのであるが後には一私人でもそのすがたをまねて作る樣になつた。是が樂府體の詩である。樂府體の詩を略稱してたゞ樂府ともいふ。そこで樂府といふ言葉には二つの意味が伴ふ。一は音樂を掌る官府の義、一は樂府體の詩(叙事的で耳できいたゞけでわかる詩)の義、是である。新樂府の樂府はこの後の義を用ゐてゐるのである。卽ち新樂府とは古い時代の樂府ではなくして今(唐時代)の樂府だといふことになる。白樂天は唐の時代に起つた出來事についてそれを詩につくり、之を音樂にあはせてうたふならばうたひうる、そうして耳からつたへて容易に人の心に感動させうるもので

あるとして此等の詩篇をつくり、因て之を新樂府と名づけたのである。

唐の敍事詩（參看拙著「支那文學研究」一七三頁至一八一頁）は初唐の頃からもあり、盛唐にもあるのであるが中唐卽ち白樂天の時代になつて其の數が多くなつた。これは樂天及びその友人等が之を作ることをつとめたからである。樂天の友元稹の言ふ所によると彼等は少年の時から「當時の事を諷興する」詩を作らんとしたので、單に古い樂府の題などを借りてそのまねをすることを屑しとしなかつた。その意は元稹の作つた樂府古題序といふ文に見えてゐる。其文の中に次の如きことがのべてある。

自風雅、至於樂流。莫非諷興當時之事。以貽後世之人。沿襲古題。唱和重複。於文或有短長。於義咸爲贅賸。尙不如寓意古題。刺美見事。猶有詩人引古以諷之義。（中略）近代詩人杜甫悲陳陶　哀江頭　兵車　麗人等。凡所歌行。率皆卽事名篇。無有倚傍。余少時、與友人白樂天・李公垂輩。謂是爲當。遂不復擬賦古題。（元稹樂府古題序、見唐文粹卷九十五）

この文は元稹が南梁州の進士劉猛　李餘　等が新意を以て樂府詩を作るについて、自己等の立場をのべたのである。從て劉猛　李餘及び文中に見ゆる白樂天　李公垂　名は紳　作者元稹などが此の新しい樂府といふものを作る一派の詩人であつたことが知らるゝのである。劉猛　李餘のことはよくわからぬ。李紳は新題樂府二十首を作つたのであるが一首も傳はつてをらぬ。元稹は李紳の二十首のうち十五首を和し、內二篇逸して今十三篇が存してゐる。元稹の十三篇は皆白樂天の新樂府中のものと同題で、筆力も殆ど相匹敵してゐる。元稹　李紳　白樂天は親友であつて、且つ作詩の態度が等しく、特にその題まで同じものを作つてゐながら、元稹は其の李紳の詩に和する序文に紳のことは言ふてゐるが白樂天のことは言はず、白樂天はその新樂府の序に李紳のことも元稹のことも何も言ふてをらぬ。これは汪立名が言うてゐる通り奇異なことである。しかし元稹の樂府古題序に　余少時　與友人白樂天・李公垂輩云云とあり、又詩篇の實際が互に關係してゐる所から見れば文で言ひあらはさうとあらはすまいと、それは問題ではない。

元白一派の新樂府は古樂府とどうちがふか、といふに古樂府は耳できいてわかる敍事的の詩であるがやゝもすれば興味本位である、きいておもしろいのが目的である。元白等のそれは興味を保たせることは務めぬわけではなからふけれども目的は時事を諷刺するに在る。卽ちそこに勸善懲惡の道德的の意義が加はつてゐる。この諷刺は彼等の非常に重きを置く所であつて、白樂天最も之を明白に論じてをる。「白氏文集」には諷諭といふ部門を設け、新樂府五十篇をその中に屬せしめてゐる。さうして樂天はこの諷諭の詩が自己の生命で他の諸作は有つても無くてもよいもの

であるというてゐる。予は白樂天を全體から見て、その諷諭の詩だけが價値があり、他は價値の無いものとはおもはぬ。また諷諭の詩は時事を諷刺したもので、道德的であり教訓的であるから貴ぶべきものだともおもはぬ。實際は往々にして道德的教訓的なる詩篇は却て拙劣厭ふべく文學としては無價値なるものが多くあるものである。所がこの新樂府は道德的教訓的ではあるが盡く樂天その人の道德的感情のあらはれであつてたゞ理窟づめによいことをせよといふ如き說法をしてをるのではない、事例を引き、譬喩を設け、文辭を修飾し、音調を流暢にし、文學としての價値要件を具備しつゝ內部に燃ゆる憤激を帶びて諄々と語りいでゝゐるのである。こゝが大に貴ぶべき點であるとおもふ。我國の文學には樂天の影響があるといふが、それは樂天をして言はしむれば其の「有つても無くてもよい」といふ部分が多く影響してをるのであつて、樂天が新樂府を詠ずる精神其物の影響の如きは無いのではあるまいか。無いとすれば甚だ遺憾なものである。

重ねていふ、諷諭の詩は樂天の詩の一部分である。彼自身が言ふ如く此のみが貴ぶべきものだといふのも當らぬ。同時に「長恨歌」「琵琶行」の類のみが其の本色だといふのも當らぬ。全體を通じて見なければ其人の本領は分らぬ。今は新樂府のみを講ずるのであるから、之に就ての彼自身の主張と併せて予の管見をつけ加へてのべる次第である。

新樂府を作つた年代は元和四年、爲左拾遺時作、とあるが　五十篇盡くその時一緒に作つたものと考へられぬ點がある。恐くはその時に多數できたからかくいうたものであらふ。實際はそれより以前のものも以後のものも混じてゐるであらふとおもはれるのである。元和四年八〇九は樂天年三十八歲にあたる。

新樂府〔上〕

序曰、凡九千二百五十二言　斷爲五十篇　篇無定句　句無定字　繫於意　不繫於文

字句解　斷　裁斷して定むるをいふ。定句　一定せる句の數。定字　一定せる字の數。繫　重きをそこにおくこと、

義解　この新樂府の字數は總計九千二百五十二字である、之を裁定して五十篇とした。一篇の詩には必ず幾句と句數を定めず、また一句の字數に於ても三字とか五字とか七字とか一定してはをらぬ。之を作る態度はその趣意の在る所に重きをおいてこしらへたのであつて文字を弄ぶためにしたものではない。

首句標其目〔古十九首之例也〕卒章顯其志　詩三百〔篇〕之義也

字句解　首句　詩の初の第一句。標　見出しにだす。目　名目。「古十九首之例也」の七字は本邦古寫本に依て補ふ、十九首とは「文選」に收められ漢人の作と傳へらるゝものなり、古詩は題なくその詩の起句を以て其詩を呼ぶこと慣例となる。卒章　詩篇の終末の段をいふ。其志　自己の作詩の志。詩三百篇　「詩經」の詩三百篇をいふ、「篇」の字は古寫本によりて補ふ、

義解　詩の初の第一句は詩篇の名目をかゝげだしたもので、それは昔の古詩十九首の例を用ひたものである。詩の末段に於ては自分の作詩の趣旨を明言してある、それは詩經三百篇がさやうにしてあると同じ意義によつたものので。

其辭質而徑　欲見之者易諭也　其言直而切　欲聞之者深誡也　其事覈而實　使采之者傳信也　其體順而律　可以播於樂章歌曲也

字句解　辭　文辭をいふ。質　かざりけなきこと。徑　まつすぐ、婉曲の反對、單刀直入的。諭　さとる、わかる。直　正直。切　事がらに適切。覈　たしか。實　まこと、うそなし。采之者　他日此の詩を採收するもの。傳信　信實なることを人につたへる。體　詩篇のすがた。順　無理がなくすら〳〵としてゐること。律　音調の規則にはまつてゐること、」。律を或本には肆に作れり、肆は自由自在なること、」。播　しく、ほどこす、字句を樂譜の上にのせること、。樂章　音樂としてのうた。歌曲　ふしつけてうたふうた、讀むだけに止まらぬ

をいふ、

義解 この新樂府の文辭はちみであつてまはりくどくなくちかに言はんとする所を言うてある、それは之を見る人のわかり易いのをのぞむためである。此詩の言は正直に適切にのべてある。それは之を聞く人が深く誡めんことをのぞむためである。其の事がらはたしかでうそがない、それは他日此の詩を採りあつめる人をして信實を傳へさせんがためである。其のすがたはすらりとして無理をせぬが音律にはかなつてゐる、之を樂譜やうたぶしにのぼせて實演しやうとおもへばすることができるのである。

總而言之爲君爲臣爲民爲物爲事而作不爲文而作也

字句解 君臣民物事　「禮記」の樂記に人の心が發して聲となり、聲が文をなせば音となるをいひ、詩に治世の音あり亂世の音、亡國の音あるは政治の善惡の結果なることを記せり、同篇にまた樂音の五種卽ち宮・商・角・徵・羽の調を順次に君・臣・民・物・事に配當して五音が亂るゝは五者が亂るゝためなりとせり。白氏其意を取る。不爲文而作　文は文章をいふ、此詩は文章それ自身の巧を目的として作つたものではない、

義解 總括して言へば此の詩篇は君臣民物事の五者に關係して其等の爲めの故に作つたもので單に美文學としてその文章の巧拙を弄ぶために作つたものではないのである。

〔第一〕七德舞　美撥亂陳王業也

七德舞　七德歌　傳自武德至元和

題意 此の詩は唐の太宗が亂世を撥めて之を正しきに返へし、此の舞を造りて帝王創業の艱難を陳ね示されしことをほめて作れるものなり。

字句解 七德舞　唐の太宗の秦王として四方を征伐せしとき民間に秦王破陣樂あり、貞觀元年西曆六二七に始めて秦王破陣舞圖を制し呂才をして圖に依て樂工百二十人に敎へしむ、更めて七德の舞と名く。前年貞觀六年太宗は武功縣の慶善宮に行幸して功成慶善樂をつくる、之によりて慶善樂を九功の舞と稱し、七德と九功と並に行ふ。」七德とは武の七德にして「左傳」宣公十二年の楚子の語に本く、楚子曰夫武禁暴戢兵保大定功安民和衆豐財者也とある七個條が七德なり。七德歌　舞の歌辭なり、この歌辭は魏徵　虞世南　褚亮　李百藥　等によりて作られしといふ、今傳はらず、○武德　唐の高

祖の年號 六一八至六二六 ○元和 唐の憲宗の年號 八〇六至八二〇

義解 我が唐に七德の舞と歌とがあつて、それは武德の昔から元和の今日まで傳はつて來てゐる。

元和小臣白居易　觀舞聽歌知樂意　樂終稽首陳其事

字句解 小臣 樂天時に左拾遺の官たり、謙遜して小なる臣といふ。樂意 此の舞樂の作られし趣意。稽首 頭を手と共にさげて地に至り起きて揖するをいふ。陳 のぶ、

義解 元和年代の小臣この白居易はこの舞を觀、この歌をきいて樂の作られた趣意を知り、樂の終るや恭しく首を地にさげて其の事がらをのべる。

太宗十八舉義兵　白旄黃鉞定兩京　擒充戮寶四海清　二十有四功業成

二十有九卽帝位　三十有五致太平

字句解 十八舉義兵 「貞觀政要」災祥第三十九 に太宗の言を記したるにも此の白詩と同じ紀事あり、然るに「舊唐書」の太宗紀には太宗の生卒を記して開皇十八年十二月戊午生、貞觀二十三年五月己巳崩、年五十二、といへり。通常太宗の舉兵は大業十三年六一七とせらる。大業十三年は「舊唐書」に依て算すれば太宗二十歲の時にあたり十八歲にあらず、史家の考を俟つ。白旄黃鉞 周の武王が殷の紂王を伐つとき右に白旄を秉りて麾き左に黃鉞を杖つきたりといふ、「尙書」の牧誓に見ゆ、白旄は白色の旄牛の尾なり、黃鉞は黃金を以て飾りたるまさかりなり、こゝは故事を借りしまでにて必しもその實物を手にせしをいふに非ず、○兩京 長安、洛陽。充 王世充。○寶 竇建德。○二十有四 「舊唐書」によれば武德四年 六二一 なり。○二十有九 「舊唐書」によれば武德九年 六二六 ○三十有五 貞觀六年 六三二 なり。

義解 太宗は十八歲で義兵を擧げ、周の武王の如く白旄黃鉞を手にして長安・洛陽を平定し、王世充を擒にし竇建德を誅戮して四海の內淸かになり二十四歲のとき功業が全く成就した。つゞいて二十九歲で天子の位に卽き、三十五歲で天下太平を致された。

功成理定何神速　速在推心置人腹

字句解 理定 理は治まるなり、唐の高宗の諱は治なるにより唐人は治字の代りに理の字を用ふ、○神速 不思議なはやさ。推心置人腹 後漢の光武帝の故事 帝は赤心を推して人の腹中に置きたりといふ、吾が誠意を他人の腹のなかにいれるなり。亡卒遺骸 太宗の貞觀

二年に隋人の暴されたる骸をうづめ、四年九月にも長城の南の隋人の骸をうづめしむ。飢人賣子　貞觀五年に大飢あり、男女を鬻ぐものあり、詔して御府の金帛を出して盡く之を贖ひその父母に還へす、

義解　どうしてあのやうに速に功が成り治が定まつたのかといふに、それは太宗が自己の誠心を他人の腹の中に入れられたからである。其の例をあぐれば、死亡せる士卒の遺骸を金帛を散じてとりかたづけさせたり、飢餓に迫れる人たちの賣りたる子どもを金錢を分ち與くて贖ひ還へさせたりせられた。

魏徵夢見天子泣、張謹哀聞辰日哭

字句解　魏徵　魏徵は太宗の謀臣なり、徵の病篤くなりしとき太宗は夢に徵と別れめざめて涕を流す、是の夕徵卒せり、○天子　天子を別本に子夜に作る、從ふべし、子夜とは夜半子の刻をいふ、○張謹　張公謹をいふ、公謹の卒するや太宗哀禮を舉げんとす、かゝりの役人當日は辰の日なればこれは陰陽家の忌む所にして哭すべからずと奏す、太宗情に於て忍びずとて遂に哭せられたり、○哀　死せしをいふ、

義解　前の例のつゞき、また魏徵が夢中で面會したときには太宗は夜半に別れを悲んでお泣きになり、張公謹の死んだことが奏聞されたときにはその日が辰の日で陰陽家の忌む日であつたにもかゝはらず哭せられた。

怨女三千放出宮　死囚四百來歸獄

義解　前例のつゞき、また太宗は多くの女官を宮中に幽閉しおくは憐むべきことなりとて三千人といふ多數を放ちて外へお出しになつた。また死罪の囚徒三百九十人と約して一旦家に歸らしめ翌年秋歸り來らば罪をゆるしやらんといはれ之を歸らしめたるに翌年果して皆獄にもどり來りしといふ。

翦髮燒藥賜功臣　李勣嗚咽思殺身

字句解　翦髮　髮は鬚に同じ、頰のひげなり、翦はきるなり、○功臣　卽ち李勣。李勣　太宗の武將なり、兵部尙書、兼知政事となり英國公に封せらる。○殺身　太宗のために生命をなげだす、

義解　武將の李勣が病氣のとき醫師は龍のひげを灰に燒いてのめばなほるといつたので、太宗は自分の頰ひげをきり灰に燒いて勣に賜はつた。勣は之をのんで病氣がなほつた。彼は遂に太宗の恩に感じてむせびなきしてこの君のためならば我が身は死なしてもよいとかんがへるに至つた。

含血吮瘡撫戰士　思摩奮呼乞效死

字句解　含血　血をすうてそれを口にふくむ。吮瘡　できものうみしるを口ですふ。戰士　卽ち下の李思摩。思摩　李思摩なり、突利族の人、太宗の高麗を征し白巖城進軍のとき思摩は弩にあたる、太宗みづからその血をすふ、。效　いたす、

義解　また太宗は戰士が負傷した場合、そのものゝ血を含み瘡のうみしるをすうてまで之を愛撫したまうた。だから李思摩はふるひ呼ばゝつて太宗のためには死をさゝげたいとこふた。

不獨善戰善乘時　以心感人人心歸　爾來一百九十載　天下至今歌舞之

字句解　別本　不獨の上に則知の二字あり。一百九十載　破陣樂は武德三年（六二〇）に太宗（時秦王李世民）が劉武周を破りしとき作るといふ、これより元和四年（八〇九）までを算すれば百八十九年にして大約百九十年となる

義解　して見れば太宗はたゞ戰が上手であり、うまく時機に乘じたからだといふばかりではなく、吾が誠心を以て他人の心を感動せしめたから人心が我が方に歸したのである。この舞樂が出來た始から今日まで凡そ百九十年も經てゐるが今なほ天下のものが昔のごとくこれを歌にし舞にしてやつてゐる。

歌七德　舞七德　聖人有作垂無極

字句解　聖人　太宗をさす。有作　作を祚に依れる本あり、よろしからず、作とはこの舞樂を作制せしことをいふ

義解　七德をうたひ、七德のことを舞ふ、この歌舞は太宗といふ聖人がおつくりになつて之を無極の後代までのこされたのである。

豈徒耀神武　豈徒誇聖文　太宗意在陳王業　王業艱難示子孫

字句解　神武　字面は「易」の繫辭にみゆ、靈妙なる武德。聖文　無上の文德。陳王業　帝王の功業を眼前に陳べる、

義解　詩の初の知樂意といふは此の段のことなり、太宗が此の樂舞をお作りになつた御趣意は、どうして徒らに神武をかゞやかすといふばかりであらうや、またどうして聖文にほこるといふばかりであらうや、その御趣意といふは帝王の功業を眼前に有形的に陳列して、如何に王業をうちたてることの艱難であるかを御子孫にお示しになる點に在るのである。

〔第二〕法曲　美列聖正華聲也

法曲法曲歌大定　積德重熙有餘慶　永徽之人舞而詠

題意　此の詩は唐の歷代天子が中國の音樂を正されしことをほめて作つたものである。

字句解　法曲　宮廷にて定められたる標準の樂曲をいふ。大定　一戎大定樂をいふ。大定樂は破陣樂より出でたるものにして舞者百四十人、五彩の文甲を被り槊を持て歌ふ、遼東を平げて邊境大に定まるに象るなり。高宗は永徽六年　六五五　三月遼東を伐たんとし兵營に於て舞を敎へ、李義府　任雅相　許敬宗　許圉師　張延師　蘇定方　阿史那忠　于闐王休屠　上官儀　等をして洛城門に赴て樂を觀せしむ、樂を觀る者に雜綵を賜ふ、この樂卽ち一戎大定樂なり、○積德　天子代々の德。重熙　代々の德のひかり。餘慶　祖先の德のおかげによりてあふれいでたるさいはひ。永徽之人　永徽年間の人々、事は上に出だせり。

義解　法曲として一戎大定樂を歌はれたことがある、それはまことに祖先累代の德、その德のひかりによつて子孫までそのおかげによるさいはひに出でたもので高宗の永徽年間にはこの樂を舞ひ且つうたうたのであつた。

法曲法曲舞霓裳　政和世理音洋洋　開元之人樂且康

字句解　霓裳　霓裳羽衣曲なり、玄宗の開元の時に起り天寶の時に盛なり、○世理　理は治なり。洋洋　平和なさま。開元　玄宗の年號　七一三至七四一

義解　また法曲として霓裳羽衣の曲が舞はれた。その時政は平和で世はよく治まり樂曲の音洋洋として平かであり、開元時代の人々みな樂しくかつやすらかであつた。

法曲法曲歌堂堂　堂堂之慶垂無疆

字句解　堂堂　歌曲の名、其曲陳隋以來之ありしといふ、白氏の原注に永隆元年（六八〇高宗の年號）李嗣眞の語を引き、堂堂の曲あるは唐の帝位再興の兆なりといへりとあるが白氏は其の樣なる曲辭についていへるならん。「唐會要」に調露中（六七九）の事として同じく堂堂に關する李嗣眞の語を錄したるは上述の語と相反し寧ろ患難の作る近きに在ることをいへり。白氏に據るの外なし、○無疆　かぎりなき後世、

義解　永隆時代に法曲として堂堂の曲がうたはれた。その餘慶はながく無窮の後世までつたへられる。

中宗肅宗復鴻業　唐祚中興萬萬葉

字句解　中宗　中宗は高宗の後を承く、其の御世の前の大部分は則天武后が政權を執りしが神龍（七〇五）に至りて帝位に復す、○肅宗　玄宗の後を承く、天寶の末安祿山の亂あり長安・洛陽皆陷る、肅宗また之を回復す、○鴻業　大業、天下たてなほしのおほしごと、○唐祚　唐の帝位○葉　代の意、

義解　「堂堂」の樂の起れる餘慶かして中宗も肅宗も大變亂の後をうけ繼がれながらいづれも乾坤再造の大業をもとゞほりにせられ、唐の帝位中ごろふるひ興つて萬萬代もつゞかん勢を示した。

法曲法曲襍夷歌　夷聲邪亂華聲和　以亂干和天寶末　明年胡塵犯宮闕

字句解　襍　雜に同じ○夷歌　夷聲　外國夷狄の歌曲、その調子、○華聲　支那中土固有の樂聲○干　をかす○天寶末　白氏の原注によれば十三年、○明年天寶十四年なり、安祿山は十四年十一月反す、○胡塵　安祿山の起した叛軍の兵馬の塵○宮闕　唐の宮殿の門、

義解　ところが法曲のなかに夷狄の樂曲の聲を雜せたことがある、夷狄の樂調は邪亂なものであり、支那中土の樂調は平和なものである、天寶の末年には邪亂な樂が平和な樂ををかす樣になつたのでその翌年つひに安祿山の叛軍の兵馬の塵が都の宮門を犯すことになつた。

乃知法曲本華風　苟能審音與政通

字句解　華風　中華の風、支那本土文明の風、○審音　音樂の道理をつまびらかにきはむる○與政通　「禮記」の樂記に聲音之道　與政通矣　とあり、音樂の正亂と政治の善惡とは道理共通すといふなり。

義解 上述の事から見ると法曲は中國文華の風で夷聲はさうでない。それで苟も音樂のことを審に知るならば音樂の道は政治と共通する所があるものだといふことがわかる。

一從胡曲相參錯　不辨興衰與哀樂

字句解 胡曲　卽ち夷歌をいふ。參錯　まじはる、中華の樂と夷狄の樂とを雜へ奏す。辨　區別する。興衰　國運の興ると衰へると、これは政治の善惡の結果なり。哀樂　人情のかなしきとたのしきと、これは音樂の正邪の結果なり、

義解 一たび夷狄の歌曲が中國のそれとまじへて奏せらるゝ樣になつてから國運の盛衰と人情の哀樂とを區別して、その興りて樂しむべきものを取り、衰へて哀しむべきものを捨つるといふことをせなくなつた。これではしかたがない。

願求牙曠正華音　不令夷夏相交侵

字句解 牙曠　伯牙・師曠・なり、いづれも古の音樂に通じたる人。華音　中華の音樂。夷夏　夷は夷狄、夏は諸夏、中國をいふ、。交侵　こもゝおかす、

義解 どうか伯牙　師曠の如き音樂に通じた人を求めて中國の音樂を正しくして、夷狄中國の音樂をして互に相侵さしめぬ樣にしたいものである。

評 白氏の此詩の言ふ所は主觀的の見解なり、初めより支那のものは正しきもの夷狄のものは邪亂なるものとしての論なり、之を歷史上の事實より見るに法曲なるもの已に支那本土のものに非ず、霓裳羽衣曲のごとき是なり、然るに是は華聲なりなどいふは事實を無視したるものといふべし。

〔第三〕　二王後　　明祖宗之意也

二王後　彼何人　介公鄰公爲國賓　周武隋文之子孫

題意 この詩は唐の天子の祖先が如何にその前代の天子の子孫を取りあつかはれたるかを明かにするために作れり。

字句解 二王後　二王は北周・及隋の天子をさす、後とは子孫をいふ。介公　隋の開皇元年五八一　二月北周の靜帝を介國公となす、此人は武帝の孫なり、五月崩ず、更に虞國公宇文仲

の孫絡を介國公とし隋室の賓となす、○鄴公唐の武德元年六一八隋の恭帝名は侑を廢して鄴國公となす、二年八月薨ず、此人は隋の文帝の曾孫なり、唐に於ては北周及隋の天子の子孫を封じて介公・鄴公として中間或はその禮遇を停止したることあるも餘程晩年まで二王の後を存するの制あり、○國賓　唐の國家のお客分、

義解　吾が唐には二王の後といふのがある、それはどういふ人かといへば介公・鄴公・などで唐の國家のお客分とされてゐる人である、そしてそれは北周の武帝、隋の文帝の子孫の方々である。

古人有言天下者　非是一人之天下　周亡天下傳于隋　隋人失之唐得之

字句解　天下者非是一人之天下　「六韜」に天下非一人之天下　乃天下之天下也とあり、詩は前の句のみを借用す、一人之とは一人が之を所有するをいふ、

義解　古人が言ふに、天下といふ者は一人の所有するものではないと、それで北周が亡びてから天下は隋に傳はつた。隋がまた天下を失うて唐がそれを得た。

唐興十葉歲二百　介公鄴公世爲客　明堂太廟朝享時　引居賓位備威儀

字句解　十葉　十代なり、高祖・太宗・高宗・中宗・睿宗・玄宗・肅宗・代宗・德宗・順宗・憲宗、高祖より憲宗までを數ふれば實は十一代なり。二百　武德元年六一八より元和四年八〇九までは百九十一年なり、○世爲客　世世お客分となる。明堂　天子の政事堂、唐の明堂は洛陽に在りき、○太廟　祖先の廟。朝　臣下を參內せしめる。享　神靈に飲食の物をさゝげる。引　ご案內をする。賓位　お客分としての座席。威儀　前代帝王の子孫たるのすがた、

義解　唐が興つてから凡そ十代を經、歲は二百年たつた、その間介公と鄴公とは代々お客分となつて、天子が明堂に臣下を朝せしめらるゝとき、太廟の神にさゝげものをせらるゝときには、みちびかれて國賓の位に居り儼然と威儀を備へて居られる。

備威儀　助郊祭　高祖太宗之遺制　不獨興滅國　不獨繼絕世　欲令嗣位守文君　亡國子孫取爲戒

字句解　助郊祭　郊祭は天子が天を南郊にまつるをいふ、祭りの最も重きものをいふ、助と

はそのお手傳ひをすること、實際手を下さぬまでも祭儀に參列するは卽ち天子をお助けする意味なり。遺制　後までのこした制度。興滅國　繼絶世　「語論」堯曰篇に見ゆ、一旦ほろびし國を興し、一旦中絶した世代をおこしてつぐ。嗣位守文君　嗣位とは前の天子の位をつぐこと、守文とは文德を守るなり、創業開國の君は大抵その前世の亂れたるを治むる人ゆゑ武德を用う。その子孫の君に至りてはたゞ平和な文の德を守るなり、○亡國子孫　北周や隋の子孫は亡國の子孫なり、この子孫を見せておくときはあんな亡國となりたくはないとの念をおこす、故に戒となる、

義解　二王の後たるものが威儀をそなへて郊祭の助けをする、これは吾が唐の高祖　太宗ののこされた制度であつて、その趣意たるやたゞに滅びた國を興し、絶えた世代を繼きつゞかせるといふばかりではなく、唐の世々の位をつぎ文德を守らるゝ後の天子の方をしてこの亡國の子孫を見てそれを取て自己の戒とせしめやうとの深遠なる點にあるのである。

〔第四〕海漫漫　戒求仙也

海漫漫　直下無底旁無邊　雲濤煙浪最深處　人傳中有三神山　山上多生不死藥　服之羽化爲天仙

題意　此の詩は昔の天子が仙人を求めなどせしことにつき戒めんがために作れり。

字句解　漫漫　ひろがる貌。直下　垂直に。底　そこ。旁　左右のひろがりをいふ。邊　邊際、はてなり、。雲濤煙浪　雲煙のたなびきおほふなみ。三神山　「史記」封禪書にみゆ、秦の始皇の廿八年に徐市(市音黻、徐市卽ち徐福)書を上りて海中に蓬萊・方丈・瀛洲といへる神山ありて仙人之に居る、童男女と之を求めんと請ふ、是に於て市を遣はし童男女數千人を發して海に入りて仙人不死之藥を求めしむ、○不死藥　それをのめば死せざることを得る藥。服のむこと。羽化　人間が羽翼のはへたるものにかはる。天仙　天上の仙人、

義解　海がはてしなくひろらかに横はつてゐる。之を垂直にはかつてみれば底しれず四方をみわたしても邊際がない。この海上の雲のゐる濤、煙のうかぶ浪の最も奥まりたる處に三つの神山があるといはれてゐる。またその神山には不死の藥が多く生へてゐてもし人がその藥をのめば羽翼が生へて空翔る天上の仙人になれるといふことである。

秦皇漢武信此語　方士年年采藥去　蓬萊今古但聞名　煙水茫茫無覓

處

字句解 秦皇 秦の始皇なり、事は上に出だせり。漢武 漢の武帝なり、武帝も亦李少君
欒大 等の説を信じ仙人を求めんとせり。此語、不死藥云云のはなし。方士 術士なり、不
老不死の仙術を知ると稱するものどもをいふ。采 採と同じ、とる、。蓬萊 三神山の一。
覓 もとむる、

義解 秦の始皇や漢の武帝は人が仙人になれるといふはなしを信じた、そのため彼等の命を
うけて方士等はその未知の神山へ年々不死の藥を採りにでかけた。しかし蓬萊山などいふ處
は今も古もその名を聞くばかりであつて實際往かうとすれば茫茫と煙れる海水があるばかり
で其地はもとむべき處がない。

海漫漫 風浩浩 眼穿不見蓬萊島 不見蓬萊不敢歸 童男丱女舟中老

字句解 浩浩 大なる貌、廣き場面を吹く。眼穿 眼に穴があく、見つめることの甚しきな
り。不敢歸 仙を求めに遣はされしものが歸らぬなり。童男 をどこのこども。丱女 丱音

慣、總角貌、總角はちごまげ、牛若まげ、左右に角髮をゆふなり、女童のすがた、

義解 海はひろらかに風は極大の場面を吹く、いくら目をみはつても蓬萊の島は見あたら
ぬ。しかし島を見あてぬうちはどうしても歸らぬ、それでつれていつた男女のこども等はむ
なしく舟の中で年がふけた。

徐福文成多誑誕 上元太一虛祈禱 君看驪山頂上茂陵頭 畢竟悲風吹蔓艸

字句解 徐福 即ち上に記したる徐市、秦の始皇についていふ。文成 齊の方士少翁のこ
と、このもの鬼神のことについて漢の武帝の信用を得たり、帝之を文成將軍となす、後ちそ
のいつはりごと發覺して誅せらる。誑誕 そらごと、大言をはく。上元 仙女上元夫人のこ
と、天上にありて十萬の玉女の名簿を領するものなりといふ、漢の武帝西王母と會せしとき
來りしもの、。太一 星の名、天の紫微宮に在り、最上の尊神なり、武帝は之を甘泉宮に祭
れり、。驪山 陝西省西安府臨潼縣にあり、秦の始皇の墓の在る處、「草茫茫」の篇と併せ看
るべし、。茂陵 漢の武帝の陵なり、陝西省西安府興平縣東十七里にあり、

義解 徐福や文成將軍は多くうそをいひ大言を吐いたのである。それを始皇や武帝は信用して、武帝の如きは上元夫人だの太一星などに向て效もなき祈禱をしてをつた。諸君看よ、そんなことで始皇や武帝が仙人になり不老不死であり得たかどうか、あの驪山の頂上や茂陵のあたりは、つまるところ悲しき風がはびこれる草の葉を吹いてゐるではないか。

何況玄元聖祖五千言　不言藥　不言仙　不言白日昇青天

字句解 何況　而るをましての意。玄元聖祖　老子のことなり、老子は周人李耳、諡して聃といふ、「道德經」五千言を著はす、安徽省の亳州に老子の故宅あり、そこに廟を置く、唐の高宗の乾封元年六六六亳州に行幸し老君廟に詣り、之を追尊して玄元皇帝と爲す、聖祖とは唐は李氏にして老子と姓を同じくするを以て老子を祖と稱す、○五千言　道德經をいふ。白日昇青天　天仙となると、

義解 而るをましてや仙の始といはるゝ吾が唐の聖祖玄元皇帝老子の著はされた道德經の本文五千言のなかには藥のことも言うてなければ仙といふことも言うてなく、まひるなか人に羽翼が生へて青天に昇ることができるといふこともすこしも言うてはないのである。してみれば仙を言ふは愚人の迷ひごとに過ぎぬのである。

〔第五〕　立部伎　刺雅樂之替也

立部伎　鼓笛誼　雙舞劍　跳七丸　嫋巨索　掉長竿

題意 此の詩は古雅なる音樂すたれんとするをそしるために作れり。

字句解 立部伎　唐の初には隋の舊制をうけて九部の音樂ありしが後ち之を立部・坐部・の二とせり。坐部中の無器用なものを立部に入れ、立部中の無器用なものを更に雅樂に入れたとは白氏の注に見ゆる所である。伎はわざなり、○誼　かまびすし、○雙舞劍　此の三字を舞雙劍に作れる本あり、それに從ふべし、舞雙劍とは二本の劍をまはすなり。跳七丸　跳はをどらす、劍を舞はしまたその間に七箇の彈丸をなげあげる。○嫋　たをやか。巨索　ふときなは、これはつなわたりをするならん。掉　ふるふ、うごかす、○長竿　ながい竹ざほ、竿をふるふは索をわたりながら爲すならん、此の敍事によりて見れば立部伎は雜戲かるわざの類なることがわかる、

〔義解〕立部の伎が演せらるゝ、それは如何にとみるにも笛や太鼓がやかましくなりひゞく。それから左右の手で二本の劍をまはしたり、その間には七つの彈丸をなげあげたりする。或はふといなはがなよ〳〵としてゐる處をわたつて長い竿をふるうたりする。

太常部伎有等級　堂上者坐堂下立

〔字句解〕太常　太常寺といふ役所をいふ、太常寺は國の禮樂郊廟社稷の事を掌る、○部伎　伎の部門。等級　段階。堂上　堂下　堂上は座敷の上方なり、堂下は庭をいふ

〔義解〕太常寺の管掌する部伎には階級があつて、堂上の樂人は坐するのであるが即ち坐部伎　堂下庭上の樂人は立つのである、即ち立部伎、

堂上坐部笙歌淸　堂下立部鼓笛鳴　笙歌一曲衆側耳　鼓笛萬曲無人聽

〔字句解〕笙歌　笙の音、それにあはせてうたふ歌。側耳　耳をそばだてる、き丶耳たてる

〔義解〕堂上の坐部では笙歌がすつきりしてきこゆる、堂下の立部では太鼓や笛がやかましくなる、堂上の笙歌が一曲奏せらるれば衆人はき丶耳たて丶それをきくが、堂下の鼓笛は萬曲奏せられてもだれもきく人がない。

立部賤　坐部貴　坐部退爲立部伎　擊鼓吹笛和雜戲

〔義解〕立部は地位が賤しく坐部は貴いのである、貴い坐部から無器用ものが退けられて立部伎へくみいれられ、それが太鼓をうつたり笛を吹いたりして雜戲　上記の劍舞、つなわたりの類　にあはせてゐるのである。

立部又退何所任　始就樂懸操雅音

〔字句解〕樂懸　天子の宮には四面に鐘又は磬を編し懸けたる器をおく、之を樂懸といふ、雅樂に用う。○操　あやつる。雅音　古樂の雅正なる音、

〔義解〕立部の無器用ものはつぎに退けられて何の役に任せられるか、それは雅樂の掛りになるのであつて、なんにも習熟せずに始めつから編鐘　編磬の處へ位をしめて雅音をあやつるのである。

雅音替壞一至此　長令爾輩調宮徵

〔字句解〕替壞　すたれこはれる。長令　永久かく〳〵ならしむることよ、とは歎息の辭なり

○爾輩　立部伎より來りし拙工をさす、○宮徵　樂音の調子の名、

義解　雅音のすだれくづれることもかほどまでになつたか、汝等ごとき拙きわざの者に永久宮・徵・の音を調へさせることよな。

圓丘后土郊祀時　言將此樂感神祇　欲望鳳來百獸舞　何異北轅將適楚

字句解　圓丘　后土　感神祇　事は皆「周禮」の大司樂の職に見ゆ。圓丘とは國都の南五十里の郊に於て冬至の日に天を地上の圓き丘に祀るをいふ。后土とは夏至の日に地祇を澤中の方丘にまつるをいふ。郊祀　天を南郊に祭るをいふ、地を兼ねていふ。言　當路の有司の役人がいふ。神祇　天の神、地の神。鳳來　獸舞　「尚書」の舜典並に益稷篇にみゆ、音樂を奏するために感じて鳳凰が來り百獸がしたがつて舞ふなり、○北轅　かぢ棒を北にむける。適楚　楚にゆく、楚は南方の國なり、

義解　彼等の言ふ所では圓丘・后土・などの天地の祭りのときに此の拙い音樂で天神地祇を感じ格らしめんといふ。それはできぬことだ。こんな音樂で鳳凰が來たりさま〳〵の獸が舞ふことを望まうとするのはかぢ棒を北にむけながら南方の楚の國へゆかうとするのと同じでできぬことである。

いまんちしかばかり

工師愚賤安足云　太常三卿爾何人

字句解　工師　音樂師をいふ。太常三卿　唐の制にては、太常寺には卿一人、正三品、少卿二人、正四品上、なり、

義解　音樂師の輩は愚にして賤いものであるから、そんなものはとりたてゝいふだけのねうちがないのであるが、太常寺の長官たる卿や少卿、汝等はいかなる人であるのか、この雅樂のありさまがわからぬのか。

〔第六〕　華原磬　刺樂工非其人也

華原磬　華原磬　古人不聽今人聽

題意　この詩は音樂をなす工人が適任者でないのをそしつたものである。

字句解　華原　地名、今の陝西省西安府耀州治なり。磬　くの字形の偏平なる石なり、之を

擊つ、樂器の一、

〔義解〕こゝに華原から產出する磬がある。今は之を樂器として用ゐるが今の世の人こそ之を聞くので、古の人はきいたことがないものである。

泗濱石　泗濱石　今人不擊古人擊

〔字句解〕泗濱石　泗水の濱より產する石、昔の泗水は今の山東省兗州府泗水縣より曲阜　滋陽　濟寧　鄒縣　魚臺　滕縣　沛縣　徐州　邳州　宿遷　桃源をへて淸河縣に至て淮水に入る、是を禹の跡とす、今泗水の故道は徐州以南は悉く黃河に占めらる。卽ち淤黃河と合せり。「尙書」の禹貢に泗濱浮磬の語あり、注に泗水涯、水中見石可以爲磬　疏に浮磬、似若水上浮然　故謂之浮磬也とあり。水上に浮いてゐる樣に見えるから浮磬といふのだといふのであるが果して正解を得てゐるや否、石とは卽ち磬石をいふ。「尙書」の舜典に擊石拊石　百獸率舞とあり、注に石、磬也、とみゆ古代に磬石を擊ちならせしこと見るべし。

〔義解〕昔は泗水の濱から磬石が出た。その石は今の世の人は擊たぬが古人は之を擊つたものである。

今人古人何不同　用之捨之由樂工　樂工雖在耳如壁　不分清濁卽爲聾

〔字句解〕今人古人　別本に古人今人に作る、よろしきに似たり。耳如壁　耳のはたらきをせぬをいふ。清濁　音の淸きと濁れると。聾　つんぼ。

〔義解〕古の人と今の人と何で同じくないか。一は泗濱の石を用ゐ一は之を捨てゝ用ゐぬ、それは樂工に由てさやうなのである。樂工がたとひ存在してゐるとしてもその耳が壁の如く用をなさず石の音の淸濁を分別することができねばつんぼ同樣のものである。

梨園弟子調律呂　知有新聲不如古

〔字句解〕梨園弟子　天子直轄の歌舞練場にて敎育された樂人をいふ。梨園は一箇處ではないが、その一は驪山の繡嶺の下に在つた。玄宗は開元二年　七一四　に坐部伎の弟子三百人を選んで自ら之に法曲を敎へられた。之を皇帝梨園弟子と謂うた。○律呂　六律六呂の調べなり、○新聲　今樣の音樂の聲。不如古　如を知に作れる本あり、知を正しとなす、如は誤なり。卽ち不知古とすべし、

〔義解〕天子の直々の御弟子たる音樂人等が律呂の調べをするのであるが彼等は今樣の新聲はわかるが古の聲をば知らぬのである。

古稱浮磬出泗濱　立辯致死聲感人　宮懸一聽華原石　君心遂亡封疆臣

〔字句解〕浮磬出泗濱　前に引きたる禹貢の語に詳かなり。立辯致死　辯の字は辨に作るべし、「禮記」の樂記に、石聲磬（注、磬磬字誤）磬以立辨、辨以致死　君子聽磬聲　則思死封疆之臣」とあり。磬石の音聲は磬々然として能く和ぐ、故に分明辨別の義を立て、臣各〻其の職分を守る、故に封疆を守るの臣は死を封疆に致すと。一說に磬は勁なり、立冬の音にして萬物みな堅勁なるの音なりと。前說の「和ぐが故に辨別の義を立つ」とは矛盾らしく考へらる。蓋勁聲なるを以て死を致すと考ふること順當ならん。○宮懸　宮廷の樂懸なり、磬は編みて多く一つの器に懸けつるす。遂亡　亡は忘に作るべし　忘ルなり。封疆臣　國境を守る臣、

〔義解〕古のいひつたへでは浮磬は泗水の濱から出た。泗濱の磬聲はよく之を聞く者を感動せしめ、その人をして職務を辨別するの念をおこさしめ國境を守る任に在るものは一旦事あるときは死を君に致すといふ風にならしめたものである。所が今日では宮廷の樂懸として一たび華原產の磬石の音を聽いてから君の心に於て遂に封疆に死するの臣を忘れてしまはるゝ樣になつた。

果然胡寇從燕起　武臣少肯封疆死　始知樂與時政通　豈聽鏗鏘而已矣

〔字句解〕果然　豫期されし如くまちがひなく。胡寇　ゑびすのあだ、安祿山の叛軍をいふ。燕　祿山は范陽より起る、今の直隸順天府の地方。樂與時政通　樂記の文意、前に屢〻引けり。鏗鏘　金石のなる聲のすがた。此句亦樂記の意、

〔義解〕それで豫期されたとほり安祿山の叛軍が燕の地方から起つたとき、官軍の方の武臣は封疆を守て封疆に死するほどのものは殆どなかつた。之に由て見れば音樂が時の政治と通ずる所あるといふことが始めてよく知らるゝ、音樂は決してたゞどんちやんといふおとをきくばかりのものではない。

磬襄入海去不歸　長安市兒爲樂師　華原磬與泗濱石　清濁兩音誰得

知ラム

字句解　磬襄　擊磬襄なり、樂師の名、孔子嘗て襄に從て磬を擊つことを學ぶ。入海　磬襄世亂れたるを以て去て海島に隱る、事は「論語」微子篇に見ゆ。○長安市兒　市兒とは市中のわかものどもをいふ。樂師　音樂の名人。清濁　清は泗濱石の音、濁は華原石の音、

義解　昔磬を擊つ名人に襄といふ人があつたがその人は海島へいつてしまつてもどつてこぬ。それで長安の市中のわかものらが音樂師となつてゐる。こんなことでは華原の石と泗濱の石との二つの音の濁か清かゞだれが知ることができるのであるか、できさうにはない。

〔第七〕上陽人

愍怨曠也

上陽人　上陽人　紅顏暗老白髮新　綠衣監使守宮門　一閉上陽多少春

題意　此の詩は男女各〻獨り居て配偶者を得る能はざるを氣の毒におもひて作れるものなり

字句解　上陽　宮の名、洛陽の宮城の西南隅にのりしもの。人　宮女なり。暗老　いつとはなしに年よる。監使　監督をする使者。多少春　どれだけの春ぞとは多くの春を經たといふこと、

義解　洛陽の上陽宮に宮女が閉ぢこめられてゐる、この人は紅の花の顏もいつとはなしに年ふけて新しく白髮が生へた。中から逃げ出さぬ樣に綠の衣を着けた監督の役人が門の番をしてゐる。この宮内に閉ぢこめられてから一たいどれだけの春を經たのであるか。

玄宗末歲初選入　入時十六今六十　同時采擇百餘人　零落年深殘此身

字句解　玄宗末歲　天寶十五載七五六なり。選入　えらばれて宮中にはいる。入時十六今六十　天寶十五載年十六ならば德宗の貞元十六年八〇〇が年六十なり、然らば此詩は貞元十六年頃の作にして元和四年の作には非ず。○采擇　とりえらぶ。零落　おちぶれる。年深　年久しきをいふ。此身　宮女自ら稱す、

義解　自分は玄宗皇帝の御世の末に初めて宮女として選ばれて御所にはいつたのだ、そのはいつた時は十六歲であつたが今や六十歲のお婆さんと相成つた。むかし自分と同時にえらびとられたなかまの宮女は百人餘りもあつたのが年久しくなるにつれおちぶれてしまつてやつ

と我が身だけが生きのこつてゐるのである。

憶昔呑悲別親族　扶入車中不敢哭　皆云入内便承恩　臉似芙蓉胸似玉　未容君王得見面　已被楊妃遙側目　妬令潛配上陽宮　一生遂向空房宿

字句解　扶　手でさゝへる。敢　俗語、「して、せしむる」。皆　衆人をいふ。入内　内は御所、宮中。便　すなはち。承恩　天子の恩寵をうける。臉　上頰部。芙蓉　はちすの花。玉　皮膚の美しきをいふ。容　とは許すといふの類。君王　玄宗。見面　玄宗の面を見る。楊妃　楊貴妃。側目　横眼でにらむ。潛配　こつそりと流しものにする。一生　せうがい。空房　男子の居らぬへや、

義解　昔しのことを憶ひだしてみる、悲さを呑みこんで親族の人たちに別れて家を出やうといふとき、左右の人々に手をそへられて車の中に入れられ哭せんとしても哭かされなかつた。皆のものが自分を慰めていふにはおまへは頰は蓮花の如く胸は玉の如く美しいから御所へはいりさへすればすぐに天子樣の御寵愛を被ることができると。ところが吾が君のおかほさへまだをがまぬうちに早くも楊貴妃ににらまれ、貴妃の妬みの結果は自分をこつそりこの上陽宮へ流しものにさせてしまつた、それでとう〳〵一生涯男なしの部屋でねる樣になつてしまつた。

宿空房　秋夜長　夜長無寐天不明　耿耿殘燈背壁影　蕭蕭暗雨打窗聲

字句解　寐　いぬる。耿耿　小明の貌、ぼつちりあかるし。背壁影　背壁とは壁によせかけておくこと、影は光をいふ。蕭蕭　さびしきさま。暗雨　くらがりの雨、

義解　男氣もない部屋にねてゐると、秋の夜は夜長くしてねてもよくいねられず夜明けを待てども夜はあけず、ぼつちりとのこれる燈は壁に倚せられてくらきひかりをなげかけ、さびしき暗がりの雨はさら〳〵と窗にあたりておとあり。

春日遲　日遲獨坐天難暮　宮鶯百囀愁厭聞　梁燕雙栖老休妬

字句解　遲　日あしおそく容易に暮れにくきをいふ。愁　宮女自らが愁ふるなり。梁燕　はりに巣くふつばくらの雙栖　雌雄ともにすむ、老　宮女自らが老ゆるなり、

[義解] 春ともなれば、春の日は日あしおそく、たゞひとり坐し居れば天は容易に日暮れにならぬ。御宮のあたりに鶯はさま〳〵にさへづれども愁ひの身にとりてはそれを聞くこともいやである。はりに來て雌雄むつみ栖む燕はあれど年老いたる身にはそれさへ妬むこゝろなし。

鶯歸燕去長悄然　春往秋來不記年
唯向深宮望明月　東西四五百迴圓

[字句解] 鶯歸　春。燕去　秋。長　いつも。悄然　憂ふる貌。不記年　記は記憶、幾年すぎしかを記憶せぬ。深宮　上陽宮の奥。東西　月の經行する方向をいふ、

[義解] 鶯がまた歸り燕がまた去るけれどもいつでも心配がはなれぬ。春は往き秋は來て幾年たつたかわからぬほど多くの歳をすごした。その間御殿の奥深くで天の月をながめてゐたが指をりかぞふれば凡そ四五百回は月が圓かにあつたであらふ。(四五十年たつたといふこと)

今日宮中年最老　大家遙賜尙書號

[字句解] 大家　百官小吏は天子を稱して天家といひ、親近侍從の官は大家といひまた官家といふ。尙書號　女尙書の稱號、

[義解] 今日自分は宮中で最も年老いたものである、それでお上徳宗をいふから自分に對して尙書の稱號を賜はつた。

小頭鞵履窄衣裳　青黛點眉眉細長　外人不見見應笑　天寶末年時世妝

[字句解] 小頭　さきの尖りたるをいふ。鞵履　二字にて「くつ」をいふ、鞵は革の一へぞこなり。窄　せまし、身はゞのせまきをいふ。點眉　點は点をつけること、或は點を畫に作れり、點の字義に拘泥せざれば點も亦畫くことをいふとみるべし、。不見　自分を見ない、宮中に在ればなり。時世妝　妝は妝に作るべし、妝はよそほひなり、時世妝はその時世のはやりのよそほひ、

[義解] さきの尖つた革ぞこのくつに、身はゞのつまつた衣裳。青い眉ずみで眉を畫いてその形は細長い。こんななりを外部の人が見ぬからよいが若しか見たならば定めしをかしがることであらふ、自分の樣子は天寶時代の末のはやりのよそほひなのだ。

上陽人　苦最多　少亦苦　老亦苦　少苦老苦兩如何　君不見昔時呂尙

美人賦　又不見今日上陽宮人白髮歌

字句解　呂尙美人賦　呂尙の尙は向に作るべし、呂向は「新唐書」卷二百二に傳あり、字子回、或曰涇州人　玄宗の開元十年に召されて翰林に入り集賢校理を兼ぬ、太子に侍し諸王に友とし、文章を爲くる、時に玄宗歳〻使を遣はし天下の美女を采擇して之を後宮に納る、之を花鳥の使と號す、呂向因て美人賦を奏して之を諷す、玄宗之を善しとし左拾遺に擢づ、後ち左補闕に進み、主客郎中　中書舍人　工部侍郎に遷りて卒す。呂向は李善の「文選」を釋くこと繁釀なるを以て、呂延濟　劉良　張銑　李周翰　等と更に詁解を爲くる、時に五臣注と號す、

義解　以下は作者の言。

この上陽の宮女はその苦み最も多い。わかきときも苦しみ年老いても亦苦しむ、かく苦しむこといかにして可ならん。諸君見ざるや、昔し玄宗の御世に呂向が美人の賦を上りて徒らに宮女を采擇することの非なるを譏りしことを。又た見ざるや、今日余がこゝにこの上陽宮人の白髮の歌を作る、その意の那邊にあるやを。

〔第八〕　胡旋女　戒近習也

胡旋女　胡旋女　心應絃　手應鼓　絃鼓一聲雙袖擧　廻雪飄颻轉蓬舞

題意　この詩は天子のおそば近くつかふるものについて戒めとせんがために作る。

字句解　胡旋女　るびすのよく身體を廻旋して舞ふ女、白氏の原注に天寶の末に康居國より之を獻じたりといへり。康居は西域の國の名なり、「唐書」の樂志に康居國樂舞　急轉如風、俗謂之胡旋　とあり、甚だ速かに身をめぐらすとみゆ。「樂府雜錄」に、胡旋舞　居一小圜毬子上舞　縱橫騰擲　兩足終不離毬上　其妙如此　とあり、これは毬乘りなり、蓋し毬上に於てするときと然らざるときとあるならん。「舊唐書」の音樂志には樂工、舞者の服裝及樂器のことをのべあり、曰く、康國樂　工人皂絲布頭巾　緋絲布袍　錦領。舞二人　緋襖　錦領袖　綠綾襠袴　赤皮靴　白袴帑　舞急轉如風　俗謂之胡旋樂　用笛二　正鼓一　和鼓一　銅拔一　と。ほゞその樣をうかゞふに足る。○應絃　絃はいかなる器の絃なるか明かならず、應はそれにかなふ樣にすること。○雙袖　左右のそで。○轉蓬舞　轉蓬の如く舞ふなり、蓬

はよもぎ、蓬の葉は秋になれば風のまに〳〵飛びめぐる。

義解　こゝに康居國の舞をする女がある。彼の女はその心は絃の音に從ひはたらき、手は太鼓の音につれてうごく、一聲絃鼓の音がすると兩袖をあげて舞ひだす、そのはやきこと風に吹きめぐらさるゝ雪のひるがへるが如くまた秋の野の面にうつりゆくよもぎの舞ふにも似てゐる。

左旋右轉不知疲　千匝萬周無已時　人間物類無可比　奔車輪緩旋風遲

字句解　匝　匝に作るべし、とりかこむ。周　圓のぐるり、千匝萬周とは幾度ともはかられぬほど回轉するをいふ。物類　類似の事物。輪緩　車輪も舞に比すればゆるやか。旋風　卷くかせ。遲　舞にくらぶればおそし、

義解　この女が左に旋り右に轉じて疲るゝことを知らず、幾めぐりとも數限りなうめぐつてやまぬ。その速さを人間の事物で比べやうとしても比ぶべきものがない。奔つてゐる車の輪でもこれよりは緩かで、つむじ風でも之よりはおそい。

曲終再拜謝天子　天子爲之微啓齒

字句解　謝　おじぎをして禮を申す。微　すこしく。啓齒　啓は開なり、齒を開くとは笑ひたまふをいふ、

義解　舞が一曲終つたところでこの女は再拜して天子にお禮のごあいさつをする。天子は之を御覽になつてすこしにつこりあそばされる。

胡旋女　出康居　徒勞東來萬里餘　中原自有胡旋者　鬬妙爭能爾不如

字句解　徒勞　徒らにわづらはす、徒らにとは下の中原自といふへかゝる。○東來　康居は西にあり、東の方支那本土へ來るをいふ。中原　黃河の流域洛陽地方をいふ。自　天然に。胡旋者　安祿山を指す、祿山は身體肥大にして腹緩にして膝に及ぶも胡旋舞をなすときはその疾きこと風の如し、○爾　胡旋女を指す、

義解　胡旋女は康居國より產出したものであるが萬里餘を踰えて支那本土へやつて來たのは眞に御苦勞千萬のことである。胡旋女が來なくとも中原にはひとりでに胡旋舞をよくする者が居たのだ、即ち安祿山　そのものは實に胡旋舞がうまいのでいくら妙をたゝかはし技能を爭はう

としたところが汝等女をさすの及ぶ所ではないのだ。

天寶季年時欲變　臣妾人人學圓轉

字句解　時欲變　世のさまがかはらうとする、○臣妾　天子の臣たる男女をいふ、男に臣といひ女に妾といふ。圓轉　二重の意味をもたせたり。身體上と精神上と共に身をかはすに巧みなるをいふ。

義解　玄宗の天寶末には時世が變化しやうとした、その時は男も女もだれもが圓轉滑脱といふ態度を取る樣になつてきた。

中有太眞外祿山　二人最道能胡旋

字句解　太眞　楊太眞、卽ち貴妃。道　いふ、

義解　その中で朝廷の內部では楊貴妃、外部では安祿山がゐた。世間のいふ所ではこの二人が最もよく胡旋するに巧みなものであつた。

梨花園中冊作妃　金雞障下養爲兒

字句解　梨花園　卽ち梨園。冊　玉冊に名を書す。妃　楊太眞を以て貴妃の官となす、貴妃は正一品官なり。金雞障　金雞を畫きたるついたて、「新唐書」安祿山傳に、帝玄宗登勤政樓幄坐之左張金雞大障前置特榻詔祿山坐寢其幄以示尊寵とあり。○養爲兒　祿山嘗て玄宗に請ひて楊貴妃の養兒となる。天寶十載春祿山がために第宅を親仁坊に起す、壯麗を極む、祿山の生日には玄宗貴妃より賜予すること甚厚し、又た祿山を召して禁中に入らしめ、貴妃は錦繡を以て大襁褓（負兒衣なり）をつくりて之を裹み宮人をして綵輿を以て之を舁しむ、之を祿兒を洗ふと稱す、玄宗之をきゝ貴妃に洗兒錢を賜ふ、

義解　楊貴妃をば梨の花咲く宮園に於て冊立して貴妃とし、安祿山をば金雞障下に坐を與へ、貴妃の養子としてあつかつた。

祿山胡旋迷君眼　兵過黃河疑未反

義解　祿山は胡旋の舞などをして天子の眼を迷はしてゐたので、玄宗皇帝は祿山の叛兵が北から南進して黃河を渡つてもまだ叛むいたのではなからうと疑つてをられた。

貴妃胡旋惑君心　死棄馬嵬念更深　從茲地軸天維轉　五十年來制不禁

字句解　胡旋　この胡旋は上文の圓轉とあるに當るならん。○死棄馬嵬　天寶十五載六月官軍靈寶に敗れ、玄宗蜀に向て逃奔す、興平縣の馬嵬坡に至りて龍武大將軍陳玄禮等に迫られ遂に楊貴妃を誅す、○念　玄宗の貴妃を念ひしたはるゝなり。「長恨歌」に見ゆるとほりなり、○地軸　地が回轉するぢく。○天維　天の四すみのつな、天がめぐをいふ。○五十年來　天寶十四載七五五より元和元年八〇六まで五十年なり、○制　胡旋を禁制せんとするなり、○不禁　禁止するを得ず、

義解　貴妃は圓轉の術を以て天子の心を惑はした、貴妃死して其の屍は馬嵬坡に遺棄せられたがそれでも玄宗は忘るゝことができぬばかりか一層思ひをまされた。　その頃から天も地も幾回轉したか、五十年このかた胡旋を禁じやうとするが禁ずることはできずに居る。

胡旋女　莫空舞　數唱此歌悟明主

義解　胡旋舞をなす女よ。無益に舞をなすことなかれ。たび〳〵我が作れる此の歌を唱へて聰明なる君をして悟らしめるやうにせよ。

〔第九〕　折臂翁　戒邊功也

新豐老翁八十八　頭鬢眉鬚皆似雪　玄孫扶向店前行　左臂憑肩右臂折

題意　此の詩は朝廷の權力ある臣が必要もなきに邊境に事をかまへて軍をなし功をたてゝ恩賞にあづからんとすることについて戒めんがために作る。

字句解　新豐　縣の名、今の陝西省西安府臨潼縣新豐鎮、驪山の北麓にあり、○鬢　ほひげ　○玄孫　やしはご、孫の孫、○扶　手をそへる。店　茶店。○憑肩　玄孫の肩による。

義解　新豐生れのおぢいさん、年は八十八歳、頭の鬢も眉も頰ひげもみなまつ白で雪のやうだ。ぢいさんはやしはごに手を添へてもらつて茶店の前をとぼ〳〵やつていく、左の臂は孫の肩によりかゝりながら、しかも右の臂は折れてゐる。

問翁臂折來幾年　兼問致折何因緣

字句解　問　作者がとふ。來　以來なり。致折　折れるといふ結果を生じたこと。因緣　由來、

義解　おぢいさんにたづねる。おまへはその臂が折れてこのかた幾年になるか。又た問ふ、

その折れたわけはどうであるか。

翁云貫屬新豐縣　生逢聖代無征戰　慣聽梨園歌管聲　不識旗槍與弓箭

字句解　貫　本貫、貫籍、戸籍をいふ。梨園　已に屢〻見ゆ、

義解　おぢいさんは答へていふ。私の本籍は新豐縣の管轄に隷屬してゐる。生れて征伐だの戰などの無い御代にであつて、樂園の歌の聲や笙笛の聲をきくにはなれたが、旗や槍、弓や箭などのことはすこしもしらなかつた。

無何天寶大徵兵　戸有三丁點一丁　點得駈將何處去　五月萬里雲南行

字句解　無何　何は幾何なり、○天寶　天寶十載七五一及び十三載七五四に楊國忠が兵を南詔今の雲南地方に構へしときの事を指す。○戸有三丁　唐の制度によれば人民を年齢の差によりて區別し、黄　小　中　丁　老等の名を設く。これは某歳を某とするといふは年代によりて同じからず、開元廿六年には三歳以下を黄、十五以下を小、二十以下を中、とせしが、天寶三載には十八歳以上を中男とし、二十三以上を丁とせり、廣德元年には二十五歳を成丁とす。此詩は天寶の事を叙するものなれば二十三以上を丁とするによるべし、○點　兵籍の姓名の上に點をつけること、點をつけられたる者は兵丁として徵發さるゝものなり、○點得　點せられての意。○駈將　かりもて。○去　ゆくこと。○雲南　今の雲南、唐の時には南詔といふ國ありしなり、

義解　以下「哭呦呦」まですべて老翁の話なり、

幾何もなく天寶年間に大に兵を徵し出されることになつた。毎一戸に三人の壯丁があれば一丁だけは點をつけて兵としてとられる。その一丁は點せられて駈りたてられてどこへゆかせられるかといふと、五月の暑天に萬里の遠き雲南へゆかせられるのである。

聞道雲南有瀘水　椒花落時瘴煙起　大軍徒涉水如湯　未過十人二三死

字句解　聞道　「きくならく」と譯す、道は「いふ」なり、「人のいふをきくに」の義。○瀘水　川の名。○椒　山椒。○瘴煙　身體を害する惡氣の煙。○大軍　唐の征伐軍。○徒涉　かちわたり、すあしでわたる。○如湯　あつきをいふ、

義解　人のいふ所によると雲南には瀘水といふ川があつて山椒の花の落ちる頃惡氣がわきお

る。征伐にゆく大軍がその川をかちわたりすると水があつくてお湯の樣であつて、その川をこさぬうちに十人のうち二三人は死んでしまふといふことだ。

邨南邨北哭聲哀　兒別爺孃夫別妻　皆云前後征蠻者　千萬人行無一回

字句解　邨南　邨は新豐縣内の村をいふ。爺　ちゝ。孃　はゝ。皆云　皆とは多くの人々をいふ。蠻　南詔國の土人をいふ。一回　一は一人なり、

義解　そんな恐ろしい雲南へでかけるといふのだから、村の南でも北でもなきさけぶ聲がかなしさうであつて、こどもはちゝはゝに別れ夫は妻に別れをする。みなの人たちがいふことに、蠻人征伐にいつたものは千萬人行つたうちで一人もかへるものはないとのことだ。

是時翁年二十四　兵部牒中有名字　夜深不敢使人知　偸將大石槌折臂

字句解　年二十四　天寶十載に二十四歳ならばその八十八歳は元和九年にあたる、若し天寶十三載に二十四歳ならばその八十八歳は元和十二年にあたる、詩の「是時」といふは恐くは天寶十載をさすならん、然りとせば此の詩は元和九年八一四の作とせざる可らず、○兵部　陸軍省の類。牒　兵籍。名字　自分の名。偸　ひそかに。將　もて。槌　つちをうちおろすやうになぐる、

義解　そのとき自分は二十四歳で陸軍の兵籍にちやんと自分の名がのつてゐる。それで夜なかごろ人に知らさぬやう、こつそり大きな石でもつてなぐりつけて自分の臂を折つてしまつた。

張弓簸旗俱不堪　從茲俠兎征雲南　骨碎筋傷非不苦　且圖揀退歸鄉土

字句解　簸旗　旗をふるふこと、あをる、○揀退　えらびのける、

義解　臂を折つたから弓をひきしぼることも旗をふつてあをることも兩方できなくなつた。これから雲南征伐から免せられるやうになつた。骨が碎け筋が傷むのは苦しくないわけでないけれども、まあ〳〵これでえりのけられて故郷に歸らうとくはだてたのである。

此臂折來六十年　一肢雖廢一身全　至今風雨陰寒夜　直到天明痛不眠

字句解　肢　手足。身　からだ

義解　この臂が折れてこのかたざつと六十年（精しく言はゞ六十四年）手は一本役にたゝなくなつたがこの

からだは無事である。今になつても雨風があり陰氣にさむい夜には、いたくてよあけまでは眠れない。

痛不眠　終不悔　且喜老身今獨在

義解　いたくて眠れぬが決して後悔はしない。まあ〳〵年寄つたからだが今自分ひとりだけのこつてゐることをよろこんでゐる。

不然當時瀘水頭　身死魂孤骨不收　應作雲南望鄉鬼　萬人冢上哭啾啾

字句解　魂孤　他鄉に一人で死ぬゆゑ魂ひとりなり。望鄉鬼　故鄉をはるかにながめる鬼、鬼とは人の死者をいふ。萬人冢　多人數を合併して埋めて建てたるつか、雲南にありといふ、鮮于仲通李宓が南詔征伐の事宋の洪邁の「容齋隨筆」卷四にくはしく見ゆ。啾啾　鹿の鳴く聲、借り用う。

義解　もしさうでなかつたらあのとき瀘水のほとりで我が身は死んで魂も一人ぼつちで骨はとりかたづけられず、雲南での旅の鬼となつて萬人冢の上で啾啾とないてゐたことであら

ら。

老翁の言は此に終る。以下は作者の意をのぶ。

老人言　君聽取　君不聞開元宰相宋開府　不賞邊功防黷武

字句解　宋開府　開府とは開府儀同三司なり、待遇の名、玄宗の時の名宰相宋璟なり、開元二十五年卒す、○邊功　邊境でたてた功。防黷武　武の德をけがすことを防ぐ。突厥が邊地を犯したとき天武軍の牙將郝靈荃といふ者特勒回鶻の部落を引いて突厥默啜の首を斬て闕下に獻した。靈荃はこれを大功とかんがへてゐた。しかるに宰相宋璟は天子が年少であるのに武を好んでは無理に功を建てやうとするものがでるであらうといふので靈荃等を賞することをひかへ、一年こえてからやつと靈荃に郎將を授けた。靈荃は之がため慟哭して血をはいて死んでしまつた。「通鑑」に依れば開元四年の事とす。

又不聞天寶宰相楊國忠　欲求恩幸立邊功　邊功未立生人怨　請問新豐折臂翁

字句解　楊國忠　「通鑑」によるに天寶十載夏四月劍南節度使鮮于仲通が雲南の南詔蠻を討て

瀘水の南で大敗し士卒死する者六萬人、楊國忠はその敗狀をかくし却て仲通の戰功を叙した。南詔王閣羅鳳（又作閣）は遂に唐をはなれて北の方吐蕃の臣となつた。國忠は詔をかりて大に長安・洛陽・河南・河北の兵を募つて南詔を擊つた。人々は雲南に瘴癘の氣が多く、士卒は戰はぬうちにはや死する者が十中の八九人はあるといときいてだれも募集に應ずるものがない。已むなく國忠は御史を遣はして道を分つて人を捕へ無理にくびかせでつないで軍の所に送らせた。○恩幸　天子の恩寵幸福。○請問　世人若し予が言を信せずとならば、どうぞこの老翁に眞否をたゞしてもらひたい。

〔義解〕諸君又た聞かざるか、天寶の宰相楊國忠は天子の恩寵を得んがため邊境に於て軍功を建てやうとした。しかし邊功が立たぬうちに人民の怨みが生じたのである。諸君若し予が言を疑ふならばどうぞこの新豐の老翁に問うて眞否を確めてもらひたい。

〔第十〕太行路

太行之路能摧車　若比君心是坦途　巫峽之水能覆舟　若比君心是安流

〔題意〕此の詩は夫婦の關係を借りて君臣の關係の終始變らぬことの難きことを諷したものである。

〔字句解〕太行　山の名、直隸省と山西省との堺を南北に縱走する山脈にして古より險を以て稱せらる。○摧車　魏の曹操の苦寒行の詩にいふ、北上太行山　艱哉何巍巍　羊腸阪詰屈　車輪爲之摧　云云と。その意を用う。○君　女より男をさす。○坦途　平かなるみち、○巫峽　四川省夔州府巫山縣にあり、瞿唐峽　歸峽　巫峽　之を三峽といふ、その長さ七百里、

〔義解〕太行山の路は險阻でよく車をくだくけれども若し君の心に比ぶれば平坦な途といつてもよい。巫峽の水はよく舟を覆へすけれども若し君の心に比ぶれば安らかな流れといつてもよい。

君心好惡苦不常　好生毛羽惡生瘡　與君結髮未五載　豈期牛女爲參商

〔字句解〕好惡　すききらひ。○苦　こまつたことには、或ははなはだと譯するも可なり、○好生毛羽惡生瘡　後漢の張衡の西京賦に所好生毛羽　所惡成瘡痏　とあるに本く、唐の李善の注には生毛羽、言飛揚也　成瘡痏、言瘢痕也　とあれども、「後漢書」の王符傳に、貢士

者、不復依其質幹、準其才行、但虛造聲譽、妄生羽毛、といひ、「貞觀政要」刑法篇 貞觀十一年魏徵の上疏の中なる所、好則鑽皮出其毛羽、所惡則洗垢求其瘢痕、瘢痕可求、則刑斯濫矣、毛羽可出、則賞因謬矣、といへるによりて考ふるに生毛羽とは其人の美質を強いてさがしだすこと、成瘡痏とは強いてきずをこしらへることをいふ。瘡はおできなり、○結髮童女が髮をあげ結ひ成人となるをいふ、こゝは結婚せしことをいふ。豈期、不圖といふの類おもひがけぬをいふ。牛女、牽牛星織女星なり、二星は毎年七月七日の夕に一度相會すといふ、借りて夫婦の好みに比す。參商、二つの星の名、この二星はめぐりあはぬ星なりといふ、疎遠になりしにたとふ、

古稱色衰相棄背　當時美人猶怨悔　何況如今鸞鏡中　妾顏未改君心改

〔義解〕君の心のすききらひはきまりがないとは困つたことだ、好きなときは其人の無い處までさがして毛羽をたづねだし、きらひなときには其人のきずまでをさがしだす。わたしは君と結婚してまだ五年たゝぬうちに意外にも前には牽牛織女のしたしみあつたものが今は參商二星のめぐりあはぬが如くなつてしまつた。

〔字句解〕古稱二句　是必ず指す所の人あるならんも未だ何人を指すやを詳にせず。暫く漢の武帝の李夫人を以て之に充つ。李夫人病篤かりしとき帝之を見んと欲するに夫人決して見わず、夫人の姉妹等見んことをすゝむ、夫人曰く我が帝を見ざるは兄弟等を託せんと欲すればなり、夫以色事人者、色衰而愛弛、愛弛則恩絕、上所以變顏念我者、乃以平生容貌也今見我毀壞、顏色非故、必畏惡、有吐棄我意、尙肯復追思、閔錄其兄弟哉と。」色衰　とは美人の顏色衰ふるなり、棄背とは男子たる者が美人を棄てゝ之に背くなり、怨悔とは美人が自らの色衰ふるを怨みくゆるなり、李夫人の場合にては怨悔の事實は之なきも詩人が怨み悔いたるならんと想像してのぶるなり、○如今　いま。鸞鏡　美人のお化粧のかゞみをいふ。故事は昔、罽賓王鸞鳥を得て其の鳴き舞ふを見んと欲す、夫人曰く鳥は類を得て鳴く、鏡を以て之を照すべしと、王之に從ふ、鸞鳥影をみて鳴き一奮して絕わたりと。

〔義解〕古からいふのに婦人は顏色が衰ふれは男子から棄てられるものであると、そのかみ美人(李夫人のごとき)でさへも色の衰へることにつき怨み悔いた。まして今日は妾見の鏡の前に立てみるに、自分の顏色はまだかはり衰へたとも見わぬのに君の心はもはやかはつてゐる。

爲君薰衣裳　君聞蘭麝不馨香　爲君盛容飾　君看珠翠無顏色

字句解　薫　香をたきくゆらす。蘭麝　蘭の香、麝臍の香。珠翠　眞珠、翡翠の羽、。顏色

これは人に屬するならん。

義解　君がために衣裳婦人自らの　にたきものをくゆらすに、君は蘭麝の香りをかぎながらかほりなしとする。君がために我が容飾を盛にして美しく見ゑんとすれば、君は我が珠、翠、のよそほひをみながら我に美顏色なしとしてゐる。

行路難　難重陳　人生莫作婦人身　百年苦樂由他人

字句解　行路難　世路をわたることのむつかしさ。重陳　このうへも一どのべる。百年　人の一生涯の時間、。他人　男子をいふ、

義解　この世の世わたりの難儀さよ、このうへそれをのぶることはできにくい。人間に在ては婦人の身とはなるなかれ、何となれば婦人と生れては一生涯の苦樂は他人次第できまるものであるから。

婦人の述懷はこゝに終る、以下は作者の意見、

行路難　難於山　險於水　不獨人家夫與妻　近代君臣亦如此

義解　世わたりの難儀さ。それは山を行くよりも難く、水をゆくよりも危險である。それはたゞ世間の夫婦關係に於てのみ世わたりのむつかしいのではない、近頃では君と臣との間でも同樣である。

君不見　左納言　右納史　朝承恩　暮賜死

字句解　左納言　納言は「舜典」にみゆ、鄭玄の注に納言は喉舌の官、下の言を聽きて上に納れ、上の言を受けて下に宣す、必ず信を以てすと。天子のお側に在りて天子の言を外に傳へ、人民の言を天子に奏上する職なり、。右納史　納は内に作るべし、字の誤なり、内史は「周禮」の大宗伯にみゆ、後世の中書・門下・の職にあたる、宰相の類なり、左右といふは、左史は言を記し、右史は事を書すといふ本文あるによれるならん、

義解　諸君見ざるや、天子には左に納言、右に内史の官あり、それが朝には恩を承けてゐるかとおもふと暮には早や死を賜はつてゐる。

行路難　不在水　不在山　只在人情反覆間

義解　世わたりの難儀さは水に在るのでもなく、山に在るのでもなく、たゞ人情の反覆常な

き間に在るのである。

〔第十一〕 司天臺　引古以儆今也

司天臺　仰觀俯察天人際　羲和死來職事廢　官不求賢空取藝

題意 古の事を引いて今を警むるために作る。

字句解 司天臺　天文臺のこと。唐の司天臺は天文を察し曆數を稽ふることを掌り、凡そ日月星辰、風雲氣色の異には、其の屬を率ゐて占ふ。役員は監一人、正三品、少監二人、正四品上なり、○仰觀俯察　天を仰ぎて觀、地に俯して察するなり、字面は「易」の繫辭下にみゆ、○羲和　羲氏和氏、堯の時の天文の官、○來　以來

義解 司天臺がある。これは天人の際を仰觀し俯察するものである。堯の時の羲氏和氏が死んでからこのかた司天の官の職事がすたれ、官としては賢人を求めないでたゞ藝のあるものばかりを取る樣になつてきた。

昔聞西漢元成間　下陵上替謫見天

字句解 西漢　前漢なり、長安に都す、故に西といふ。元成　元帝 西紀前四八—三三 成帝 西紀前三二—七なり。下陵　陵は淩、下たる者が上をしのぐ。上替　上たるものが其の行ひがくづれる。謫見天　語は「禮記」の昏義にみゆ。又屢〻成帝の詔中に見ゆ。謫は責むることなり。漢代の人々の思想によれば天變地異の類は人君の行爲によつてあらはるゝものにして、行爲あしきにより之を責むるのしるしが天上に見はるゝものとす。

北辰微暗少光色　四星煌煌如火赤　耀芒動角射三台　上台半滅中台坼

字句解 北辰　星の名、紫微宮の中にあり北極五星の最も尊き者なり。四星　四星は泰一の後に在り、末の大星を正妃とし、餘の三星を次妃・後宮の屬となす、北辰は天子の位を言ひ、四星は后妃の位を言ふ、北星二句は女權盛にして天子の德を蔽ふことをいふ。○煌煌　かゞやく貌。耀芒　芒とは星の光をいふ。動角　角も芒角をいふ、○三臺　北斗七星の魁（第一星より第四星に至る四星を魁と稱す）の下に六星が兩々ならんでゐる、之を三能 音台 といふ、三能の星の色が齊しければ君臣和し、齊しからざれば相そむく、○上台　中台　三能六星を三階に別つ、上階の上の星は男主、下の星は女主、中階の上の星は諸侯・三公、下の

星は卿・大夫、下階の上の星は士、下の星は庶人にあたる。○坼　裂ける、ひらく、

案するに「漢書」元帝成帝の紀、及び天文志には星變の事屢見ゆるも白詩の此文に相應する個條を見ず、白氏は或は實事を星象を借りて言ひあらはせるか、

義解 すなはち北辰の星は微かに暗くして光や色が殆ど無く、四星が煌煌とかゞやいて火の樣に赤くなつた。そうしてその四屋はます〳〵光芒を耀かし芒角を動かして三台を射、之がため三台のうちの上台は半ば光が滅してしまひ、中台は光が裂けてしまつた。

是時非無太史官　眼見心知不敢言　明朝趨入明光殿　唯奏慶雲壽星見

字句解 太史官　秦漢以來太史の任は天文曆時等の事を掌る。○明光殿　建禮門內の神仙門內にあり、臣下事を奏する所なり、○慶雲　卿雲と同じ、めでたきくも、舜の時卿雲あらはれたりといふ傳說あり、○壽星　南極老人星なり、「天官書」に西宮は咸池、參を白虎とす、其東に大星あり、狼と曰ふ、狼の近くに大星あり、南極老人と曰ふ、老人見ゆれば治安、見えざれば兵起ると。

義解 このときに太史の官が居ないわけではないが、太史はその星變を眼に見、心で知りながらよう言はぬ。却て翌朝には明光殿に趨り入つて慶雲や壽星が天にあらはれましたと奏上してゐる。

天文時變兩如斯　九重天子不得知　不得知　安用臺高百尺爲

字句解 時變　蓋し時の人事の變をいふ、天文を掌る官の古今によつてその職に忠なると忠ならざるとの差異あり、これ時の變なり。○兩　天文の變と人事の變と。○安用　爲　用うるの用なし、

義解 以下は作者の論

天文の變といひ人事の變といひともに此の如くである。それでも九重の奥にひつこんでゐる天子はそれを知ることができぬ。かゝる變を知ることができぬならばどうして百尺の高き司天臺を設けておく必要があるか。

〔第十二〕　捕蝗　刺長吏也

捕蝗捕蝗誰家子　天熱日長飢欲死

題意　これは地方の長官たるものが人民をして無益の勞力と經費とを重ねしむることを刺る。

義解　しきりに蝗イナゴを捕へるものがあるが、あれはどこの家のものであらう。天はあつく日は長く、飢ゑて死なんばかりである。

興元兵久傷陰陽　和氣蠱化爲蝗

字句解　興元　德宗の年號七八四、○兵久　之より先き建中三年七八二武人等威を恣にし、朱滔　田悅　王武俊　李納　等皆自ら王と稱す、四年涇原節度使朱泚反し德宗は奉天西安府乾州に奔る、興元元年に至り李懷光反し德宗梁州漢中府に奔る、兵久とは此等の亂をさす。○和氣　陰陽の相和したる氣。○蠱　穀の飛ぶを蠱といふ、木をくふ虫を蠱といふ、虫が木をくふことをも蠱といふ、和氣が害毒の氣にかはり蠱や蠱やの現象を起すをいふ、

義解　興元から兵亂がながくつゞいて天地陰陽の氣を傷害した。それで和氣が蠱蠱の現象を起し、その氣は變化して蝗となつた。

始自兩河及三輔　荐食如蠶飛似雨　雨飛蠶食千里間　不見青苗空赤土

字句解　兩河　河南・河北。○三輔　漢の時、京兆　馮翊　扶風　を三輔といふ、長安の都と郡部とをかけて三つの行政區に分ちたる名なり、○荐　しきりに、

義解　蝗は黃河の南北から始まつて三輔の地方にまで及び、しきりに稻を食ふこと蠶が桑の葉を食ふがごとく、その飛ぶことは雨にも似てゐる。凡そ千里のあひだ雨の如く飛び蠶のごとく食して青き苗は見られずたゞ赤い土たけが見られる。

河南長吏言憂農　課人晝夜捕蝗蟲　是時粟斗錢三百　蝗蟲之價與粟同

字句解　長吏　長官。○課人　課はしごとをわりあてること。○斗　一斗ごとに。○蝗蟲之價　蝗蟲一斗を捕へる經費、

義解　河南の長官は口で農事について心配するためだと言うて、人民に仕事をわりつけて蝗を捕へさせる、この頃粟もみどめの價は一斗三百錢である、蝗を一斗つかまへるにやはりそれと同じくらゐの經費がかゝる。だから蝗の價と粟の價と同じである。

捕蝗捕蝗竟何利　徒使飢人重勞費

義解　かくして蝗を捕へても何の利益があるか、徒らに飢ゑたる人民等に勞力や經費を重ねさすだけのことである。

一蝗雖死百蝗來　豈將人力競天災

義解　一つの蝗が死んでもさらに百の蝗がやつてくる。どうして人間の力で天災と力くらべができるものか。

我聞古之良吏有善政　以政駈蝗蝗出境

字句解　古之良吏　後漢の魯恭をさす、恭は「後漢書」(巻五十五に傳あり、恭は河南の中牟縣名の令となる、德化あり、鄰境には螟害ありしに中牟だけには害なかりしといふ。出境國境の外へでる。

義解　自分は聞いてゐる、むかしの良き官吏は善き政があつて、政治のよいことによつて蝗を驅逐したので蝗は國境の外へ出てしまつたといふことだ。

又聞貞觀之初道欲昌　文皇仰天呑一蝗

字句解　貞觀　唐の太宗の年號　六二七至六四九　○文皇　太宗をいふ、○呑蝗　事は「貞觀政要」務農篇に出づ、

義解　又た聞いてゐる、貞觀の初に於て我が唐の帝王の道がさかんにならうとしてゐた、そのとき太宗皇帝は天を仰いで一の蝗を呑んでしまはれたといふことを。

一人有慶兆民賴　是歲雖蝗不爲害

字句解　一人有慶兆民賴　「尙書」の呂刑に一人有慶　兆民賴之　とあり、慶は善なり、兆とは十億なり、天子一人が善を行へば多くの人民がみなその善にたよるをいふ。○是歲　太宗呑蝗の話は貞觀二年の事なり、

義解　上御一人に善行があれば下萬民みなそのおかげを被るといふことがあるが、その通りであつて太宗が蝗を呑まれた歲には蝗はあるにはあつたが害をなさなかつた。

〔第十三〕　昆明春　　思王澤之廣被也

昆明春　昆明春　春池岸古春流新　影浸南山青滉瀁　波沈西日紅瀏淪

〔題意〕この詩は天子の御恩澤が廣く下々に被るやうにありたいといふことをおもうて作られたものである。

〔字句解〕昆明　池の名、長安の西南に在り、周囲四十里、漢の武帝西南夷を伐たんとす、昆明國今の雲南地方に滇池あり、方三百里、武帝は昆明國を伐つて身毒今の印度に交通を開かんとす、それには滇池に於て戰を爲す要あるを以て滇池に象て長安に昆明池を穿たしめ水戰を習はす、」此の昆明池は秦の姚興の時水竭きたり、唐の德宗の貞元十三年七九七に至りて京兆尹韓皐に命じて之を浚へしめ、漢の制度を尋ねて交河灃水等を引き合流して池に入らしむ、○影　南山の影なり。南山　終南山なり、長安の南にあり。滉　水の深く廣き貌、○瀁　は漾の古文なり、滉瀁とは水のひろくたゞよふ貌。瀏　は水の深く廣きかたち、淪はさゝなみだつ、瀏淪はけだし廣くさゞなみたつをいふ、

〔義解〕長安の南なる昆明池に春が來た。春の昆明池は其の岸が古びて新たなる春流をたゝへてゐる。水面には終南山の影をひたして青く滉瀁とたゞよはし、波は西に傾く太陽をしづめて紅の色をさゞなみたゝせてゐる。

往年因旱靈池竭　龜尾曳塗魚晦沫　詔開八水注恩波　千介萬鱗同日活

〔字句解〕往年　さきつとし、是は前に述べし姚興の時のことには非るならん。靈池　この昆明池をさす。塗　どろ。晦　いきふく。詔　德宗の詔。八水　關中の八水をいふ、函谷關以内、卽大約今の陝西省内の八つの大なる川水、涇　渭　灞　滻　潏　滈　灃　潏　これを八水といふ。恩波　恩澤による水をいふ、。千介　介は甲殼を負ふもの、貝などの類。萬鱗　鱗はうろこ、魚をいふ、

〔義解〕さきつとしひでりのためにこのよき池の水がなくなつてしまつて、龜の尾はどろに曳かれ魚は沫にいきふくといふ有樣であつた。それで德宗皇帝の詔によつて關中の八水を開いて恩澤による水を池のなかへそゝぎいれた之がため多くの魚類貝類が同じ日にいきかへつた。

今來淨渌水照天　游魚鱍鱍蓮田田　洲香杜若抽心短　沙暖鴛鴦鋪翅眠

〔字句解〕今來　昨來などの來と同じ、以來の義なるも今來にて今の意、。淨渌　淨は潔きなり、渌は水清きこと。游魚　およぐ魚。鱍鱍　尾を掉ふさま。田田　田ごと〳〵。洲　水中

の島。杜若　かきつばた。抽　ぬきいづる。心　心棒。鴛鴦　をしどり。鋪翅　はねをしく

義解　今では池の水が清潔で天空を照らしてゐて、およげる魚は鯁々と尾をはね、蓮は田ごと〳〵に生じてゐる、又池中の洲は香くしてかきつか短くその葉心をぬきだし、沙あたゝかにしてをしどりがはねをしいて眠つてゐる。

動植飛沈性皆遂　皇澤如春無不被　漁者仍豐網罟資　貧人又獲菰蒲利

字句解　動植　動物・植物。飛沈　飛ぶもの、沈むもの、鳥魚をいふ。性皆遂　自分々々の天性をなしとげてゐる。皇澤　天子のめぐみのつゆ。漁者　魚あさりする人。仍　しきりに。網罟　魚あみ。資　もとで、これはあみから取り得るものをいふ、材料といふほどの意味。菰　まこも。蒲　がま、

義解　この池によつて動物植物鳥魚の類ことゞくその天性を遂げこゝに自由に生育する、天子のめぐみのつゆは春の如くで之を被らぬものはない。魚とりはしきりに網から取る材料を澤山に得るし、貧民もまた菰だとか蒲だとかを刈り取るといふ利益を獲るのである。

詔以昆明近帝城　官家不得收其征　菰蒲無租魚無稅　近水之人感君惠

字句解　官家　縣官といふの類、おかみのこと、政府當局をさす。收其征　征とは上より取るものをいふ、稅なり、。租稅　並にみつぎもの、

義解　そこへ詔があつて、昆明池は帝城の近くにあるから政府でそこから稅をとりたてゝはならぬと申しわたされた。それで菰や蒲にも魚にも稅が無く、水に近くすむ人々は君の惠みに感じてゐる。

感君惠　獨何人　吾聞率土皆王民　遠民何疎近何親　願推此惠及天下

無遠無近同忻忻

字句解　率土皆王民　「詩經」の少雅「北山」篇に溥天之下　莫非王臣　率土之濱　莫非王臣　率は循ふなり、率土とはその土地にそへる所をいふ、。忻よろこぶ、

義解　以下は作者の議論、

さて君の惠に感ずるは一たいどういふ人に限るのであるか。自分は聞いてをるにこの國土にそうた所のかぎりは皆王の民だといふことであるのだ。それになぜ遠方の民はうとんぜられ

て近くにゐる民だけが親まれるのであるか。さやうな偏頗なしにどうぞこの君の恵を推して天下中に及ぼし遠方となく近地となく皆同じ樣に人心がよろこぶ樣ありたきものだ。

吳興山中罷榷茗　鄱陽坑裏休稅銀　天涯地角無禁利　熙熙同似昆明春

字句解　吳興　今の浙江省の湖州府なり、湖州府の長城縣の顧山は茶の產地なり、○榷茗　榷は權に作るべし、木に從ふ、權は水上に木を橫へて渡りに便にするものなり、その木をわたらせて錢をとる、これその木をわたした人の獨占に歸す、その如く民に利を得させずに官のみがそれに由て利を得るを榷といふ、榷酤、榷酒の類是なり、榷茗もそれと同じ、茗は茶のこと、晩くつむものをいふとぞ、榷とは今の政府の專賣にあたる、○鄱陽　今の江西省饒州府なり、唐のとき饒州鄱陽郡樂平縣より金銀銅鐵を產せり、○坑　礦穴なり、○休　やむ○稅銀　產出する銀に稅をかける○天涯　天のはて○地角　地のすみ○禁利　利益を自由に取らせぬこと○熙熙　日のひかりかゞやくさま、

義解　上のつゞき、

吳興の山には茶の專賣が行はれてゐるがそれは罷めにし、鄱陽の銀坑では銀に稅をかけてゐるがその稅もやめにし、天のはて地のすみまで一切民に利を取らせぬ樣にするといふことを無くし、皇澤の熙々としてゆきわたることこの昆明池の春の如くにありたいものである。

〔第十四〕　城鹽州　美聖謨而誚邊將也

城鹽州　城鹽州　城在五原原上頭

題意　これは天子が夷狄に對せらるゝはかりごとのよきことをほめ、邊境を守る武將らのあしきことをそしるために作る。

字句解　城　きづく○鹽州　「清一統志」に鹽州の故城は甘肅省寧夏府靈州の東南、花馬池の北に在りと。此の地方は唐の德宗の貞元三年　七八七　に吐蕃に沒せしが、九年に至りまた之に城く、白氏の注には壬申とあり、壬申は八年なり、八年に城くべしとの詔あり、九年に城きたるなり、○五原　鹽州の古名、西魏のとき五原といふ、

義解　唐の朝廷から鹽州に城を築かれた。その城は五原の原の上方に位してゐる。

蕃東節度鉢闡布　忽見新城當要路

字句解　蕃東　蕃は吐蕃、東は東方。節度　軍政民政の長官。鉢闡布　節度の名。

義解　吐蕃の東方地を支配する節度の官たる鉢闡布なる者が忽ちこの新しき城が要塞の路に當つてできたのを見て、

金烏飛傳贊普聞　建牙傳箭集羣臣　君臣赭面有憂色　皆言勿謂唐無人

字句解　金烏　烏を或は烏に作る金烏は傳騎の如きものなり、○傳　傳は傳騎、○贊普　羽田亨博士の説にこれはチベット語の btsanpo にして吐蕃の長をいふと。「新唐書」の吐蕃傳を案ずるに其俗　謂彊雄曰贊　丈夫曰普　故號君長曰贊普　と見ゆ。○建牙　牙は大旗をいふ。○傳箭　「新唐書」の吐蕃傳に、其舉兵　以七寸金箭爲契　百里一驛　有急兵　驛人臆前加銀鶻　甚急　鶻益多　とみゆ、箭は急を報ずるしるしとみゆ、傳へるとは使者が次から次へとわたすをいふ、○君臣　吐蕃の君と臣。○赭面　あかきかほ。○皆言　君臣らがいふ。

義解　金烏の傳騎が早飛脚で知らせるのでその君長たる贊普がこの事を聞き知つた。それで贊普の軍門には大旗を建て、傳令の箭をつたへてふれまはらせ多くの臣下を呼び集めた。君も臣もあからがほで心配さうな顏つきをして、一同のものが言ふやう、唐にも人物がゐないというてはならぬぞと。

自築鹽州十餘載　左衽氈裘不犯塞　晝牧牛羊夜捉生　長去新城百里外

字句解　十餘載　貞元九年より數ふれば元和の初にあたる。○左衽　衣のつまを左前にする、夷の俗、○氈裘　毛織りのきもの、夷の服、○塞　とりで、城塞をいふ。○捉生　敵地に入りて生きた人をつかめてくる、○新城　鹽州の城をいふ。

義解　鹽州に城を築いてから十年あまりといふもの左衽氈裘の身なりをしてゐる吐蕃のゐびすどもが城塞を犯して攻めよせてこぬ、彼等は晝は牛や羊をかひ夜は人を捉へてつれてゆく位のことで、久しくこの新城から百里の外へいつてしまつた。

諸邊急警勞戍人　唯此一道無煙塵

字句解　諸邊　邊は邊境、夷狄との境すち、諸とは種々の地方をいふ。○急警　敵が攻め寄せ

るにつけて急に警戒する。勞　骨折らせる。戍人　まもる人、士卒をさす。此一道　鹽州の通路をいふ。煙塵　烽煙、兵馬の塵、

義解　いろ〳〵な國境地方では急警がつたはつて番人の兵卒などに勞苦をさすがたゞこの鹽州の一路はすこしも煙や塵のあがることなく平穩である。

靈夏潛安誰復辯　秦原暗通何處見　鄜州驛路好馬來　長安藥肆黃蓍賤

字句解　靈夏　靈は靈州、今甘肅省寧夏府の南にあり、夏は諸夏の夏の如く中國の地、靈夏にて靈州の中國の地の義ならんか、「通鑑」の貞元九年の條に鹽州に城くに二旬にして畢り鹽州の節度使杜彥光に命じて之を戍らしめしことを記し、由是靈夏河南獲安とある靈夏も之と同じからん。潛安　たれ知らぬまに安泰なり。誰復辯　辯は辨に作るべし、辨識するものなきをいふ。秦原　周原といふが如く秦の原野をいふか、秦は長安。暗通　人知れず交通する。何處見　他の地、いづこにても見る能はず。鄜州　西安府の正北に在る州の名、。驛路　しゆくつぎの路。好馬來　吐蕃からよい馬を唐の方へ送り來るなり、。藥肆　くすりをうるみせ。黃蓍　藥草の名、和名ヤハラクサ、又カハラササゲ、吐蕃の方面に產出するものならん、賤　價がやすい、

義解　城を築いた結果靈州の地方が人の知らぬまに安泰になつたのであるがどうしてさうなつたかを誰が識らうか。又此の城のできたゝめに鹽州と都の長安地方と人知れず交通しうる樣になつたのであるが、かゝることは此處をのぞいてどこで見うるか。此の城のおかげで鄜州方面のうまやぢからは吐蕃から好い馬がやつてくる、長安の藥みせでは黃蓍の藥が價がやすくなつた。

城鹽州　鹽州未城天子憂　德宗按圖自定計　非關將略與廟謀

字句解　按圖　地圖を考へてみる。將略　武將のはかりごと。廟謀　朝廷の大臣等の廟堂に於ける謀、

義解　さて鹽州に城を築いたが、こゝにまだきづかなかつたときには天子が御心配になつた。それで德宗皇帝は御自身で地圖を考へて計をお定めになつたのである、これは他の文武の臣などのはかりごとに關係あるものではないのだ。

吾聞高宗中宗世　北虜猖狂最難制

義解 自分は聞いてゐるのに、高宗 六五〇至六八三 中宗 六八四至七〇九 の世には北方のるびすがわるづよくて最も制服しにくかつたさうである。

韓公創築受降城　三城鼎峙屯漢兵　東西亘絶數千里　耳冷不聞胡馬聲

字句解 韓公 韓國公張仁愿なり、中宗の景龍二年 七〇八 三月朔方總管張仁愿は三つの受降城を築く、今の甘肅・陝西二省の北方、内蒙古の黄河の流にそうて河北に三城を設けたるなり、西受降城は甘肅寧夏府平羅縣の東北、黄河の西岸にあり、中受降城は内蒙古烏喇忒旗西、黄河の北岸にあり、東受降城は南直榆林 といへば榆林府より正北に一直線を畫きみるに凡そ包頭鎮の附近ならん。仁愿はこの三城により黄河を境として突厥を防ぎしなり。突厥是より南侵せず、○創築 新規にきづく。受降城 敵の降參を受くる城、實は防禦のための城、○三城 上の三受降城。鼎峙 鼎の三本足の如くそばだつ。屯 たむろさせる。漢兵 唐の兵をいふ。亘絶 わたる。耳冷 秋風吹き起りて耳の冷かさを覺ゆるとき、秋涼と共に夷狄は南侵す、○胡馬 夷狄の馬

義解 あの頃韓公張仁愿が新規に受降城を築き、三つの城が鼎の足のごとく峙つてそこに我が唐の兵を駐屯させておいた。三城の長さは東西數千里にわたつて儼然としてゐたので秋風冷かに耳朶を吹く頃に 敵の馬のいなゝきを聞かなかつた。

如今邊將非無策　心笑韓公築城壁　相看養寇爲身謀　各握强兵固恩澤

字句解 如今 たゞいま。邊將 國境を守る大將。相看 かほ見あはせる。養寇 あだをそだてる、攻擊すべきときに之を攻擊せずしてその勢力を增さしむるはこれ寇を養ふといふべし。身謀 自己一身のためにする工夫。恩澤 天子の寵恩

義解 ところで今日はどうか、今は國境を守る武將たちははかりごとが無いのではあるまい、心中で韓公が城壁を築いたことを嘲り笑うてゐる、そうして互にかほを見合せて手を束ねて敵の勢を養ひながら自己一身の謀を爲し、各自が强大な兵力を握つて天子の御寵恩を固くつかまへ樣としてゐる。

願分今日邊將恩　褒贈韓公封子孫　誰能將此鹽州曲　翻作歌詞聞至尊

字句解 邊將恩 邊將に與へらるゝ天子の恩澤をいふ。褒贈 死後ほめておくる。子孫 韓公の子孫。將 もて。翻 音を辭に譯してうつす。歌詞 うたことば。聞 奏聞する。至尊

天子

[義解] どうぞ今、天子から邊將等にくださる恩澤をすこし分けて、死後ながら韓公に追贈してその子孫をとりたてゝやりたきものである。だれかこの城鹽州のうたのふしをうたことばに翻寫して之を我が君にきこえあげるものはないであらうか。

〔第十五〕 道州民

道州民　多侏儒　長者不過三尺餘
美賢臣遇明主也

[題意] この詩は賢良なる臣が聰明なる君にであひ、其の言ふ所よく採用せられたるをほめて作る、

[字句解] 道州　湖南省永州府の道州。侏儒　一寸法師、短人なり。長者　たけたかきもの、

[義解] 道州の人民にはせのひくいものが多い。せのたかいものでも三尺餘りにすぎぬ。

市作矮奴年進奉　號爲道州任土貢

[字句解] 市　買ふことをいふ。矮奴　矮とは身長の短きこと、奴は召しつかひ。年　毎年。進奉　お上へたてまつる、。任土貢　「尚書」の禹貢の叙に禹別九州隨山濬川任土作貢とあり、任土作貢とは其の土地の有る所にまかせて貢とするなり、土地の產物同じからざれば各々有りあはせのものを以て貢となす、

[義解] その一寸法師を買うて道州から毎年お上へたてまつる、それを道州の土地特產のみつぎものとなへてゐる。

任土貢　寧若斯　不聞使人生別離　老翁哭孫母哭兒

[字句解] 寧　なんぞ。不聞　汝不聞之乎なり、

[義解] 任土の貢といふものはどうしてそんなものであらうか。汝等はこの貢あるがため道州の人民をして生きながら別離をなさしめ、老人は孫を哭し、母は兒を哭してゐるのを聞かぬのであるか。

一自陽城來守郡　不進矮奴頻詔問

[字句解] 陽城　人名、「新唐書」卷百九十四に傳あり、字は亢宗、定州北平の人、陝州の夏縣に徙る、後ち仕へて諫議大夫となり裴延齡が事を論ず、卽ち韓退之が諍臣論を作りし所の人な

り、陽城は德宗の貞元十五年 七九七 九月に道州刺史に任ぜらる、「新唐書」の本傳に、州產珙儒、歲貢諸朝、城哀其生離、無所進、帝使求之、城奏曰、州民盡短、若以貢、不知何者可供、自是能、州人感之、以陽名子と。城の如きは實によく人を尊重することを知る者といふべし。守郡　守とは太守となる、卽ち刺史となること、郡は道州をさす。詔問　なせ進奉せぬかと天子の命を以ておたづねになる、

[義解] 陽城が州の長官となつてこゝへ來てからは一切矮奴をたてまつらぬので上からなせたてまつらぬかとしきりにおたづねがある、

城云臣按六典、任土貢有不貢無、道州水土所生者只有矮民無矮奴

[字句解] 六典　「唐六典」なり、玄宗の朝唐の制度をかきしるしたる書なり。有　無　土地に有るもの、無きもの、。水土　土地をいふ。矮民　矮奴　せのひくい人民、せのひくい召し使ひ、

[義解] 陽城がお答へ申すには、臣が六典の書を考へてみまするに、任土の貢は有るものを貢するので無いものを貢するのではありませぬ。道州の土地がらで產生する者はたゞせのひくい人民があるばかりで召し使ひはありませぬと。

吾君感悟璽書下　歲貢矮奴宜悉罷

[字句解] 吾君　德宗。感悟　城の言に感じてさとる。璽書　御印を押した文書。歲　每歲

[義解] 吾が君におかせられては陽城の言をきいて感じてわるかつたとお悟りになり御文書が下つた。それによれば每年矮奴を貢したが、それを今後はすつかりやめるがよろしいとの仰せである。

道州民　老者幼者何欣欣　父兄子弟始相保　從此得作良人身

[字句解] 相保　同居して相守るをいふ。良人　平民なり、一般人と平等のもの、奴とせられては賤民にて一段劣等の人となる、

[義解] この詔が出でゝから道州の人々は、老いたるも幼きもそのよろこばしさいかばかりぞ。これでやつと親子兄弟が無事に離れずに居れるのである、これからやうやく普通の人間のからだになることができたのである。

道州民　民到于今受其賜　欲說使君先下淚　仍恐兒孫忘使君　生男

多以陽爲字

字句解　使君　太守に對する敬稱、太守は天子の使者として地方に臨むものなりとのかんがへなり、唐は州にて郡に非るも州は漢の郡に當るゆゑ刺史を太守と見なして使君といふ。說　その人についてのことをときだす。字　あざな、

義解　道州の人民、その人民は今日に至るまで陽城のおかげを蒙つてゐて、陽城のことを語り出さうとしては先だつものはありがた涙である。それにつけても自分等の子孫たるものがあの長官陽城のことを忘れはしないかと氣遣つて、もし男兒をうむだときには大抵そのあざなには「陽」といふ文字をつけてゐる。

〔第十六〕　馴犀　感爲政之難終也

馴犀馴犀通天犀　軀貌駭人角駭雞

題意　これは始はよい政をしても末までそれをつゞけをほせることがむつかしいものだと感じて作つたものである。「題注の丙戌は丙子の誤、丙子は貞元十二年なり」

字句解　馴犀　ならされたる「さい」。通天犀　犀の種類、この犀は角に白きすぢめが貫いてゐるといふ。軀貌　體格、かたち、。角駭雞　角に光澤あるにより雞は之を見ればおどろくといふ、事は「抱朴子」に見ゆ、

義解　こゝに通天犀と名くるならされた犀がある、この犀のからだつきは人をおどろかし、その角は雞をおどろかす、

海蠻聞有明天子　駈犀乘傳來萬里

字句解　海蠻　題注に南海とあれば今の廣東地方なり、そこの野蠻人。明天子　唐の聰明なる天子。傳　しゆくつぎの車、

義解　南海の蠻人が唐に明天子がおいでになるときいて、この犀を驅てしゆくつぎの車に乘つて遠く萬里の路をやつてきた。

一朝得謁大明宮　歡呼拜舞自論功　五年馴養始堪獻　六譯語言方得通

字句解　大明宮　唐の東內東の御所なり、最も壯麗なる宮殿をふくめり、含元殿　宣政殿　紫

宸殿　等はみな其のうちにあり、○自論功　自分で自分の功をかぞへたてる、卽ち下の二句の事、○馴養　ならしやしなふ○六譯　六回通譯をかさねる○語言　蠻語をいふ、○通意味が他人にかよひわかる、

義解　蠻人があるとき大明宮で唐の天子に謁見することができた、それでよろこびさけんで禮拜して小をどりしつゝ自分ながら自分の功を論じたてる、彼がいふには、この犀は五年間ならし養うてやつと獻上することができる樣になりました。自分たちは六たびも通譯を經てやつとその言葉が唐の人たちに通ずる樣になりました。

上嘉人獸俱來遠　蠻館四方犀入苑

字句解　嘉　よしとする○人獸　蠻人と犀○館　やどらせる○四方　四方といふこと詳ならず、優遇の意を以て居所をうつさしむるの義か、或は、蠻人多人數なるによりて四方に分居せしむる義か、○苑　はなぞの、

義解　お上では蠻人と犀とがともに遠方から來たことをよみせられ、蠻人は四方にやどらせ、犀ははなぞのゝ中に入れさせられた。

鉥以瑤蒻鏁以金　故鄉迢遞君門深　海鳥不知鍾鼓樂　池魚空結江湖心

字句解　鉥　鉥とは馬に穀をくはすこと○瑤蒻　瑤は天子よりの品物ゆゑかざりにつけた字、蒻は芻なり、ワラなり、瑤蒻とはりつばなわらをいふ○鏁　鎖くさりなり、○故鄉　南海をいふ○迢遞　地形に高低ありてはるかなるかたち○君門深　ごてんはおくふかし○海鳥　鷄鴟といふ鳥のこと、事は「國語」魯語に見ゆ、この鳥が風を避くるため魯國の東門外に止りしとき魯の大夫臧文仲が知らずして國人に命じこの鳥を祭らしめしことあり、○鍾　鐘なり○樂　たのしみ、○池魚　江湖心　魚を捕へて池に置くとも魚は常に江湖の廣き處にかへらんことをおもふ、江湖心とは江湖を思ひ慕ふ心なり、空結とはその心が結ぼれる、しかしかへれぬゆゑ「空しく」といふ、鳥魚は犀をたとへいふ。」

義解　この犀はたべものとしては立派なわらをたべさせ、くさりとしては金のくさりを用ゐてつないでである。しかし天子の御門内は奥深く故鄉は非常に遠い。鐘鼓の音樂を供へられても海鳥はどうしてその樂しきことを解せやうや、池のなかに飼はれても魚はいたづらに江湖を慕ふの心のみを持ちつゞけてゐる、

馴犀生處南方熱　秋無白露冬無雪　一入上林三四年　又逢今歲苦寒月
飲氷臥霰苦蹢躅　角骨凍傷鱗甲縮

〔字句解〕生處　生れしところ。上林　天子の御苑。三四年　事實と合はず疑ふべし、。今歲　貞元十三年。飲氷　氷のある處に氷を飲む。霰　あられ。蹢躅　せぐゝまる、。鱗甲　鱗は卷き毛をいふ、甲は肉のでばりたりをいふ、

〔義解〕元來この犀の生れた處卽ち南方は熱い地方であつて秋は露もなく冬は雪もない。それが天子の御苑に入つてから三四年へて今歲の非常に寒い月にであうた。氷の結べる處に飲み、霰のほとばしる處に臥して苦しみながらせぐゝまる、角や骨は凍えて傷はれ鱗毛や肉甲はちゞんでしまう。

馴犀死　蠻兒啼　向闕再拜顏色低　奏乞生歸本國去　恐身凍死似馴犀

〔字句解〕闕　わきの小門。低　あがらぬこと。本國　南海、

〔義解〕馴犀は死んでしまつた。蠻兒は啼き出す。蠻兒は御門に向て再拜して顏つきはなはだふるはぬ樣子でお上に申しあげる、どうぞいのちのあるうちに本國へたちかへりたいものでござる。自分のからだが馴犀のやうに凍え死にしはすまいかと氣づかはれます。

君不見建中初　馴象生還放林邑　君不見貞元末　馴犀凍死蠻兒泣
所嗟建中異貞元　象生犀死何足言

〔字句解〕建中　德宗の年號　七八〇至七八三。馴象　ならされたぞう、。放　はなつ。林邑　今の暹羅の地方。貞元末　貞元は二十年まであり、二十年つゞきしものを十三年を末年といふはいぶかし、是又上文の三四年ともあはず、

〔義解〕諸君見ざるや、建中の初には馴らされた象を放ちて林邑國へ生きながらかへらせた。又見ざるや、貞元の末には馴犀が凍死して蠻兒が泣くことを。

〔字句解〕嗟　なげく。異　建中は象を生還せしむこれ仁政なり、貞元は犀を凍死せしむ、是仁政の終へざるなり、而し兩時期のちがひなり、

〔義解〕我が歎嗟する所は建中が貞元とちがつてゐるといふ點である、建中の仁政が貞元の今日に行ひをほせられぬのがなげかはしいのである。象が生き犀が死んだといふ位のことは言ふだけのねうちのあることではない。

〔第十七〕 五絃彈　惡鄭之奪雅也

五絃彈　五絃彈　聽者傾耳心寥寥　趙璧知君入骨愛　五絃一一爲君調

題意　この詩は鄭聲すなはち淫邪の聲が雅正の聲に取つて代ることをにくんでつくれるものなり。

白氏の秦中吟のなかに「五絃」の篇あり、併せ看るべし、

字句解　五絃　五絃琵琶なり、安國の樂に此の器を用うることあり、西方の外國より來れるものなり、我が奈良の正倉院の御物に朝鮮製する所の五絃あり。○寥寥　心の沈靜に歸するをいふ、ひつそりした貌、○趙璧　人名、段安節の「樂府雜錄」に貞元中　有趙璧者　妙於此伎也　白傅諷諫　有五絃彈　近有馮季阜とみえ、李肇の「國史補」に趙璧五絃を彈ず、人其の術を問ふ、璧曰く、吾の五絃に於けるや始は則ち心之を驅り、中ろは則ち神之に遇ふ、終りには則ち天之に隨ふ、吾が浩然たるに方りて眼は耳の如く耳は鼻の如く、五絃の璧たるか、璧の五絃たるかを知らざるなりと。璧は當時の妙手とみゆ。○君　一般人をさす。○入骨愛　眞に深く愛すること、

義解　こゝに五絃をかきならす、これを聽く人は耳を傾けてきゝその心はひつそりとしてめいるやうである。此の伎の名人たる趙璧は諸君がいかにも心の底からその音を愛することを知つて、諸君のために一一五絃のいとをしらべる。

第一第一　絃索索　秋風拂松疎韻落

字句解　索索　蕭索といふの類さびしき貌。○疎韻　まばらなひゞき。○落　高きよりひくき方へくだるをいふ、

義解　第一絃第二絃をかきならすときはその音まださびしく、たとへば秋　風が松が枝を吹き拂うて高きよりひくきに吹きおろすがごとし、

第三第四絃泠泠　夜鶴憶子籠中鳴

字句解　泠泠　水のさら〳〵なるおと、

義解　第三絃第四絃にいたればその音水のさら〳〵なるが如く、たとへば夜の鶴が子を憶うて籠の中に鳴くがごとし、

第五絃聲最掩抑　隴水凍咽流不得

字句解　掩抑　おさへつける、あがらぬこと。隴水　甘肅省鞏昌府通渭縣の西南に隴山あり、大坂なり、俗歌にいふ、隴頭流水　鳴聲幽咽　遙望秦川　肝腸斷絶と、隴水とは隴頭の水をいふ、。凍咽　こほりむせぶ。流不得　不得流に同じ、

義解　第五の絃の聲はいちばんおさへつける樣で、たとへば隴頭の水がこほりてむせびつゝよく流れ得ざるにさもにたり。

五絃並奏君試聽　凄凄切切復錚錚　鐵擊珊瑚一兩曲　氷寫玉盤千萬聲

字句解　並奏　いつしよにかなでる。凄凄　凄は淒に作るべし、淒淒は風さむき貌。切切急なる貌。錚錚　金のさら〳〵なるおと、。寫　そのなかへ他の器からうつしつぎこむこと、

義解　この五つの絃を一しよにかなづるをきいてみよ、その音たる或は淒々と風すさまじく或は切切となるおと急に或は錚々と金鐵を振ふがごとく、或は鐵を用て珊瑚の枝をうちくだくが如きもの一二曲、或は玉盤に氷塊をそゝぎこむが如きもの千萬聲、

鐵聲殺　氷聲寒　殺聲入耳膚血慘　寒氣中人肌骨酸　曲終聲盡欲半日

四座相對愁無言

字句解　殺　殺氣をふくむ。寒　襟もとに水を注がるゝ如き心地せしむ。膚血慘　戰場に負傷者横はりて膚の血みどろなるのむごたらしさを想はしむ。中人　中は「あたる」なり、その人を害するなり、。酸　ひどくいたむをいふ、

義解　鐵の如き聲は殺氣立ちたり、氷の如き音は心をして寒からしむ、殺聲をきけば戰場の慘を想はしめ、寒氣に觸るれば肌骨をも痛ましむ。此の五絃の曲終りて聲の收まるころには時の半日ばかりも費ひたらむ、之をきいては滿座の人々うちむかひて愁ひたるまゝ一言をも發するものなし、

座中有一遠方士　啷啷咨咨聲不已　自歎今朝初得聞　始知孤負平生耳　唯憂趙璧白髮生　老死人間無此聲

字句解　啷啷　蟲の悲む聲。咨咨　なげく聲。孤負　そむく、耳にそむくとは此の妙音を聽かせざりしは耳にすまぬわけなり、

義解　一座のうちに一人の遠方の士がゐて、しきりに歎息してやまぬ、その人のいふには、

こんな妙音は今朝始めて聞くことができた、今までつねづねに耳を持ちながらかゝる妙音をきかせずその耳にすまぬことしてゐたことがやつとわかつた。心配なのは、趙璧に白髮が生へて彼が老い死んでしまつて人間に此の妙なる音聲が無くなりはすまいかといふことだ、と。

遠方士　耳聽五絃信爲美　吾聞正始之音不如是

字句解　耳　耳を爾に作れる本あり、爾をよしとす、汝なり、遠方の士を指す。爲美　五絃の音聲を美なるものとかんがへる。正始之音　「詩經」の始の序に周南召南　正始之道　王化之基とあり、孔穎達の疏に正始之道を正其初始之大道と釋せり、これは男女の道が王化の基となるといふ點よりかく言へり、但し始とは四始の始をいふ、四始とは國風の詩に限らず、「關雎」は國風の始、「鹿鳴」は小雅の始、「文王」は大雅の始、「清廟」は頌の始、これ四始なり、正始之音とは「正しき始の音」をいふ、此等の詩篇は風、大小雅、頌、の始にありて正しき音なるをいふ、故に白氏も亦下に「清廟」の詩を引きて言をなせり、

義解　以下は作者の議論、

遠方の士よ、汝は五絃の聲をさゝて信に美なものとかんがへてをるけれども、自分の聞くところでは正始の音といふものはさやうなものではない。

正始之音其若何　朱絃疎越清廟歌　一彈一唱再三歎　曲淡節稀聲不多

融融曳曳召元氣　聽之不覺心平和

字句解　朱絃疎越清廟歌　「禮記」の樂記に、清廟之瑟　朱絃而疏越　壹倡而三歎　有遺音者矣　とあり、鄭玄の注に「清廟トハ樂ニテ「清廟」ノ詩ヲ歌フコトナリ、朱絃トハ練リタル朱絃ナリ、練ルトキハ聲濁ル、越トハ瑟ノ底ノ孔ナリ、マバラニアナヲアケルハ聲ヲ遲カラシムルナリ、倡トハ歌ノ句ヲ發スルナリ、遺トハ餘ノゴトシ、」といへり。音樂を奏するときの順序に歌　笙　間　合　の別あり、升歌に始まりて合樂に終る、升歌を始といひ合樂を亂といふ、升歌をまた登歌ともいふ、升といひ登といふは堂の上にのぼりてうたふを以てなり、「清廟」の詩は升歌として用ゐらる、卽ち始にして其の詩が正始の音たる所以なり、○曲淡　ふしまはしがあつさりしてゐる。節稀　節の間が遠いこと。融融　曳曳　左傳「隱公元年に鄭の莊公が詩を賦することを記したる處に融融、及び泄泄の語あり、此の曳曳は洩洩に作るべし、洩洩は泄泄と同じ、「左傳」の杜預の注に融融は

和樂のさま、泄泄は舒散のさまといへり、○召元氣　召は招來するをいふ、元氣とは天地の間に流行する至大の氣をいふ、

義解　正始の音とはそれはどんなものか、といふに「清廟」の歌のごときがそれだ、「清廟」を歌ふには瑟といふ樂器を用ゐる、その瑟は底の孔はまばらにあけて聲を遲緩にさせる、その絃は練つた朱色のものを用ゐわざと音をさびさせてある、その朱絃を彈じて一人が一の句を唱へだすと三人のものがそのあとからくつゝいて重ねて二度三度くりかへして同じ句を歎じてうたふ。いかにもふしまはしがあつさりとして、節拍子は間遠うで聲が少い。それでゐてまことにやはらぎ樂しさうで、氣心地もくつろぎのびやかで、その音聲から天地自然の六元氣をよびよせる。之をきくものは覺えず知らずその心が平和になる。

人情重今多賤古　古琴有絃人不撫　更從趙璧藝成來　二十五絃不如五

字句解　古琴　琴の字本邦古寫本に瑟に作れるものあり、瑟の字よろし、瑟は二十五絃なり。撫　手を以てなでる、ひくことなり、○五　五絃をいふ、

義解　人情はとかく今を重んじて古を賤しむものだ、古代の瑟は絃があつてもだれもそれをなでさする人はない。そのうへ趙璧の藝ができあがつてからこのかたは一層五絃大流行で二十五絃の瑟は到底五絃にはかなはなくなつた。

〔第十八〕　蠻子朝　刺將驕而相備位也

蠻子朝　汎皮船兮渡繩橋　來自嶲州道路遙

題意　この詩は武將驕りて宰相はたゞその位に備はり何事をも爲すこと能はざるを刺る。

字句解　蠻子　南詔の蠻人をいふ。汎　泛に同じ、うかぶ。皮船　皮にて造りし船。繩橋　なはにて作れるはし。嶲州　今の雲南省の麗江府、四川省の寧遠府、等は漢の越嶲郡にして隋、唐の嶲州の地なり

義解　南詔の蠻人が唐の方へ入朝してきた。彼等は途中皮船にのつて水にうかんだり、繩の橋を渡つて川をこえたりして、はる〳〵嶲州の方からやつてきた。

入界先經蜀川過　蜀將收功先表賀

字句解　界　唐との國境をいふ。蜀川　今の四川省をいふ。蜀將　劒南西川節度使韋皐をい

ふ、韋皐は貞元元年 七八五 より節度使となり二十一年間も蜀に在りしものなり。收功　蠻人入朝の功を己が手に取りこむ。表賀　天子に上表して拜賀す、

義解　蠻人等は唐との國境に入るにあたりては先づ蜀の地方を經過するのである、それで蜀の長官たる武將がこのたびの功を吾物顔にして天子に表文を上り祝賀の意を申しあぐる、

臣聞雲南六詔蠻　東連牂牁西接蕃　六詔星居初瑣碎　合爲一詔漸強大

字句解　六詔蠻　「舊唐書」の南詔蠻傳に、南詔蠻ハ本烏蠻ノ別種、姓ハ蒙氏、蠻王ヲ謂ウテ「詔」ト爲ス、其ノ先、渠帥六アリ、自ラ六詔ト號ス、兵力相埒シ、各〻君長アリ、統帥ナシ、と見ゆ、又同傳に、開元二十六年 七三八 詔シテ皮邏閣ニ特進ヲ授ケ、越國公ニ封ジ、名ヲ歸義ト賜フ、其ノ後チ洱河ノ蠻ヲ破ルニヨリ功ヲ以テ策シテ雲南王ヲ授ク、歸義漸ク强盛ニシテ五詔浸弱シ、是ヨリ先キ劒南節度使王昱、歸義ノ賂ヲ受ケ奏シテ六詔ヲバ合シテ一詔トセシム、歸義既ニ五詔ヲ併セ羣蠻ヲ服セシメ吐蕃ノ衆兵ヲ破リ日ニ以驕大ナリ、入覲スル毎ニ朝廷モ亦禮異ヲ加フ、とあり、以て六詔の統一の狀を見るべし。牂牁　通常牂牁と書す、漢の時の郡の名、今の雲南省の東部、貴州省の大部分は皆其地なり、。蕃　吐蕃なり、

。星居　星の散在する如く離れ〳〵に居る。瑣碎　細小なるをいふ、

義解　以下は表文中の意をのぶ、臣が聞きまするに、雲南の六詔蠻は東は牂牁の地方に連り西は吐蕃に接近してをります る、六詔は始は星のやうにばら〳〵離散してちいさいものでありましたが併合せられて一詔となつてからだん〳〵强大となつてまゐりました。

開元皇帝雖聖神　唯蠻倔强不來賓

字句解　開元皇帝　玄宗。倔强　つよい。來賓　お客分として唐の方へ入朝する、

義解　玄宗皇帝は聖神の德を備へたかたでありましたがたゞこの蠻人だけは强くてこちらへ入朝しませなんだ。

鮮于仲通六萬卒　征蠻一陳全軍沒　至今西洱河岸邊　箭孔刀痕滿枯骨

字句解　鮮于仲通　天寶十三載 七五四 仲通は兵六萬を統べて南雲王閣羅鳳を西洱河に討ち全軍　沒せり、。西洱河　雲南省大理府太和縣の東にあり、一に洱海といふ、源は浪穹縣の北なる罷谷山より出で、南して鄧川州の東を經、又南して太和縣界に入り、西洱河と名けらる

○箭孔　やの穿つたあな。○刀痕　刀のきりつけたあと、

義解　天寶の時鮮于仲通が六萬人の卒を以て蠻を征伐したが、その一戰で大敗して全軍が覆沒してしまひ、今日に至るまで西洱河のほとりでは枯れくちた骸骨にも箭きず刀きずが一ばいあります。

誰知今日慕華風　不勞一人蠻自通　誠由陛下休明德　亦賴微臣誘諭功

字句解　華風　中國文明の風。○休明　休は美なり。○微臣　蜀將自ら謙遜していふ。○誘諭　唐の方へ來る樣にいざなひさとす、

義解　その詔人が意外にも今日は中國文明の風を慕うて、こちらからは一人も勞せしめぬのに彼の方から自ら進んで交通を求めてきた。これは誠に陛下の美にして光明なる御德のおかげによるものではござりまするが、亦一面にはわたくしが彼等をしてさやうにすべくこれを誘ひ諭した功にもよるものでござりまする。

こゝまでが蜀將の表文の意、

德宗省表知如此　笑令中使迎蠻子

字句解　省　かへりみる、○中使　奥よりのお使ひ、宮中の使、

義解　德宗皇帝は表文を御覽になつてさやうであつたかと御承知になり、につこりとして宮中の御使者に蠻人を迎へさせられた。

蠻子道從者誰何　摩挲俗羽雙隈伽　清平官持赤藤杖　大將軍繫金呿嗟

字句解　道從　道は導に同じ、先導するものをいふ、從はあとからつきしたがふものをいふ。○誰何　だれ人、何もの、○摩挲俗羽雙隈伽　此の一句未だ正解を得ず、博雅の高敎を俟つ、摩挲は蠻族の名ならん、○清平官　「唐宋詩醇」に「新唐書」の南蠻傳を引き、清平官ハ國事ノ輕重ヲ決スル所以ノモノニシテ猶唐ノ宰相ノゴトキモノナリ、といへり、○赤藤杖　赤藤は土產の藤とみゆ。○大將軍　同じく「詩醇」に上傳を引きて、大軍將十二　與清平官等列　曹長以降　繫金佉苴　佉苴韋帶也　といひ、「呿嗟ハ佉苴ト同ジ、大將軍ハ恐クハ是レ大軍將　訛ナラム」といへり、其說從ふべし、將軍は軍將とあるべきなり、○金呿嗟　上に見ゆ、金をかざりしなめしかはの帶、

義解　さて蠻人の謁見のときの先導　隨從にはいかなる人、いかなる物があるか。……。

その宰相どもいふべき清平官は赤藤の杖を手に持ち、その大軍將は金で飾つた帶をかけてゐる。

異牟尋男尋閤勸　特勑召對延英殿

字句解　異牟尋　南詔王の名、「樂府詩集」に「唐書」を引きて、貞元ノ初韋皐諸蠻ヲ撫ス、九年四月ニ至リ南詔ノ異牟尋歸附センコヲ請フ、十四年又使ヲ遣ハシ朝シ賀セシム、といへり、又李公垂傳（李紳が作れる樂府の題下の注を指す）を引きて、貞元末　蜀川始通蠻國といへり、蓋し此の詩の南詔蠻入朝の事實は貞元末のことをいへるなり。尋閤勸　異牟尋の子の名とみえたり、。特勑　特別の敕命。召對　召して對面する。延英殿　東内に屬せり、中書省の北、紫宸殿の西に在り、

義解　かくて南詔王異牟尋の男なる尋閤勸が特別の御思召しを以て召し出だされて延英殿で謁見仰せつけられる。

上心貴在懷遠蠻　引臨玉座近天顏　冕旒不垂親勞俠　賜衣賜食移時對

字句解　貴在　その貴ばれる點は次の事にある。懷　なづくる。玉座　天子の御座。天顏　天子のお顏。冕旒　冕は天子の冠、旒は冠からさがつてゐる珠をつゞつたびら〳〵、天子は冠前冠後に各〻六旒、合せて十二旒をさげる。不垂　顏のよく見ゆる樣にするなり。親　天子自身に。。勞俠　俠は徠に同じ、いたはる、。移時　やゝしばし時間の經過すること。對　對面する、

義解　お上の御心ではその貴ばるゝ點は遠方の蠻人をてなづける樣にするといふ處にあるのである、それで尋閤勸をみちびかせてなるべく玉座に接近させお顏と遠くない樣にさせられ、御冠のびらをもはねあげて御自身にいたはりの御言葉があり、衣服や飲食を賜はり、幾時間も御對面あらせられた。

移時對　不可得　大臣相看有羨色　可憐宰相拖紫佩金章　朝日唯聞一刻

字句解　相看　かほ見あはせる。羨色　蠻人をうらやむかほつき。宰相　唐の宰相をいふ。拖紫　紫の綬をひく。金章　黃金の印章、銀印は朱綬、金印は紫綬を用う。朝日　あさのま。唯聞　聞とは自ら耳に傳聞するをいふ。一刻　十五分間ばかり、

義解　この南詔蠻に對する待遇の如き幾時間もの對面はとても得らるゝものではない。それで唐の大臣等はかほ見あはせて蠻人を羨むやうすがあるくらゐだ。氣の毒なことよ、宰相は紫の綬をひいて金の印を腰におびてはゐるが、自分の聞く所では彼等が參朝のとき天子が御面會になるのはたつた一刻だけの間といふではないか。

〔第十九〕　驃國樂

欲王化之先邇後遠也

驃國樂　驃國樂　出自大海西南角　雍羌之子舒難陁　來獻南音奉正朔

題意　この詩は天子の德化の近き地より次第に遠方に及ぼされんことを希望するの趣旨を以て作れり。

題下の注に「貞元十七年來獻」とあり、十七年の事とす。「舊唐書」の音樂志を按ずるに

貞元十六年正月　南詔異牟尋　作奉聖樂舞　因韋皐以進　十八年正月　驃國王來獻本國樂

とありて十八年の事とせり。又「舊唐書」（卷百九十七）驃國傳に

古來嘗通中國　貞元中　其王聞南詔異牟尋歸附　心慕之　八年（此の八年は十八年の誤なるべし）乃遣其弟悉利移　因南詔　重譯來朝　又獻其國樂曲凡十曲　與樂工三十五人俱　樂曲皆演釋氏經論之詞意　尋以悉利移　爲試太僕卿

とあるは則ち十八年の事ならん。「凡十曲」とあるは「樂府詩集」によれば「一十二曲」に作れり。「新唐書」の禮樂志には

貞元十七年　驃國王雍羌　遣其弟悉利移城主舒難陁　獻其國樂　至成都　韋皐　復譜次其聲　又圖其舞容樂器以獻　凡工器二十有二　其音八　金貝絲竹　匏革牙角

とあり。是は年代を十七年とする外に舒難陁を雍羌の弟とし、悉利移城主とするの差異あり。

字句解　驃國　今の緬甸地方にありし國名、○角　隅のごとし、○南音　南方の樂音。○奉正朔　唐の曆年號を奉守する、

義解　こゝに驃國傳來の音樂あり、これは大海の西南隅より生出せるもので、驃國王雍羌の子たる舒難陁といふものがわざ〳〵唐の朝廷へ來てこの南方の音をたてまつり唐の曆年號を遵奉し歸服するの意を示したものである。

德宗立仗御紫庭　黈纊不塞爲爾聽

字句解　立仗　仗は儀仗なり、警衛威儀を備へるために立てならべる器なり、兵器刀戟の類をすべて仗といふ。○御　臨御する。○紫庭　宮殿のには。○黈纊　纊は纊に作るべし、黈纊とは黄色の「わた」なり、「わた」をまろくして耳の孔をふさぐ玉とす、古代の「充耳」ミヽダマに相當す、これは冠より糸にてつりさげ丁度耳の孔の處にあたる如くす、天子の冕冠に旒あるは徒らに視ざるがため、纊を垂るゝは徒らに聽かざるがためなり、○不塞　耳の孔をふさがぬなり、わたを垂れぬ、これは音樂の聲をよくきかんがためなり、○爾　舒難陁等をさす

義解　德宗皇帝は殿下に儀仗を立てならべさせられて殿庭に出御になり、平生ならば冠から垂れらるゝ黄色の耳綿をもお取り除けになりていざとばかり驃國の音樂をきこしめされんとす、

玉螺一吹椎髻聳　銅鼓一擊文身踊　珠纓炫轉星宿搖　花鬘斗藪龍蛇動

字句解　玉螺　玉もて飾りし法螺の貝。○椎髻　きつたてのまげ、ゑびすの髪の結ひ樣なり。○聳　たかくたつ。○文身　いれずみしたからだ。○珠纓　珠をつゞつた冠のひも、纓を或は瓔に作れり、瓔は瓔珞をいふ、頸のかざり、瓔の字或はまさる、○炫轉　ぼか〳〵かゞやきてめまぐるし。○星宿　ほし。○花鬘　うつくしきはなかづら。○斗藪　ふるふこと、

義解　音樂舞のさまをのぶ、玉螺が一たび吹きならされると椎髻が起ちあがつて高く立つ、銅の大鼓がうちだされるとほりものをしたからだが踊りだす、そのとき珠をつゞつた瓔珞はかゞやいて眼もくらむばかり、たとへば星宿がゆらぐかとあやしまれ、また花鬘がうちふるはるゝところ龍蛇がのたうちまはるかといふかる。

曲終王子啓聖人　臣父願爲唐外臣

字句解　王子　舒難陁なり。○啓　啓上する、申しあげる、○聖人　天子、○外臣　外國のもので臣下となる、

義解　樂曲がすんだところで舒難陁が德宗に申しあげる、わたくしの父雍羌はどうぞ唐の外臣にしていたゞきたいと申してをりますと。

左右歎呼何翕習　至尊德廣之所及

字句解　左右　天子のおそばのものたち。翕習　多くあつまる貌。至尊　天子をいふ、至尊を或は皆稱に作る、皆稱に作らずとも此の一句は左右が言ふことを敍したるなり、

義解　そのとき左右のお側の臣たちがよろこびさけぶ、それはどうしてあんなに多くのものがとおもはるゝばかりであつて、彼等がいふには、このたびの事は全くお上の德が廣いのが遠方にまで及んだ結果に外ならぬ、と。

須臾百辟詣閤門　俯伏拜表賀至尊　伏見驃人獻新樂　請書國史傳子孫

字句解　須臾　しばらく。百辟　辟は君なり、百辟は百官をいふ。詣　いたる。閤門　ごもん。俯伏　腰をかゞめ、又は地に平伏する。拜表　拜の禮を以て表文をさゝげる。伏見　以下は表文中の意をいふ、。國史　唐の國家の歷史

義解　しばらくすると百官どもが御所のごもんのところへやつてきて或は俯し或は平伏して表文をたてまつゝてお上に對し祝賀を申しあげる、その意に、謹んで見てみまするにこのたび驃國の人が新しい音樂を獻上いたしました、此の事はどうぞ國家の歷史に書きしるして後世子孫にまで傳へたきものでござると。

時有擊壤老農父　暗測君心閑獨語

字句解　擊壤　昔帝堯の時にかゝる老人ありしと傳ふ、それを借りたるなり、農父をかり自己の意を述ぶ、壤とはつちくれなり、壤を木履の如き遊戯の具なりとするは恐くは後世の考なるべし、。暗測　ひろかにおしはかる。君心　天子の心。閑　間の音通、しづかに、

義解　その時壤をうち太平を樂む老いたる農父がゐて、ひそかに天子の御心をおしはかつてしづかにひとりごとをいふ、

聞君政化甚聖明　欲感人心致太平　感人在近不在遠　太平由實非由聲

義解　以下「君亦聖」まで老農父の語、

わたくしが聞きまするに、今お上は政治を以て下民を感化せられその德甚だ聖明にして、更に民心を感化せしめて太平を致さんと希望せらる、と。わたくし考へまするに民心を感化せんとならば、その重しとする所は近地に在るのであつて遠方に在るのではない。また太平な

るものはその事實如何に由るものであつてたゞ名聲評判に由るものではござらぬ。

觀身理國國可濟　君如心兮民如體　體生疾苦心憯悽　民得和平君愷悌

字句解　身　吾が身體をいふ。理　治なり。憯悽　心いたむ。愷悌　樂易なり、たのしく平易なり、

義解　吾が身體を觀て國を治むれば國はすくふことができる、吾が身體にあてはめてみれば君は心の如く民は形體の如きものである、體が病氣では心はいたむ、民が平和を得れば君の心もたのしくやすらかである。

貞元之民若未安　驃樂雖聞君不歡　貞元之民苟無病　驃樂不來君亦聖

義解　貞元の人民が若し安泰でないならば驃國の樂をお聞きになつても吾が君はお歡びにはならぬ、貞元の民が苟も病苦がないならば驃國の音樂が來なくとも君の御聖德にかはりは無い。

老農父の語此に終る、次は作者の言、

驃樂驃樂徒喧喧　不如聞此蒭蕘言

字句解　蒭蕘　蒭は芻と同じ、草を刈るを芻といふ、薪を采るを蕘といふ、芻蕘とは野人のこと、

義解　今世人はやたらにがや〳〵と驃樂驃樂とさわいでゐるが、それよりも此の老農夫の言を聞いた方がどれほどましかわからぬ。

〔第二十〕　縛戎人　達窮民之情也

縛戎人　縛戎人　耳穿面破駈入秦

題意　この詩は困窮の境遇にあつて自己の苦みを他に訴へんとするも能はざる如き人民の情を上たるものに通達せんがために作る。

字句解　縛戎人　しばられたゑびす。耳穿　耳朶にあながあいてゐる。面破　顏面が傷破されてゐる。秦　長安地方、

義解　こゝに縛ばられたゑびすがある、彼等は耳朶には孔があき、顏面はすりこはされ、そんな樣子でおひたてられて長安の方へとやつてくる。

天子矜憐不忍殺　詔徙東南吳與越

字句解　矜憐　矜の字種々の音義あり、(一)矜は矛の柄なり、(二)矜は憐れむなり、卽ち此句、矜憐これなり、又(三)矜敬ふなり(四)矜瘝、鰥、に同じく老て妻なきものをいふ、○徙うつす。吳今の江蘇省。越今の浙江省、

義解　天子之を見て氣の毒に思召され、詔して彼等を東南の方、吳だの越だのゝ地方へうつらしめたまふ、

黃衣小使錄姓名　領出長安乘遞行

字句解　小使　微賤なる役人。領ひきゆる。遞宿つぎの車、

義解　黃い衣をきた小役人が彼等の姓名を帳面にかきつけて、之を引率して長安から出かけ、宿つぎの車に乘りながらゆく、

身被金瘡面多瘠　扶病徒行日一驛　朝飡飢渴費杯盤　夜臥腥臊汚牀席

字句解　金瘡　きりきず。一驛　一とちやうば。朝飡　飡は飡の俗字、餐と同じ、飲食のもの。費　多く費すをいふ。腥臊　なまくさし。牀　ねだい、

義解　ゑびすどもはそのからだはきりきずを被り、面は多くやせてゐる。病氣のからだを扶けてかちであるくこと一日にたつた一とちやうば位のみちのりである。朝の食事には飢たり渴したりしてゐるから杯盤のものを多く費し、夜、臥せるときにはゑびすでなまくさいから、ねだいやむしろをよごす、

忽逢江水憶交河　垂手齊聲嗚咽歌　其中一虜語諸虜　爾苦非多我苦多

字句解　江水　揚子江。交河　今の新疆省の土魯番の西にある川、

義解　だん〳〵南へ進んで揚子江のところまでくると急に彼等は自分の故郷に在る交河のことをおもひだし、手を垂れ聲をそろへてむせびながらかなしみうたふ。その中で一人のゑびすが他の衆勢のゑびすにものがたるやう、汝等の苦みは決して多くはない、わしの苦みの方が多いのぢや、と。

同伴行人因借問　欲說喉中氣憤憤

義解　道づれなかまが因て試みにその仔細を尋ねてみると、そのゑびすは何か返答をしやうとしながらもそのものどのなかでおこりっぽいがつまつて言葉が急にはでてこぬ樣子だ。

自云鄉管本涼原　大曆年中沒落蕃

字句解　鄉管　本籍地。涼原　涼州の原、涼州は甘粛省の涼州府。大曆　代宗の年號七六六至七七九。沒落　其地が取られておちこむ。蕃　吐蕃、

義解　「鄉管」より詩の終りまで此の虜の物語る所なり、その虜がいふやう、自分の本籍地はもと涼州地方である、その地方は大曆年間に吐蕃の侵略をうけて我が身は吐蕃の方へおちこんだ。

一落蕃中四十載　身著皮裘繫毛帶

義解　一たび蕃中に落ちてからこのかたざつと四十年、我が身は蕃人の風俗にかはつて身には皮ごろもをつけ毛の帶をつないでゐる。

唯許正朝服漢儀　斂衣整巾潛淚垂　誓心密定歸鄉計　不使蕃中妻子知

字句解　許　蕃人がゆるす。服漢儀　支那本土の風儀に從て衣服をつける。斂衣　衣のみだれをとりつくろふ。整巾　頭巾をきちんとつける、これは漢支那本土の風儀なり。歸鄉　涼州の方へかへる。蕃中妻子　この人蕃人を妻にもてりとみゆ、白詩の注に李如選に關する事を載せたり、

義解　蕃人の法では正月元日の朝だけ我々が漢人の風儀に從ふことをゆるすのである、そのとき自分は漢の衣巾をきちんとつけながら悲みにたへずしてひそかに涙をながした。そうして內々心に誓つて人知れず故鄉の涼州へにげかへる計をきめた。そのことは蕃中の妻子にさへ知らせぬのだ。

暗思幸有殘筋骨　更恐年衰歸不得

義解　心の中でひそかにかんがへるに、今ならばまだ幸に殘れる筋骨があつて逃げ奔らうとおもへばできる、けれども若しもつと年が衰へたならばとても歸れないであらうかと氣づかはれる。（それだから逃げ出す決心をした。）

蕃候嚴兵鳥不飛　脫身冒死奔逃歸

字句解　蕃候　蕃人の見張り番。嚴兵　武器をいかめしくならべて警戒する。鳥不飛　鳥さ

へ恐れて近くとばぬ。冒死　冒とはその難儀を身にふりかぶること、

義解 逃げ出さうとするときに、蕃人の見張り番たちはいかめしく物の具をならべて警戒してゐて鳥さへも飛ばぬほどであつたが、その中をかけぬけて死の難儀を冒かして奔て逃げかへつた。

晝伏宵行經大漠　雲陰月黑風沙惡　驚藏青冢寒蛁疎　偸度黃河夜冰薄

字句解 青冢　漢の元帝の宮人王嬙（昭君）毛延壽といふ畫工に賄せざりしため醜く畫かれ天子の寵を得ず匈奴に嫁せしめらる、嬙、匈奴に沒す、其の塚のみ草枯れずして青し、人之を青冢といふと。青冢は今の歸化城の南三十里にありといふ、○偸・ひそかに。○度　渡に同じ、○黃河　塞外の黃河なり、

義解 人目をしのぶ身の上なれば晝は伏してかくれ宵はあるいて大なる沙漠を經過す、雲はかげり月の色光りくろく風沙の勢猛惡なり、捕手のくるかと驚きて青冢のあたりに身をかくせば冬枯れの草まばらに、ひそかに黃河を渡れば夜の冰はること薄く危險きはまりなし、

忽聞漢軍鼙鼓聲　路旁走出再拜迎　游騎不聽能漢語　將軍遂縛作蕃生

字句解 漢軍　支那本土の軍隊、唐の軍隊。○鼙　つゞみ。○游騎　巡行の騎兵。○能漢語　自分が支那語をよくはなす。○將軍　漢軍の長。○蕃生　吐蕃人。

義解 そこへ忽ち本土の軍隊が鳴らすつゞみ太鼓の音をきゝつけたから路ばたへ走りでゝ再拜してその軍隊を迎へやうとした。ところが巡行の騎兵らは自分が支那語をよくはなすのをきゝもせずに、長官の所へつきだして長官遂に自分を吐蕃人なりとして縛つてしまつた。

配向江南卑濕地　定無存郵空防備

字句解 配　ながしものにする。○江南　揚子江の南、江を或は東に作る、○卑濕地　ひくゝしめつぽい地。○定　定の字を豈に作れる本あり、豈をよろしとす、○存郵　存は存問、なぐさめること、郵はあはれみすくふ。○防備　病氣などに對するふせぎの手くばり、

義解 上にのべた樣な仔細で、流しものにされて江南の卑濕な地方へ向つてゆくのである、唐の政府から自分たちをなぐさめたりあはれんだりしてくれぬことも無からうけれども氣候がわるいのではそれに對するふせぎの手くばりはないのである。

念此呑聲仰訴天　若爲辛苦度殘年　涼原鄉井不得見　胡地妻兒空

棄捐

字句解　若爲　いかでか。殘年　老いさき。鄉井　井は汲水に因て交易の地となる、鄉里及その交易の處、。棄捐　すつ、

義解　このことを念うて聲を呑みて仰で天に訴へる、どうしてこんななんぎをしてこれからの老いさきをすごさうかと、涼州の故鄉は見ることができず、蕃中においた妻や兒どもは空しくおきすてゝある、

沒蕃被囚思漢土　歸漢被劫爲蕃虜　早知如此悔歸來　兩地寧如一處苦

字句解　漢土　本土をいふ。劫　おびやかす、。兩地　蕃と漢との、。一處　蕃地一所、

義解　蕃におちこんでは囚はれて本土のことを思ひ、本土に歸らんとしては劫かされて蕃人のゐびすとせられる。こんなことゝ知つたならかへつてこない方がましであつた、かへつてきたことをくゆる次第である。二ヶ所で苦しむよりか一ヶ所で苦んだ方がよかたのだ。

縛戎人　戎人之中我苦辛　自古此寃應未有　漢心漢語吐蕃身

字句解　寃　無實のつみ、

義解　しばられたるゐびす、そのゐびすのうちで自分はつらさがまさつてゐるのだ。古から自分のやうな寃罪はまだ無いことであらう、心も言語も本土人でありながら身體だけは吐蕃人としての取扱をうけてゐるといふことは。

新樂府〔下〕

〔第二十一〕驪宮高　美天子重惜人之財力也

高高驪山上有宮　朱樓紫殿三四重　遲遲兮春日　玉甃煖兮溫泉溢　嫋嫋兮秋風　山蟬鳴兮宮樹紅　翠華不來兮歲月久　牆有衣兮瓦有松　吾君在位已五載　何不一幸於其中

題意　この詩は天子が人民の財力を消費せんことを惜みはゞからるゝことをほめてつくれる作である。

字句解　驪山、山の名、今の陝西省西安府臨潼縣にあり、唐の玄宗の開元十一年十月に溫泉宮をこの山に置き此處に行幸す、それより毎年十月にはこゝに來られ、その他屢〻行幸あり。天寶六載十月には溫泉宮を華清宮と改名せらる。溫泉は今も存す。○朱樓　あかくぬり飾りたるたかどの。○紫殿　紫色もて飾りたる御殿。○三四重　三層にも四層にも互に高くそびゆる。○遲遲　春の日の永くして、容易に暮れざるさま。○玉甃　甃は浴場をたゝむ瓦をいふ、玉とは美石をいふ。○嫋嫋　風のなよ〳〵と吹くさま。○宮樹紅　紅とは霜を經て紅葉するをいふ。○翠華　天子の御旗なり、翠羽を以て飾るによりていふ。○衣　はツタかつら、苔、の類をいふ。○松　は實より生じたる小さき松苗をいふならん。○五載　憲宗元和五年に至りて在位五年なり。○幸　天子の行かるゝを幸といふ。其中　驪山の離宮の中をいふ。

義解　あの高々とそびえた驪山の山の上には離宮がある。それは朱きたかどの紫の御殿、三層にも四層にも屋のむねがつみかさなつて見ゆる。うら〳〵と永き春の日には御湯殿の玉の疊みがはらあたゝかにして溫泉の水あふれこぼれ、なよやかに秋風吹くころには山の蟬なきて宮居の樹々紅葉の色を染む。

その昔玄宗皇帝の頃には年々御幸なりしこの宮にも、天子の御旗の出でましなきこと久しいあひだであつて、牆には葛かつらや苔の衣がぶらさがり、瓦には松の實生ができてゐる。吾が憲宗皇帝には已に御位にあらせらるゝこと五年であるのに、なんで一たびこの離宮に御幸あそばされぬのであらうか。

西去都門幾多地　吾君不遊有深意　一人出兮不容易　六宮從兮百司備

八十一車千萬騎　朝有宴飫暮有賜　中人之産數百家　未足充君一日費

字句解　西　長安は驪山の西にあたる。都門　長安城の門。幾多地　どれほどの土地、これは里程にていふ、どれほどぞとはどれほどかもなく程近きにといふなり。君　憲宗。深意ふかき趣意。一人　天子御一人。六宮　天子の奥御殿をいふ、天子の后は六宮を立つ、三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻・等の女官あること「禮記」の昏義篇に見ゆ。百司　百官のつかさ。八十一車　漢の制度によれば天子の鹵簿には大駕・法駕・小駕・等の別あり、大駕のときは公卿奉引し、大將軍參乘し屬車八十一乘あり。是最も盛なる御行列なり。千萬騎　多くの騎馬。宴飫　飲食のこと、飫とは食の多きをいふ、又坐宴を宴といひ立宴を飫といふ。賜　臣下に對する下さりもの。中人　極富極貧の中間にある人民。君　天子をさす。

義解　この驪山宮は西の方長安をはなるゝことそもどれだけのみちのりあるといふのか、さほどに遠いといふわけではない。それに吾が君憲宗皇帝のこゝへ御遊びにならぬといふは深きおぼしめしのあるのである。以下深意を推していふ、すなはち御一人がお出ましになるには容易なことでない、奥の女官たちもおともをすれば朝廷百官のつかさも缺くるところなくつきしたがひ、行列のおとも八十一車に千騎萬騎の勢揃ひ、朝には御宴會が設けられ、暮には御下賜の物の數々がある。中産階級の家數百軒をよせあつめても君の一日の費用に充てるにまだ不十分である。

吾君修己人不知　不自逸兮不自嬉　吾君愛人人不識　不傷財兮不傷力
驪宮高兮高入雲　君之來兮爲一身　君之不來兮爲萬人

字句解　修己　自己の德行を修むるなり。自逸　逸とは安逸、逸樂なり、何事をも爲さずあそびをること。自嬉　嬉とはあそびたのしむこと。人　人民。傷財　浪費して財をそこなふ。傷力　民の財力を傷害するなり。この傷の字或は奪に作る、奪とは强力を以て他の物を我が方へ取ることなり。

義解　吾が君がいかに身の德をお修めになるかは他人は知らぬが、君は安逸したまはず、まだいたづらにあそびたのしみたまはず。吾が君がいかに人民を愛したまふかは他人は知らぬが、君は財貨を浪費したまはず、民力を傷害したまふことなし。

驪山宮の高きことよ、高きことは雲のなかにまではいりこんでゐる。かしこへ君がお出ましになるのは御一身の愉快の爲めであるが、お出ましにならぬといふはそれは天下萬民の爲め

にとてである。これが吾が君のこゝへ御出ましにならぬ深きおぼしめしである。

〔第二十二〕百錬鏡　辨皇王鑒也

百錬鏡　鎔範非常規　日辰置處靈且奇　江心波上舟中鑄　五月五日日午時　瓊粉金膏磨瑩已　化爲一片秋潭水

題意　この詩は天子は鏡を以て鑒みず人を以て鑒となすことをいへり、天子の鑒といふことについて道理をわかちのぶるなり。

字句解　百錬　いくたびも金屬をねりきたへること。鎔範　いものをするとき用うる「かた」なり。非常規　規は正圓をいふ、通常の圓に非ずとは特別に圓きをいふ。日辰　日影をはかる時計器。靈且奇　靈は不可思議なこと、奇は奇妙なり、卽ち次の二句にいふ如きことをさす。奇の字或は祇に作るも今從はず。江心　揚子江の中心。鑄　かねをとろかしている。日午　正午。瓊粉　玉のやうにうつくしきこな、昔はみがきことして玄き錫の粉末を用う。金膏　黃金色のあぶら。磨瑩　みがきひからす。已　やむ、をはる。化　かはつて。秋潭水

秋のふちの水、秋は水すむゆゑ鏡のくもりなきさまをたとへていふ。

義解　さてこゝに錬りにねつて造りあげた鏡がある。之を造るとき用ゐる日時計の置かるゝ場所は不思議で奇の正圓のものを用ゐたものである。之を造るとき用ゐる日時計の置かるゝ場所は不思議で奇妙なところだ。卽ちそれは五月五日の正午の時刻に揚子江の水面中央の波の上で舟の中で鑄あげるのである。鑄た鏡をうつくしい粉やあぶらでひかるまでみがいてしまうと、鏡とはちがつて一片の秋のふちの水かとまがふ樣なものにかはるのである。

鏡成將獻蓬萊宮　揚州長吏手自封〔鈿匣珠函鏁幾重〕人間臣妾不合照背有九五飛天龍

字句解　蓬萊宮　唐の東內（東の御所）たる大明宮のこと、○揚州　江蘇省揚州府江都縣治。長吏　吏の字或は史に作る、長史は都督　唐の時、揚州には大都督府を置く、府に都督一人、長史一人あり、長史は從三品官なり、○「鈿匣」の句は古寫本により補ふ、或は鈿匣珠函を鈿函金匣に作れり、鈿匣とは螺鈿の貝ずりの裝飾せるはこ、珠函は眞珠をちりばめたるはこ、○鏁は錠をおろしてしめること○臣妾　男女をいふ、天子に對する臣下の辭なり、天子に對すれ

ば男はその臣、女はその妾めしつかひ、にあたる。○合　俗語なり、「まさに何々すべし」と訓す。○背　鏡の背面。○九五　易の卦に爻六本あり、爻を稱するとき陰爻を六にてよび、陽爻を九にてよぶ、九五とは最下の第一爻より順に上へとかぞへて第五本めにあたる陽爻をさす、易にてはこの九五を天子の位と說く、○飛天龍　天に飛ぶ龍なり、易の乾の卦にては龍を天子と見る、因て此に之を九五の龍といふ、たゞの龍ではなく天子たる龍ぞといふなり。

義解　鏡ができあがつて之を長安の蓬萊宮へ獻上せんとして揚州大都督府の長官が自分の手で之を箱のなかへ封じこんだ、貝すりや眞珠をちりばめたはこにいれていくつもかさね幾重ねの錠前をおろせしことやらん。この鏡の背面には天子九五の位に相當する空とぶ龍の模樣が鑄だされてゐる、人間界のたゞの男や女はとてもこれでその面を照らしてみるなどしてはならぬ尊き鏡である。

人人呼爲天子鏡　我有一言聞太宗　太宗常以人爲鏡　鑒古鑒今不鑒容
四海安危居掌內　百王治亂懸心中　乃知天子別有鏡　不是揚州百鍊銅

字句解　天子鏡　天子の用ゐらるゝ鏡。○太宗　唐の第二代の君、英主と稱せらる。○以人爲鏡　貞觀十七年正月魏徵の死するや太宗自らその碑文を書す、侍臣に謂つて曰く、『人は銅を以て鏡と爲せば以て衣冠を正うすべし、古を以て鏡と爲せば以て興替を見るべし、人を以て鏡と爲せば以て得失を知るべし、魏徵沒して朕一鏡を亡ふ、』と。○鑒古鑒今　古今成敗の姿をそれにうつしてみる。○鑒容　自己の容貌をそれにうつしてみる。○居掌內　居とは、ヲラシムル、ヲク、意味なり、居の字或は照に作れり、○百王　前代の多くの君。○別有鏡　銅鏡以外に鏡あり、人鏡をいふ。○百鍊銅　銅は銅製の鏡をいふ。

義解　その鏡を世の人々は天子鏡とよんでゐる。これについて余には太宗皇帝より聞いてゐる一言がある。太宗は平生人を以て鏡とされ、その人鏡に古今の成敗の姿をうつしてみられたが自己のすがたかたちはうつしてみられぬ。また人鏡によつて天下四海の安危をわが掌のうちににぎり、前世百王の治亂をむねの中にかゝげてをられたのである。してみれば天子には別にふさはしき鏡があるのである。たゞしそれはかの揚州できの銅鏡ではないのである。

「異聞集」に天寶中、揚州進水心鏡、背有盤龍、言鑄鏡時、有老人、自稱姓龍名護、以五月五日、於揚子江心鑄之、後大旱、祠龍乃雨、とあり、以て唐時揚州より貢獻せる銅鏡の制を想見すべし。

〔第二十三〕　青石　激忠烈也

青石出自藍田山　兼車運載來長安　工人磨琢欲何用　石不能言我代言

題意　この詩は人臣たるもの丶忠勇義烈の精神をはげまさんがために作りたるものなり。

字句解　藍田山　山の名、長安の南藍田縣にあり、その山玉を產す、○兼車　いくつもの車にて一つの石をひく。運載　はこびのせる。運の字或は運に作る、運ならば一石ならず、つぎ〳〵と載せてくるなり。工人　いしや。磨琢　みがく。何用　何の目的に使用するか。

義解　藍田の山から青色の石が出る。その石をいくつもの車がかゝつて運搬して長安へもつてくる。石工が之をみがきたて丶何に用ゐんとするのであるか、石はもの言ふことができんから、わしが石に代つてそれをいはう。

不願作人冢墓前神道碣　墳土未乾名已滅　不願作官家道傍德政碑

字句解　人冢　普通人の家。神道　墓道。碣　天然石の墓標。墳土　土饅頭のつち。官家おかみ。德政碑　地方官の政治ぶりの德惠あることをほめたゝへた石碑。鐫　けづる、ほる、器具を以て石に文字をほること。實錄　實際の紀事。虛辭　有りもせぬことをならべた文句。

義解　以下石の心もちをいふ。

自分はたゞの人の墓の前にある墓道の石標となりたくはない。なぜかといふと土饅頭の土もかはかぬうちにはやその人の名はほろびてしまふ。またおかみの役人などの道ばたに建てられる德政の碑にもなりたくはない。なぜかといふとその碑には眞實の紀事をほりつけずにうそのことばばかりほりつけるからだ。

願爲段氏顏氏碑　雕鏤太尉與太師　刻此兩片堅貞質　狀彼二人忠烈姿　義心如石屹不轉　死節如石確不移　如觀奮擊朱泚日　似見叱呵希烈時

字句解　段氏　段秀實のこと、德宗の建中四年に朱泚といふ者が謀叛して長安に據つて、時に司農卿の官をしてゐた段秀實を味方にひきいれやうとした。朱泚が膝をならべて秀實と話

しゝながら自ら天子とならうとする事の計畫に及んだとき、秀實はむっとして起ちあがり、そばに居た源休（朱泚の徒黨なり）の腕から象笏を奪ひとり、前へ躍りいで、朱泚の面に唾して、「狂賊め、汝を斬つて萬段にするとも足りないやつぢや、なんでこのわしが貴樣なんぞの謀叛にしたがふものか」と罵り、笏で朱泚を擊つた。朱泚は臂で之をふせがうとしたので笏はひたひにあたつて血がだら〳〵と流れる、朱泚ははひつくばつてにげ走つた。秀實はこの時とう〳〵殺された。○顏氏　顏眞卿のこと、德宗の建中四年李希烈汝州を陷る、宰相盧杞、顏眞卿を忌み之を中央より遠けんと欲し詔して眞卿を遣はして希烈を宣慰せしむ、希烈逆黨を宴して眞卿をして倡優の朝廷を嘲りて戲となすを觀せしむ、眞卿衣を拂うて起つ。希烈又嘗て叛臣朱泚・王武俊・田悅・李納等の使者と同宴す、四使等眞卿を目して李希烈天子とならば眞卿はその宰相なりといふ、眞卿叱して曰く吾兄に顏杲卿あり、さきに安祿山の反せしとき之を罵つて死せるを知らざるか、吾年八十、節を守つて死するを知るのみ、豈に汝等の誘惑脅迫をうけんやと　希烈後ち眞卿を蔡州の龍興寺に送り、興元元年八月奴をして之を縊り殺さしむ、年七十七。○雕鏤　文字をほりつける。○太尉　德宗興元元年二月詔して段秀實に太尉を贈る。○太師　德宗建中二年盧杞宰相となるや、顏眞卿を以て太子太師とす。○刻　文字をきざみつける。○堅貞質　石のことをいふ、かたき質のもの、○二人　段と顏。○屹　によつきり立つさま。○擊朱泚日　上に述ぶ。○叱呵希烈時　上に述ぶ、叱呵とはしかりつけること。

〔義解〕どうか段秀實や顏眞卿の石碑となつて太尉段と太師顏のことをほりつけたいものだ。そうして此の二枚の堅き石質に文字を刻みて彼の二人の忠烈なる姿を形としてあらはしだしたい。その義心は石のやうにまろぶことなく、その死節の志は石のやうにしつかりとして移動せず、笏で朱泚の頭をなぐりつけたときや、聲を厲まして李希烈を叱りつけたときを眼のあたりに見るやうに。

各於其上題名謚　一置高山一沈水　陵谷雖遷碑獨存　骨化爲塵名不死　長使不忠不烈臣　觀碑改節慕爲人　慕爲人　勸事君

〔字句解〕其上　石の表面をいふ。○名謚　名とおくり名と、○陵谷雖遷　をかやたにの地形に變遷があつても、○改節　自己の守る節操をよい方へと改めること。○爲人　段氏顏氏の人格をいふ。○勸　しかせよと勸告する。○事君　忠義の誠を以て天子につかふまつること。

〔義解〕それ〳〵石碑の表面に姓名やおくりなを題し、一つの石は高山に置き一つは水に沈

め、地震などありて陵谷の地形に變遷があつてもその石碑だけはどちらかゞ存在し、たとひその人の骨は塵埃とかはるともその人の名は決して死朽せず、永久に不忠不烈の臣等をしてこの碑を觀てその志節を改易し、段顔二氏の人格を欽慕せしめることにする。どうかその人格を欽慕せしめ、君によく事ふまつることを勸めたくおもふのである。

〔第二十四〕　兩朱閣

兩朱閣　南北相對起　借問何人家　貞元雙帝子
刺佛寺寖多也

題意　佛寺がだん〳〵多くなつて廣く空地を占め、人民の居る處の狹くして住み能はざるに至るを以て、之をそしる詩なり。

字句解　朱閣　朱色を施して飾りたる二階建ちの屋。南北　道路の南と北と。借問　かりに問ふ。貞元　德宗の年號。雙帝子　二人の姫宮樣、德宗に十一人の女子あり、其の中文安公主は入道して嫁せずとあり、是其一人ならん、他の一人は何人なるか、未だ詳かならず。

義解　二つの朱塗りの高閣が路の南と北とに向ひあつてそびえてゐる。試みにそれは如何なる人かとたづねて見ると、それは貞元の天子德宗皇帝の二人の姫宮樣の御家だといふことである。

帝子吹簫雙得仙　五雲飈飈飛上天　第宅亭臺不將去　化爲佛寺在人間

字句解　吹簫得仙　秦の穆公の女弄玉が故事を用う。穆公の時蕭史といふ者あり、能く簫を吹き孔雀白鶴を庭に致す、弄玉之を好む、穆公、弄玉を以て蕭史に妻はす、蕭史、弄玉に簫を敎ふること數年、鳳凰來て其の屋に止まる、穆公爲めに鳳臺を作る、弄玉夫妻臺上に止まり下らざること數年、一日皆鳳凰に隨て飛び去る。雙　姫宮樣御兩人ともに。五雲　五色の雲。上天　仙人に化して天へのぼり去る。第宅　やしき。亭臺　ちん、うてな、。將　ひきゐる、もつてゆくこと。

義解　この姫宮樣たちは昔の弄玉のやうに簫をお吹きになり、御ふたりとも仙人の術を得られ、飄々と五色の雲にのり天に上つてしまはれた。第宅や亭臺は身につけてもつてゆくことはできぬによつて、それがそのまゝかはつて寺となつて人間にのこつてゐるのである。

妝閣妓樓何寂靜　柳似舞腰池似鏡　花落黃昏悄悄時　不聞歌吹聞鍾磬
寺門勅榜金字書　尼院佛庭寬有餘　青苔明月多閑地　比屋齊人無處居

〔字句解〕妝閣　御化粧用の二階。妓樓　妓女を置く樓。寂靜　ひつそり。舞腰　妓女の舞ふときの腰つき。鏡　化粧の時用ゐしもの。花落　春についていふ。悄悄　こつそり、聲なきさま。歌吹　吹とは笛笙の類、吹きものゝおと。鍾　鐘と同じ。磬　樂器として用ゐる菱形の石、歌吹は生前について言ひ、鍾磬は死後佛寺となりし現在につきて言　。勅榜　勅命によりて表札をかゝげる。金字書　金入りの文字、寺名をかきしるすなり。尼院　あまでら。佛庭　おてらのには。寬　ひろらか。青苔明月　苔の生ずる處、明月のさしこむ地、夏と秋についていふ。閑地　使用せぬあきち。比屋　やなみの。齊人　齊民と同じ、齊民に二解あり、中國の禮敎ある民とするものと、貴賤の等級なき民、卽ち平民の意とするものと、是なり。平民の解に從ふもの多し。

〔義解〕昔の御化粧の二階や妓女を置いた樓は今はなんであんなにひつそりとしてゐるのであらう。庭の柳は徒に昔の美人の舞腰に似、池の面は徒らに鏡のすめるに似てゐる。春のたそがれには花おちゝりてこつそり音もなく、歌聲吹聲はあとかたもなく、聞ゆるものとては鐘磬の音ばかりである。寺の門には金字の大看版がかゝげられ、門内の尼寺や、その庭は十分ひろらかに横はつてゐる。夏は青苔のつもるにまかせ、秋は明月の照らすにまかせ、到るところあき地だらけであるが、他方に平民どもはどの家もどの家もやなみに住居の場處が無いといふ有樣である。

憶昨平陽宅初置　呑并平人幾家地　仙去雙雙作梵宮　漸恐人家盡爲寺

〔字句解〕平陽　漢の平陽公主なり、平陽公主は武帝の姉にして、景帝の長女なり。こゝは德宗の此の入道の女のことをいふ。呑并　併呑すること。平人　普通人民。仙去　死せしこと。雙雙　ふたりならんで。梵宮　寺をいふ。人家　家の字或は間に作れり。

〔義解〕昔年この姫宮樣がたの御屋敷かはじめて置かれたときには普通人の家を幾軒ぶり併呑せられたことか、澤山の戸數の分を合併したのである。それがおかくれと共にかく兩兩ならんでお寺にされてしまう。これでは人間の家がしまひにはみんな寺になつてしまひはせぬかと氣づかはるゝのである。

〔第二十五〕 西涼伎　刺封疆之臣也

西涼伎　假面胡人假獅子　刻木爲頭絲作尾　金鍍眼睛銀帖齒　奮迅毛衣擺雙耳　如從流沙來萬里

題意　この詩は國鏡を守る臣をそしるために作る。如何に之をそしるやは本文を讀みて知るべし。

字句解　西涼　甘肅省の涼州府なり、西方に在るゆゑ西涼といふ。伎　わざ。假面　おめん。胡人　西地のゑびす。假獅子　人がまねしたし丶。鍍　めつきする、鍍　字を或は鏤に作る、鏤ならばはめこみたるをいふ。眼睛　ひとみ。帖　帖の字或は貼に作る、張り紙すること。奮迅　奮ひ飛ばんとする貌。毛衣　毛のきもの。擺　ふるふ。如從　如の字或は始に作る、今始の字に從ふ。流沙　「清一統志」によれば今の甘肅省安西州敦煌縣の西にあり。

義解　西涼の舞伎をするものがある。それはお面をかぶつた胡地の人が獅子のまねをして舞ふのである。そのいでたちは、木を雕刻して獅子の頭とし、絲で尾をこしらへ、眼には金めつきの球をはめ、齒には銀紙を張りつけ、それで飛び立たんばかりに毛の衣をふるひ、左右の耳をうちふる。これは流沙の地方から始めて萬里の遠き支那本土へやつて來たのである。

紫髯深目兩胡兒　鼓舞跳梁前致辭　應似涼州未陷日　安西都護進來時　須臾云得新消息　安西路絶歸不得　泣向獅子涕雙垂　涼州陷沒知不知　獅子回頭向西望　哀吼一聲觀者悲

字句解　紫髯　赤茶けたあごひげ。深目　おちくぼんだめ。胡兒　ゑびす、兒とあれども胡人のこと、こどもをいふに非ず。鼓舞　太鼓の音につれてをどる。跳梁　はねあがる。前まへ丶とすゝみでる。致辭　見物人の前に下の如き文句を申しだす。應似　此く〳〵なるさまに似てゐることでござりませう。應似の二字或は道是に作る、亦通ず、。涼州未陷日　涼州がまだ吐蕃の手でおちなかつたとき。安西都護　官名なり、唐の時今の新疆省の庫車の地に安西都護府を置く。進來　獻上すること。須臾　暫時にして。云　胡兒がいふなり。消息たより。路絶　兵亂のため道路の通せざるをいふ。涕雙垂　兩鼻より涕をたれる。涼州陷沒知不知　此一句は胡兒が獅子に向ていふ語なり、「おまへは涼州が吐蕃の方へ陷つてしまうた

ことを知つてゐるかどうか。」

〔義解〕別に目のひつこんだ赤ひげの胡人が二人、太鼓につれてをどりはねながら見物にもの申す、『御覽の此の獅子は涼州が土蕃に陷らなかつた時に安西都護が獻上した頃のさまに似てゐるでござりませうが』と。やがてまた語を繼いでいふ、『このごろ最近のたよりを得ましたに、安西の方は道路不通で歸ることができぬといふことです』と。そして泣きながら獅子の方をむいて水鼻をたれ『おまへは涼州が陷つたのを知つてゐるのか、ゐないのか』といふ。獅子は首を轉じて西方に向てながめる樣子をし一聲あはれに吼ゐる、之を觀る者みな悲しくおもふ。

貞元邊將愛此曲　醉坐笑看看不足　享賓犒士宴監軍　獅子胡兒長在目

〔字句解〕貞元　德宗の年號。邊將　邊地を守る將。此曲　この獅子舞の曲。享賓　享は饗應する。犒士　士卒をねぎらふ。監軍　軍を監督する役人、多く內官より出づ、監の字或は三に作る、三軍ならばその部下の全軍をさす。長在目　長とは常にといふが如し、「いつも」の意。

〔義解〕貞元年中の國境防備の將軍がこの獅子舞をこのんで醉ひつゝ坐し笑ひつゝ之を見てあくことを知らず、お客をもてなし士卒をいたはり監軍の人に酒宴をさゝぐるのにいつも〳〵この獅子や胡兒が眼からはなれぬ。

有一征夫年七十　見弄涼州低面泣　泣罷斂手白將軍　主憂臣辱昔所聞　自從天寶兵戈起　犬戎日夜吞西鄙　涼州陷來四十年　河隴侵將七千里

〔字句解〕征夫　征伐にきてゐるをとこ、從軍者の一人。弄　このわざを爲すをいふ。涼州　涼州獅子舞の伎をいふ。低面　おもてをふせて。斂手　手をあはせる、長官に對する敬禮の貌。白　申しあげる。將軍　すなはち上記の邊將。主憂臣辱　「史記」の「越世家」に范蠡の語に、臣聞、主憂臣勞、主辱臣死、とあり。白氏の語によれば「主人に憂ひごとあればその臣下までも恥辱を蒙る」といふ義なり、未だかゝる古語あるを聞かず、白氏或は誤用せしか、抑も本文の字に誤を傳へたるか、愚見を以てすれば臣の字を主に作るべきに似たり、。天寶　玄宗の年號。兵戈起　安祿山の亂の起りしをいふ。犬戎　吐蕃をさす。西鄙　西方の

僻地。涼州　涼州の地方をいふ。陷來　吐蕃の方へ陷つてよりこのかた。四十年　代宗の廣德二年西暦七六四に涼州は吐蕃の手に歸す、それより四十年を計算すれば德宗の貞元十八年西暦八〇二となる、此語によりて此の詩篇は貞元十八年頃の事を詠じたるものなることを知る。河隴　河は黄河、隴は甘肅省西部をいふ、但し黄河といふも甘肅に於ける黄河をさすものにして河隴にて甘肅西部を意味す。侵將　將は俗語モテ、モッテ、の義なるもこゝは侵の字に附屬す、二字にて侵略さるゝことをいふ、奪將が奪の字一つと同義なるがごとし。

〔義解〕ときに一人の七十歳ばかりの從軍者あり、獅子舞の演ぜらるゝを見て面をふせて泣き出したり、その泣きをはるや手をあはせてうや〳〵しく將軍に言上す、以下は征夫の言なり、主人に憂ひごとあればその臣下までも恥辱を蒙るとか聞きおよんでをりまする。かの天寶のとき安祿山の亂が起りましてから、吐蕃のゑびすどもがこちらの内亂につけこんで日となく夜となく西方の僻地を併呑いたしました。涼州が彼等の手に陷つてから四十年、河隴の地方彼等に侵さるゝこと七千里に達してをりまする。

平時安西萬里疆　今日邊防在鳳翔　緣邊空屯十萬卒　飽食溫衣閒過日，遺民腸斷在涼州　將卒相看無意收　天子每思常痛惜　將軍欲說合慙羞

〔字句解〕平時　ふだん、無事のとき、○安西　安西都護府の管轄する地方をいふ。萬里疆　疆は國境をいふ、萬里の遠くにある國境といふこと。疆の字或は彊に作る。彊は强と同じ、强とは餘といふがごとし、萬里あまり、萬里以上といふこと。孰れにても義は通ずれども彊がよろしかとおもはる。○邊防　邊地の防備。鳳翔　西安府の西が鳳翔府なり、白氏の注に見えたる隴州は鳳翔府の西北に位す、○緣邊　邊境にそうた一帶の地。閒過日　あそんで日時を費す。○遺民　もと支那本土人にして現に吐蕃の手に歸してゐる民。腸斷　はらわたのちぎれるおもひしてかなしむ。將卒　支那側の大將や兵卒。無意收　收とはどりかへして我が手に入れること、無意とはさういふ心がないこと。○合　まさに何々すべし。慙羞　はづる。

〔義解〕上の征夫の言のつゞき、

無事なりしときには安西地方は萬里の遠き處にある國境地であつたのに、今日ではすぐ都の西鄰地である鳳翔でもつて國防をするといふ有樣になつてゐる。國境に沿うた一帶の地方にいたづらに十萬の兵卒を駐屯させてあるが彼等は温たかい衣をきたらふく物をたべて爲すこともなく日をすごしてゐる。涼州ではのこつてゐる人民たちは吐蕃の屬地となつたことを悲

んで腸もちぎるゝばかりの思ひをしてゐるのに、こちらの將卒らはすこしも土地を回收してやらうといふ意はない。天子はこの事を思はるゝたびにいつもひどく惜んでをらるゝ。苟も國境防備の將軍たるものはこの事を口に說かんとするだも當然はづかしとおもふべきであるのだ。その土地を回收し能はぬことをはづるなり。

奈何仍看西涼伎　取笑資歡無所媿　縱無智力未能收　忍取西涼弄爲戲

〔字句解〕仍看　しきりにみる、後もまた前の如くにみる。取笑　それを見て笑をそこからもとむる。資歡　その伎を我が歡びの材料にする。收　回收する。忍　反語によむ。弄爲戲　その伎を弄んでたはむれとする。

〔義解〕征夫の言のつゞき、どうしていつも〳〵依然としてこの西涼の獅子舞を見て、自己のおもしろをかしさの材料に供してはづる所がないのであるか。自己に智力がないために土地を回收することができぬとならば、それはそれとしても、よくも〳〵獅子舞を以て之を演じて遊戲視するといふことができたもんだ、さうはできぬはずなのだが。

〔第二十六〕　八駿圖

誡奇物　懲佚游也

穆王八駿天馬駒　後人愛之寫爲圖　背如龍兮頸如象　骨竦筋高脂月壯

〔題意〕此詩は奇妙な物を貴ぶことを戒め、遊びにふけることを懲らすために作つたものである。

〔字句解〕穆王　周の武王より第五代の王なり。八駿　八匹のすぐれた馬、「穆天子傳」に赤驥・盜驪・白義・踰輪・山子・渠黃・驊騮・綠耳の名をあぐ。天馬　漢の武帝の時に大宛國に產した名馬、その馬の種が天より降ると考へられたるにより天馬といふ、。駒　わかごま、此處に天馬駒といふは天馬の樣な名駒といふ意なり。象　象の字或は鳥に作る、今鳥に從ふ。竦　あがる、骨あがるとはふしこぶだつをいふ。筋高　筋のたくましきこと。脂月　脂はアブラ、月は肉なり、。壯　壯の字或は少に作る、今少に從ふ。

〔義解〕周の穆王が愛乘したといふ天馬のやうな八匹の駿馬、それを後世の人が好んで圖畫に

こしらへた。それを見ると背は龍の如く。頸すぢは烏の如く、筋骨たくましくしてあぶらや肉は少い。

日行萬里疾如飛　穆王獨乘何所之　四荒八極踏欲遍　三十二蹄無歇時
屬車軸折趁不及　黃屋艸生棄若遺

字句解　四荒　四方の遠地。八極　八方のはて。遍　あまねし、のこりなく、。三十二蹄　八匹をいふ。歇　休息すること。屬車　おともの車。趁　あとからおふ。黃屋　車蓋の裏面に黃色のうすぎぬを張る、因て天子の車のほろを黃屋といふ。遺　ほつておく、

義解　穆王は此の八匹の駿馬を驅りて天下を遊歷した。その一日に行くこと萬里、疾きことは飛ぶが如くである。穆王たけがこのはやい馬に乘つた所がさて如何なる所へゆくのであるか。四方八方盡く踏まぬ處もなくならんとしてまだ三十二の蹄はやすむ時がない。隨伴の車は軸が折れてしまつてあとからおひつくことはできず、その車蓋は打ち棄てたる如く道路にほつてあつて草がその上に生へてゐる。

瑤池西赴王母宴　七廟經年不親薦　璧臺南與盛姬遊　明堂不復朝諸侯

白雲黃竹歌聲動　一人荒樂萬人愁

字句解　此詩の穆王の話は「穆天子傳」の記事を用う。因て該書によりて解釋すべし。瑤池　池の名、西王母の居る處にあり、。王母　西王母なり、。七廟　周の制、天子は七廟を建つとす、以て祖宗以下を祭る、七廟の何々なるやは諸說區々たり。經年　幾年をもへて。親薦　天子自身に供物をすゝめる。璧臺　重璧之臺なり、。盛姬　盛伯の女。明堂　天子が諸侯を會し政令を敷く處なり。朝　天子の朝廷へまかりでる。白雲黃竹　歌の名なり。「穆天子傳」に天子が西王母を瑤池の宴にまねいたとき西王母が天子のために謠うた辭がある。それは白雲在天　山陵自出　道里悠遠　山川間之　將子無死　尙能復來　といふのである。是が白雲の謠、また大寒風雪にあひて凍える人があつたとき天子が民を哀れにおもふ意をのべた詩三章を作つた。その一は我徂黃竹（黃竹は地名なり）□員云（云と同じ）閟寒　帝收九行（注、牧羅九行之道里）嗟我公侯百辟冢卿　皇我萬民　旦夕勿忘　といふのである、是が黃竹の歌である。。一人　穆王をいふ。荒樂　すさみたのしむ。

義解　穆王は瑤池を指して西の方西王母の宴に赴き祖先の七廟に年經ても親らさゝげ物をせず、璧臺でもつて南の方盛姬と遊び、明堂に諸侯を參朝させるやうなことをしなかつた。そ

うして王母は「白雲」をうたひ、穆王は「黃竹」をうたひなどして一人が樂みにふけつてゐるまに天下の萬民は愁にしづんでゐた。

周從后稷至文武　積德累功世勤苦　豈知纔及五代孫　心輕王業如灰土

字句解　后稷　周の先祖なり。文武　文王、武王。五代孫　周の王位の順は文王よりかぞへて文・武・成・康・昭・穆のごとし、穆王は武王よりかぞへて五代めの王なり。王業　帝王たるの事業。灰土　價なきものをいふ。

義解　周は先祖后稷から文王武王まで德を積み功を累ねて代々難儀をして來たが、意外にもたつた五代めの孫穆王になつてその心に帝王の業を輕んずることを灰や土の如くするやうになつた。

由來尤物不在大　能蕩君心卽爲害　文帝却之不肯乘　千里馬去漢道興
穆王得之不爲戒　八駿駒來周室壞

字句解　尤物　「左傳」昭公廿八年に見ゆ、尤とは異なり、尤物とは非常なる美人のこと、夏姬といへる婦人をさせるなり、こゝは美人に限らず、廣くいへり。○不在大　その物の大なるを主とせず。蕩　うごかす、とらかす、しまりなくすること。卽爲害　それが卽ち害である。文帝千里馬　漢の孝文帝の時千里の馬を獻ずるものあり、詔して曰く、鸞旗在前　屬車在後吉行日五十里　師行日三十里　朕乘千里之馬　獨先安之　と、是に於て馬を還へす。却しりぞくる。漢道　漢の政道をいふ。得之　之とは千里馬をさす。周室　周の王室。

義解　元來奇異なものといふものはそれが必しも大なる者であることを主とするものではない、たとひ瑣細なものであつてもそれが君たるものゝ心をしまりなくする樣なものであれば卽ちこれ有害物である。昔漢の孝文帝は千里の馬が來たけれども之を退けてお乘りにならなかつたから、その馬が去つて漢の政道は振ひ興つた。之に反して周の穆王の方は八駿の駒を得て戒とせなかつたから、その駒來て周の王室は破壞さるゝ樣になつた。

至今此物世稱珍　不知房星之精下爲怪　八駿圖　君莫愛

字句解　此物　千里馬をさす。房星之精　「爾雅」に天駟房也、注に龍爲天馬、故房四星、謂之天駟　とあり、「廣韻」に房駟之精　降爲駿駜　とみゆ、房星が駟馬または龍の形貌を爲す所より地上の馬はその星が降つてできたものだといふ考を起すに至りしなり。○君　一